

平成24年度  
業務年報



Annual Report 2012

Fukushima Agricultural Technology Centre

福島県農業総合センター



# 目 次

## I 農業総合センターの概要

1 機能と沿革	I	1
2 所在地	I	2
3 組織及び事務の概要	I	3

## II 技術開発・企画調整

1 試験研究課題一覧	II	1
2 共同研究、受託研究一覧	II	4
3 試験研究の概要	II	5
A 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得の向上	II	5
B 競争力と個性のある県産農林水産物のブランドの確立	II	10
C 自然・環境と共生する農林水産業の推進	II	13
D 農林水産資源を活用した地域産業の6次化の推進	II	15
E 緊急課題	II	16
緊急課題解決試験	II	21
4 試験設計・試験成績検討会の開催状況	II	22
5 試験研究成果の公表	II	22
(1) 試験研究成果一覧	II	22
ア 普及に移しうる成果	II	22
イ 参考となる成果	II	23
ウ 放射線関連支援技術情報	II	24
(2) 東北農業研究成果情報	II	26
6 品種登録・職務発明	II	27
7 技術開発に伴う表彰・学位取得	II	27
8 有識者懇談会の開催	II	27
9 試験研究推進会議の開催	II	28
10 所内ゼミ	II	28

## III 地域農業支援

1 技術移転・技術支援	III	1
(1) 高度技術移転現地実証の取り組み	III	1
(2) 農業総合センター技術移転セミナーの開催	III	1
(3) 技術支援（鳥獣害防止対策）	III	2
2 指導・啓発活動	III	3
(1) 研修会	III	3
(2) 技術指導資料	III	7
(3) 技術相談対応件数	III	8
3 主要農作物種子生産実績	III	9
4 オリジナル品種の親株等の供給実績	III	10

5 家畜管理及び生産実績	Ⅲ	11
(1) 畜産研究所本所	Ⅲ	11
ア 家畜繫養実績	Ⅲ	11
イ 各家畜繫養状況	Ⅲ	13
ウ 各種生産実績	Ⅲ	14
(2) 養鶏分場	Ⅲ	16
(3) 沼尻分場	Ⅲ	17

#### IV 先進的農業者育成・支援

1 農業短期大学の業務実績	Ⅳ	1
(1) 概要	Ⅳ	1
(2) 農学部取り組み	Ⅳ	1
ア 農業への意欲の高い人材育成のための教育内容の充実	Ⅳ	1
イ 時代のニーズに対応した学科について	Ⅳ	2
ウ 農業総合センターを活用した教育の充実	Ⅳ	2
エ その他農学部の教育の内容と成果	Ⅳ	2
オ 学生数	Ⅳ	3
カ 教育科目	Ⅳ	4
キ 非常勤講師一覧	Ⅳ	6
ク 教育行事経過	Ⅳ	7
ケ 各種資格取得状況	Ⅳ	8
コ 卒業生の進路状況	Ⅳ	8
(3) 研修部の取り組み	Ⅳ	9
ア 研修実施状況	Ⅳ	9
イ 研修実績	Ⅳ	9
2 研修生・講習生の受け入れ	Ⅳ	13

#### V 食の安全・環境にやさしい農業支援

1 安全農業推進部の業務実績	Ⅴ	1
(1) 指導・有機認証課の業務	Ⅴ	1
ア 農薬に関する業務	Ⅴ	1
イ 農作物の野生鳥獣被害とりまとめ	Ⅴ	1
ウ 肥料に関する業務	Ⅴ	2
エ 飼料に関する業務	Ⅴ	3
オ 有機認定に関する業務	Ⅴ	3
(2) 発生予察課の業務	Ⅴ	5
ア 病害虫発生予察事業	Ⅴ	5
イ 病害虫診断同定	Ⅴ	5
ウ ミバエ類等侵入警戒調査事業	Ⅴ	5
エ ウメ輪紋ウイルス (plum pox virus) の発生状況調査	Ⅴ	5
オ 主要病害虫の発生状況	Ⅴ	6
(3) 分析課の業務	Ⅴ	10





# I 農業総合センターの概要

## 1 機能と沿革

### (1)機能

福島県農業総合センターは、農業関係の試験研究機関、病虫害防除所、肥飼料検査所及び農業短期大学校を再編統合し、5つの機能(ア 技術開発・企画調整機能、イ 地域農業支援機能、ウ 先進的農業者育成・支援機能、エ 食の安全・環境にやさしい農業支援機能、オ 県民との交流・情報発信機能)を兼ね備えた本県農業振興の新たな拠点として平成18年4月郡山市日和田町に開所した。

#### ア 技術開発・企画調整機能

共通研究部門(経営・作業技術・生物工学・生産環境)、専門研究部門(水田畑作・園芸・果樹・畜産)、地域研究部門(会津・浜)が緊密に連携し、統合集中化のメリットを最大限に発揮することにより、実用性の高い技術の迅速かつ効率的な開発に取り組む。

#### イ 地域農業支援機能

地域農業を支援するため、既存の技術のみでは解決が困難な地域の課題に対し、現地の普及指導員、農業者、農業団体及び市町村等と共同して解決にあたる。

#### ウ 先進的農業者育成・支援機能

先進的な技術や最新の知見を営農条件に合った形に組み立て、実用的な新技術として生産現場に適応させることにより、複雑化・高度化する生産現場の課題解決の迅速化を図る。

農業教育面では、農業短期大学校と一体的に地域を先導する農業後継者の育成にあたる。

#### エ 食の安全・環境にやさしい農業支援機能

農業の振興には、環境に配慮し、消費者のニーズを重視して農産物を生産してゆくことが重要であるため、農業生産面からの環境保全や農薬等生産資材の適正使用の推進、農産物の安全性の確保に積極的に取り組む。また、県内における有機農業の普及拡大を強力に支援する。

#### オ 県民との交流・情報発信機能

センター整備の基本理念の一つである「開かれた試験研究機関」を具現化し、県民の様々な期待に応えられる交流・学習拠点としての役割を果たすため、県民の憩いの場や、子供たちの農業体験や食農教育、高齢者等の生涯学習等の機会を提供する。

### (2)沿革

明治29年(1896年)安積郡小原田村(現郡山市小原田)に農事試験場を創設(後の農業試験場)

明治34年(1901年)安達郡高川村(現郡山市熱海町)に種馬飼育場を設置(後の畜産試験場)

大正3年(1914年)伊達郡梁川町(現伊達市)に原蚕種製造所を設置(後の蚕業試験場)

大正7年(1918年)河沼郡若宮村(現河沼郡会津坂下町)に農事試験場特別試験地を創設(後の農業試験場会津支場)

大正14年(1925年)田村郡片曾根村(現田村市)にたばこ試験場を設置

昭和10年(1935年)信夫郡平野村(現福島市飯坂町)に農事試験場信達分場を設置(後の果樹試験場)

昭和10年(1935年)西白河郡矢吹町に県立修練農場を設置(後の農業短期大学校)

昭和10年(1935年)相馬郡八幡村(現相馬市成田)に農事試験場相馬水稻試験地を創設(後の農業試験場相馬支場)

昭和11年(1936年)郡山市に種鶏場を設置(後の養鶏試験場)

昭和27年(1952年)県内16ヶ所に病虫害防除所を設置

昭和37年(1962年)福島市に肥飼料検査所を設置

平成18年(2006年)農業試験場、果樹試験場、たばこ試験場、畜産試験場、養鶏試験場の試験研究機関と、農業短期大学校及び病虫害防除所、肥飼料検査所を再編統合し、福島県農業総合センターが発足



## 2 所在地

福島県農業総合センター

〒963-0531

郡山市日和田町高倉字下中道116番地

TEL : 024-958-1700 FAX : 024-958-1726

同 果樹研究所

〒960-0231

福島市飯坂町平野字壇の東1番地

TEL : 024-542-4191 FAX : 024-542-4749

同 畜産研究所

〒960-2156

福島市荒井字地蔵原甲18番地

TEL : 024-593-1096 FAX : 024-593-4977

同 畜産研究所 養鶏分場

〒963-8041

郡山市富田町字満水田2番地

TEL : 024-932-1678 FAX : 024-932-1679

同 畜産研究所 沼尻分場

〒969-2752

耶麻郡猪苗代町大字蚕養字日影山乙3696番地

TEL : 0242-64-3321 FAX : 0242-64-2844

同 会津地域研究所

〒969-6506

河沼郡会津坂下町大字見明字南原881番地

TEL : 0242-82-4411 FAX : 0242-82-4416

同 浜地域研究所

〒979-2542

相馬市成田字五郎右ヱ門橋100番地

TEL : 0244-35-2633 FAX : 0244-35-0319

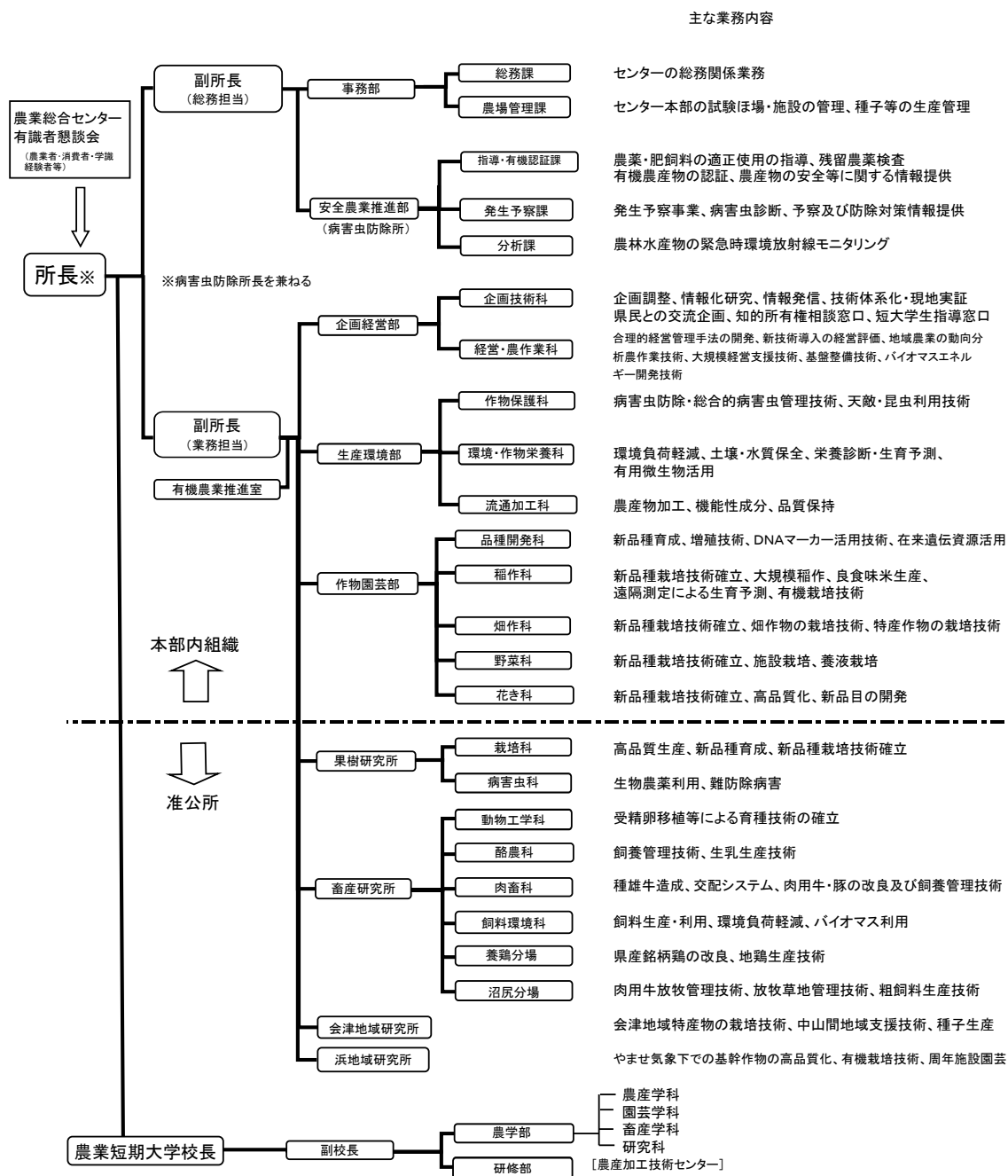
同 農業短期大学校

〒969-0292

西白河郡矢吹町一本木446番地1

TEL : 0248-42-4111 FAX : 0248-44-4553

### 3 組織及び事務の概要



## Ⅱ 技術開発・企画調整

1 試験研究課題一覧

課題区分	試験課題名(大課題名)	試験期間	担当部署	備考
<b>A 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得の向上</b>				
<b>A1 安全・安心な農林水産物生産技術の確立</b>				
A1 - 1	野菜等におけるPOP sのリスク低減技術の開発	H20 - H24	環境作物	独法委託
A1 - 2	安全・安心な農産物生産のための有害成分分析の簡易迅速化	H23 - H26	環境作物	県単
A1 - 3	安全で効率的な新農業・新資材等の実用化	H23 - H26	作物保護、病害虫、環境作物、稲作、畑、野菜、会津、浜	委託(植防協会)
A1 - 4	安全な有機物の利活用技術確立	H24 - H26	環境作物	県単
<b>A2 農林水産物の安定供給技術の確立</b>				
A2 - 1	簡易型転落・転倒防止装置の開発	H23 - H26	経営	県単(全庁重点事業)
A2 - 2	新奇・難防除病害虫の効率的防除技術の開発	H23 - H26	作物保護	県単
A2 - 3	発生子察の手法検討委託事業	H22 - H26	作物保護、病害虫	独法委託
A2 - 4	被害リスクに応じたウリ科野菜ホモシス根腐病の総合防除技術の確立	H22 - H24	作物保護、野菜、企画	委託(実用技術)
A2 - 7	果樹病害虫の防除法改善に関する試験	H23 - H26	病害虫	県単
A2 - 8	果樹における樹種共通防除体系の確立	H23 - H26	病害虫	県単
A2 - 9	晩霜害の危険度評価に基づく効率的な防霜対策の実証	H22 - H24	栽培	独法委託
A2 - 10	果樹の安定生産を支援する発育予測技術の構築及び生育障害対応技術の確立	H23 - H26	栽培	県単
A2 - 12	飼料用米等水田を活用した肉用牛の飼養管理技術の開発	H22 - H26	肉畜	委託(国産飼料プロ)
A2 - 14	初破砕米等飼料用米を活用した肥育豚の飼養管理技術の開発	H22 - H26	肉畜	委託(国産飼料プロ)
A2 - 17	リンゴ、ナシ産地を蝕む「ヒメボクトウ」に対する複合的交信かく乱防除技術の開発	H23 - H25	病害虫	委託(実用技術)
A2 - 19	根部エンドファイト活用によるアスパラガス連作障害回避技術体系の開発	H23 - H25	品開	委託(実用技術)
A2 - 20	震災が農業経営に及ぼした影響と営農支援策の検討	H23 - H24	経営	委託
A2 - 21	「FOEAS」を活用した津波被害地域農業生産システムの高度化	H24 - H26	経営	イノベーション創出基礎的研究推進事業、一部県単
A2 - 22	転戸スラグによる土壌pH矯正を核としたフザリウム性土壌病害の耕種的防除技術の開発	H24 - H26	作物保護、企画	実用技術
<b>A3 省力化・高品質化等の生産技術の確立</b>				
A3 - 1	汎用化水田における排水管理技術の確立	H23 - H26	経営、畑作、野菜	基金繰入金(中山間ふるさと水と土基金)
A3 - 2	園芸作業の軽労化に向けた農機具の開発	H23 - H26	経営	県単
A3 - 5	寒冷地における地域有機質資材活用による飼料用米低コスト多収生産技術の確立	H22 - H26	稲作、浜	委託(国産飼料プロ)
A3 - 6	主要農作物生育解析調査研究	H23 - H26	畑作、稲作、会津、浜	県単
A3 - 7	県産米の高品質化・良食味米生産のための栽培管理技術の確立	H23 - H26	稲作、会津、浜	県単
A3 - 9	有機物を活用した大豆の高品質・多収栽培法の確立	H23 - H26	畑作	県単
A3 - 10	福島の顔となる主要野菜の高品質・安定生産技術の確立	H23 - H26	野菜	県単
A3 - 11	地域振興野菜の安定生産技術の確立	H23 - H26	野菜、作物保護	県単
A3 - 13	主要野菜の栽培に適した有機質肥料活用型養液栽培技術の実用化	H22 - H24	野菜、流通	委託(実用技術)
A3 - 14	花持ち保証に対応した切り花品質管理技術の開発	H22 - H24	花き、流通	委託(実用技術)
A3 - 15	福島の顔となるリンドウの高収益を実現する安定生産技術の確立	H23 - H26	花き、会津、浜	県単
A3 - 16	地域の特色のある花き生産技術の確立	H23 - H26	花き	県単
A3 - 17	環境制御と施肥量削減による低コスト花き生産技術の確立	H23 - H26	花き	県単
A3 - 18	ナシのジョイント技術等による省力・高生産性栽培技術体系の確立	H23 - H26	栽培	県単
A3 - 19	モモ・リンゴの低樹高化による省力・高生産性栽培技術の確立	H23 - H26	栽培	県単
A3 - 20	モモ連作障害を克服する台木の選定と栽培管理技術の確立	H23 - H26	栽培	県単
A3 - 21	生涯生産性の向上を目指した乳牛の飼養管理技術の確立	H23 - H26	酪農	県単・独法委託
A3 - 25	会津地域における低コスト・高品質米のための栽培管理技術の確立	H23 - H26	会津	県単
A3 - 26	会津地域の特色を活かした野菜・花きの高品質安定生産技術の確立	H23 - H26	会津	県単
A3 - 27	寒冷地特性を活用した国産アスパラガスの周年供給を実現する高収益システムの確立	H21 - H23	会津、浜	委託(実用技術)
A3 - 28	会津地域における果樹の省力安定生産技術の確立	H23 - H26	会津	県単
A3 - 29	浜通りにおける米の高品質・安定生産に向けた技術の確立	H23 - H26	浜	県単
A3 - 30	浜通りにおける大豆、麦類の高品質・安定生産に向けた技術の確立	H23 - H26	浜	県単
A3 - 31	浜通り気象条件下における野菜の生産振興支援技術開発	H23 - H26	浜	県単
A3 - 32	浜通り気象条件下における花きの生産振興支援技術開発	H23 - H26	浜	県単
A3 - 33	葉たばこ特別調査	H23 - H24	畑作	委託(たばこ耕作組合)

課題区分	試験課題名（大課題名）	試験期間	担当部所	備考
<b>B 競争力と個性のある県産農林水産物のブランドの確立</b>				
<b>B 1 本県に適した品種開発・家畜の改良</b>				
B1 - 1	県オリジナル水稲品種の育成	H23 - H26	品開	県単（事業）
B1 - 2	新需要対応オリジナル水稲品種の育成	H22 - H26	品開、浜	拠出金（JA全農福島）
B1 - 3	県オリジナル野菜品種の育成	H23 - H26	品開	県単（事業）
B1 - 4	県オリジナル花き品種の育成	H23 - H26	品開	県単（事業）
B1 - 5	オリジナル品種育成効率化のための支援技術開発	H23 - H26	品開	県単
B1 - 6	奨励品種決定調査	H23 - H26	稲作、畑作、会津、浜	県単（事業）
B1 - 7	系統適応性検定試験	H23 - H26	畑作	委託
B1 - 9	トルコギキョウ品種特性調査	H23 - H26	花き	受託
B1 - 10	果樹の新品種育成	H23 - H26	栽培、会津	県単（事業）
B1 - 11	果樹系統適応性検定試験	H23 - H26	栽培、会津	委託
B1 - 12	胚移植技術を利用した高能力肉用牛の効率的生産技術の確立	H23 - H26	動物工学	県単
B1 - 13	DNA情報を活用した家畜の育種改良技術の確立	H23 - H26	動物工学、肉畜	県単（事業）
B1 - 15	県産銘柄鶏の改良と開発	H23 - H26	養鶏	県単（事業）
B1 - 16	「ブランド福島牛」を確立する本県産黒毛和種種雄牛の作出	H23 - H26	肉畜、沼尻	県単（事業）
B1 - 17	耐寒性といもち病抵抗性を兼ね備えた極良食味及び業務用米品種の開発とその普及	H23 - H25	稲作、浜	委託（実用技術）
B1 - 18	麦類系統適応性検定試験	H23 - H26	畑作	委託（独法）
B1 - 19	耐病性品種の開発と緑肥輪作等を活用した環境保全型こんにやく低コスト生産体系の確立	H23 - H25	畑作	委託（実用技術）
B1 - 20	食料自給率向上を目指した豆類優良品種の育成	H23 - H25	会津	委託（実用技術）
<b>B 2 開発品種・改良した家畜の利活用技術の確立</b>				
B2 - 2	競争力のある県産農畜産物の生産拡大へ向けた調査研究	H23 - H26	経営	県単
B2 - 3	県オリジナルブドウ品種「あづましずく」の省力・高品質安定生産技術の確立	H23 - H26	栽培	県単
B2 - 4	本県オリジナル品種・新品種・一般品種の生育及び栽培特性調査	H23 - H26	栽培	県単
B2 - 5	自給飼料活用による地鶏生産方式の確立	H22 - H26	養鶏	県単・独法委託
B2 - 6	県オリジナルソバ品種「会津のかおり」ブランド確立のための品質向上技術の確立	H23 - H26	会津	県単
B2 - 7	品種・母本の遺伝子データベース構築による果樹育種の効率化	H23 - H26	栽培	県単
<b>B 3 優良種苗・種畜を安定的に供給するための技術確立</b>				
B3 - 1	県オリジナル品種の優良原種苗生産技術の開発	H23 - H26	品開	県単
B3 - 2	「フクシマD桃太郎」の開放型育種	H23 - H26	肉畜	県単
<b>C 自然・環境と共生する農林水産業の推進</b>				
<b>C 1 農林水産業における資源の循環利用のための技術確立</b>				
C1 - 1	省資源型農業の生産技術体系の確立（有機農業型）	H21 - H25	作物保護	独法委託
C1 - 3	果樹園での資源循環利用と環境負荷軽減技術の確立	H20 - H27	環境作物	県単
C1 - 4	水稲の有機・特別栽培における総合的な雑草防除技術の開発	H23 - H26	稲作、会津、浜	県単
C1 - 5	多様な栽培条件下の有機JAS認定ほ場における水稲・大豆有機輪作体系の現地実証	H20 - H24	畑作、稲作、浜	独法委託
C1 - 7	ナタネの安定生産技術と飼料利用法の確立	H23 - H26	畑作、会津、経営、畜産	県単
<b>C 2 環境負荷低減と農林水産業の持つ多面的機能を発揮させるための技術確立</b>				
C2 - 1	生態系配慮施設の維持管理手法の確立	H22 - H24	経営	基金繰入金（中山間ふるさと水と土基金）
C2 - 2	鳥獣被害対策技術及び抑制実施手法の確立	H22 - H24	企画	基金繰入金（中山間ふるさと水と土基金）
C2 - 3	天敵生物等を利用した化学合成農薬低減技術の開発	H23 - H26	作物保護	県単
C2 - 4	総合的病害虫管理（IPM）による環境負荷軽減生産技術の開発	H23 - H26	作物保護	県単
C2 - 5	定植前施用による野菜のリン酸施肥削減技術の確立	H21 - H25	環境作物	委託（気候変動対策プロ）
C2 - 7	果樹における生物資源を活用した環境調和型病害虫防除技術の開発	H23 - H26	病害虫	県単
C2 - 9	果樹園における土着天敵の活用技術の開発と天敵供給源としての役割の解明	H24 - H27	病害虫	委託（土着天敵プロ）
C2 - 10	食料生産地域再生のための先端技術展開事業（施設園芸栽培の省力化・高品質化実証研究）	H24 - H29	病害虫	委託（食料生産地域再生のための先端技術展開事業）

課題区分	試験課題名（大課題名）	試験期間	担当部所	備考
<b>C3 地球温暖化に対応するための技術確立</b>				
C3 - 1	全国規模の農地土壌炭素等の実態調査	H20 - H24	環境作物	委託（事業）
C3 - 2	有機物の分解促進が温室効果ガス発生量に及ぼす影響解明	H22 - H26	環境作物	委託（気候変動対策プロ）
C3 - 3	有機質資材施用による畑地からの亜酸化窒素発生調査	H22 - h24	環境作物	委託（事業）
C3 - 4	リング園等における長期連用試験の土壌炭素変動実態の解析	H22 - H26	環境作物	委託（気候変動対策プロ）
C3 - 6	温暖化の進行がカメムシ類の発生環境と斑点米被害に及ぼす影響解明	H22 - H26	作物保護	委託（気候変動対策プロ）
C3 - 7	地球温暖化対応農業生産システム確立事業	H20 - H24	企画、稲作、花き、野菜、果樹	県単（全庁重点事業）
<b>D 農林水産資源を活用した地域産業の6次化の推進</b>				
<b>D1 地域資源の再評価と素材化のための技術開発</b>				
D1 - 1	地域産業の6次化推進のための担い手の成立条件と管理手法の確立	H23 - H26	経営	県単
D1 - 2	養蚕・葉たばこによる中山間地域の振興支援技術の開発	H23 - H26	畑作	県単
D1 - 3	バイオエタノール原料としてのバイオマス資源作物の実用性の解明	H24	経営	県単
<b>D2 果産農林水産物の高付加価値化及び商品化のための技術開発</b>				
D2 - 1	地域産業6次化推進のための県産農産物の加工技術の開発	H23 - H26	流通、畑作	県単
D2 - 2	ブランド力強化のための地鶏生産、流通、加工利用技術の確立	H23 - H26	養鶏	県単
D2 - 3	地域産業6次化推進のための県産農産物の品質保持技術の確立	H23 - H26	流通	県単
<b>E 緊急課題</b>				
<b>E1 放射性物質除去・低減技術開発事業</b>				
E1 - 1	放射性物質の分布状況の把握	H23 -	生産、作物、企画、果樹、畜産	
E1 - 2	放射性物質の簡易推定法の開発	H23 -	畜産	
E1 - 3	放射性物質の吸収量の把握	H23 -	作物、生産、果樹、畜産、浜	
E1 - 4	放射性物質の除去・低減技術の開発	H23 -	作物、生産、果樹、畜産、浜	
E1 - 5	放射性物質吸収抑制技術の開発	H23 -	作物、生産、果樹、畜産、会津、浜	
E1 - 6	農産物における放射性物質の除去技術の開発	H23 -	生産	
E1 - 7	農作業における放射線被曝低減技術の開発	H23 -	企画、果樹	
<b>緊急課題解決試験</b>				
	春季モモ枯死症の発生要因解明	H24	果樹	
	バイオエタノール原料としてのソルガムの地域適応性試験	H24	畑作科、畜産、浜	

## 2 共同研究、受託研究一覧

### (1) 福島県農林水産部共同研究

- ・イネ低温出芽性マーカーの開発に関する研究（(独) 農業生物資源研究所）
- ・繁殖和牛生体から「と体」筋肉中の放射性セシウム濃度を推定する技術の開発（(株) コムテックエンジニアリング、(株) 日本環境調査研究所、(株) ラド・ソリューションズ、東北大学、福島大学）
- ・ゲノム情報を活用した会津地鶏の生産効率の改善と普及展開による地域経済の活性化（(独) 農研機構畜産草地研究所、(株) 会津地鶏ネット）

### (2) 共同研究

- ・福島県内で飼養される家畜の放射線（能）被ばく影響調査（(独) 放射線医学総合研究所）
- ・高吸収植物（ソルガム）を利用した放射性物質の土壌浄化技術の開発（(株) アースノート）
- ・バイオエタノール原料としてのソルガムの地域適応性試験（(株) アースノート）
- ・低濃度の放射性セシウム含有環境水が野菜等に及ぼす影響評価（(独) 産業技術総合研究所）
- ・福島県の農地における放射能汚染の実態解明と除去低減技術の開発（(独) 農業環境技術研究所）
- ・放射性核種分析用 3 M<sup>TM</sup>エムポア<sup>TM</sup>ラドディスクを用いた農業用水の放射性セシウム濃度測定（住友スリーエム株式会社）
- ・作物における放射性物質の吸収量の解明（学習院大学）
- ・トラクタの転倒通報装置、転倒警告装置の開発（アサヒ電子株式会社）
- ・高機動型果樹用高所作業台車の現地実証試験（(独) 農研機構生物系特定産業技術研究支援センター）

### (3) 福島県農林水産部受託研究

- ・トルコギキョウ品種特性調査（(社) 日本種苗協会）

### 3 試験研究の概要

#### A 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得の向上

##### A1 安全・安心な農林水産物生産技術の確立

###### A1-1 野菜等における POPs のリスク低減技術の開発

ディルドリン残留ほ場で吸収能力の高いズッキーニを連作したところ、4作で25%のディルドリンを吸収浄化することができた。さらに、その跡地で栽培したきゅうりの果実中ディルドリン濃縮係数(果実中濃度/試験前土壌中濃度)はズッキーニ無作付区と比べ、30%程度低減できた。

###### A1-2 安全・安心な農産物生産のための有害成分分析の簡易迅速化

カドミウム用に開発された安価な分析機器(イムノクロマト)を用いた野菜中カドミウムの簡易分析法を検討した。本年度はハウレンソウの分析法について検討し、イムノクロマトによる試料中のカドミウム濃度の推定が可能と考えられた。

###### A1-3 安全で効率的な新農薬・新資材等の実用化

###### (1)新農薬の効率的利用法

水稲、野菜、果樹及びたばこの殺菌剤及び殺虫剤106剤、水稲除草剤30剤の防除試験を実施した。

###### (2)新資材・肥料の効率的利用法

水稲、野菜、果樹及びたばこの新資材及び肥料18剤の効率的利用法について検討を行った。

###### A1-4 安全な有機物の利活用技術確立

震災の影響で有機物の確保が困難となり地力及び生産性の低下が懸念されるため、規制値(400Bq)程度の放射性セシウムを含む堆肥を用いてコマツナを栽培して吸収量を調査した。また新たな有機物としてメタン発酵消化液の利用法を検討した。

#### A2 農林水産物の安定供給技術の確立

##### A2-1 簡易型転落・転倒防止装置の開発

トラクタに取り付けたスマートフォンで、トラクタの転倒を認識でき、転倒時にメールを送信できるアプリケーションソフトウェアを開発した。

##### A2-2 新奇・難防除病害虫の効率的防除技術の開発

165件の診断依頼に対応した。いわき地方において県内で初めてトマト黄化病(ToCV)の発生が確認されたほか、昨年に続き県南地方などで発生したToMV新系統については、栃木県での系統と遺伝子配列が99%相同することがわかった。

エンドファイトに感染したイタリアンライグラスを栽培したが、斑点米カメムシ類の数は対照区に対し有意差は無かった。

ウコンノメイガに寄生する糸片虫はフクラスズメにも寄生が確認された。

大豆ほ場でのマメシンクイガの発生は9月上旬に大きなピークが確認された。

ハクサイダニの越夏卵に対してカーバムナトリウム塩液剤、ほ場試験でペルメトリン乳剤及びククロルフェナピル水和剤の効果が確認できた。

焼酎粕加工液処理の地上部萎凋、根の発病については平均防除価が0となり、防除効果は認められなかった。

ユキヤナギハマキフシダニによる葉縁巻はMEP乳剤散布により減少するが、8月以降の被害に対する防除の必要性を確認した。

リンドウのアカスジキイロハマキは年3化、枯れ葉での越冬が考えられた。

カラー及びリンドウに寄生していたヒラズハナアザミウマの薬剤感受性について試験を行った、死虫率の低い薬剤もあった。

##### A2-3 発生予察の手法検討委託事業

穂いもち発生状況の簡易調査法の精度検証を行い、穂いもち簡易調査マニュアルを改訂した。

穂いもち版BLASTAMと気象予報データを使って防除要否の判断を行う指標(案)を作成した。



梨病害防除ナビゲーション（千葉県開発）適合性が前年度より継続して確認され、成果として発表した。  
ナシヒメシンクイのフェロモントラップに代わる発生予察手法として、バンドトラップとモモ芯折れ調査の実用性を明らかにした。

#### A2-4 被害リスクに応じたウリ科野菜ホモプシス根腐病の総合防除技術の確立

キュウリホモプシス根腐病による萎凋症状による被害が顕在化していないほ場の被害リスクを推定するための生物検定法を推定し、ホモプシス根腐病被害回避マニュアル（案）を作成した。

#### A2-7 果樹病害虫の防除法改善に関する試験

病害関係では、モモせん孔細菌病の抗生物質に対する感受性検定やモモ果実赤点病の時期別果実感受性の違いについて明らかにした。害虫関係では、合成ピレスロイド剤に抵抗性を有するモモアカアブラムシ個体群の発生を確認した。伊達市保原町のスモモほ場におけるスモモヒメシンクイ発生盛期は、越冬世代が5月6半旬、第1世代が7月3半旬、第2世代が8月3半旬、第3世代が9月4半旬であった。

#### A2-8 果樹における樹種共通防除体系の確立

リンゴとモモの共通防除体系について、現地で実証試験を約100haに規模拡大して実施した。モモとナシの共通防除体系について所内試験及び現地試験を実施し、ナシ黒星病、ナシ輪紋病、ナシヒメシンクイ、カイガラムシ類、ハダニ類などに対しナシ慣行防除体系と同等の防除効果が認められた。

#### A2-9 晩霜害の危険度評価に基づく効率的な防霜対策の実証

昨年までの生育ステージごとの凍霜害危険度予測モデル（凍霜害発生確率表示）を基に霜害防止マニュアルを作成した。

#### A2-10 果樹の安定生産を支援する発育予測技術の構築及び生育障害対応技術の確立

モモ、ナシ、リンゴ、ブドウで生育データの集積を行った、モモ、ナシでは7月8月の高温乾燥により果実肥大が不良となり、リンゴでは日焼け果やビターピット症状が発生した。今後も生育予測法の確立のために継続してデータを蓄積する。

#### A2-12 飼料用米等水田を活用した肉用牛の飼養管理技術の開発

離乳から出荷までの飼養全期間、配合飼料のTDN換算で35%まで圧ぺん粳を代替給与しても嗜好性や発育、肉質は低下しないことを明らかにした。

#### A2-14 粳破碎米等飼料用米を活用した肥育豚の飼養管理技術の開発

トウモロコシの代替で粳米を30%配合した飼料を肥育全期間（体重30-110kg）に給与しても飼養成績及び枝肉成績は良好であった。肥育全期間に粳米を給与することにより、皮下脂肪内層が硬くなることが示唆された。

#### A2-17 リンゴ、ナシ産地を蝕む「ヒメボクトウ」に対する複合的交信かく乱防除技術の開発

リンゴ及びナシほ場に試験区を設置し、誘引阻害効果、被害樹率、蛹殻数の調査を行った。その結果、性フェロモン剤は10a程度の小面積処理でも高い誘引阻害効果があることを明らかにした。被害樹率については継続して調査を行う。

#### A2-19 根部エンドファイト活用によるアスパラガス連作障害回避技術体系の開発

株腐病幼苗検定により標準品種のウェルカムに比べゼンユウガリバーの抵抗性が優っていた。立枯病幼苗検定は、接種菌株の病原性に問題があり、品種間差は判定できなかった。

立枯病菌 *Fusarium oxysporum* は西村培地上のコロニーの性状、色及び顕微鏡観察像から識別が可能であり、希釈平板法により定量も可能であることが示唆された。

#### A2-20 地域営農や生産組織等における被害実態の把握と営農支援策の検討

震災後の南相馬市の農業者と営農組織の調査から、農業者は担い手を希求する状況であることや、営農組

織の農地集積上の課題が示された。水稻の作付け再開に向けては、担い手の育成・確保の手段を講ずること、営農組織への農地集積を進めておくことが端緒となる。

#### **A2-21 「FOEAS」を活用した津波被害地域農業システムの高度化**

被災地域では農地の復旧、整備を望みながらも、担い手の育成確保が喫緊の課題であった。また、集落営農を進めるには、受益農家の理解促進と喚起が求められる。

うどんに関する県内、近隣県、首都圏の3地域を対象にインターネット調査を実施した結果、国産小麦の使用は訴求効果が期待される。また、家庭消費を拡大させるには、生麺等で、ある程度の太さを持ち、200円程度の商品の開発が望ましい。

津波により海水浸水したたいわき市内の農地の実態調査と炭酸カルシウム施用による塩害対策を実施した。

#### **A2-22 転炉スラグによる土壌 pH 矯正を核としたフザリウム性土壌病害の耕種的防除技術の開発**

粒径の異なる（粉状、粒状）転炉スラグ資材により pH を調整した場合のイチゴ萎黄病の被害軽減効果や生育に与える影響を、場内の隔離床及びポット、矢祭町、石川町の現地ほ場にて調査した結果、イチゴの生育に影響はなく、粉状転炉スラグを用いた土壌 pH 矯正により萎黄病発病を軽減することが可能であった。

### **A3 省力化・高品質化等の生産技術の確立**

#### **A3-1 汎用化水田における排水管理技術の確立**

FOEAS（地下水位制御システム）では、作物の生育に必要な地下水位を設定できた。また、FOEAS 区と従来の暗渠工区での大豆の栽培試験では、FOEAS 区で収量が大幅に増加した。

#### **A3-2 園芸作業の軽労化に向けた農機具の開発**

現地でのアスパラガス収穫作業について解析した結果では、労働負担が大きく早期の改善の必要性が明らかとなった。また、アスパラガス収穫作業の軽減に向けて、収穫器具の試作を行った。

#### **A3-5 寒冷地における地域有機質資材活用による飼料用米低コスト多収生産技術の確立**

多収性品種「ふくひびき」の鉄コーティング直播栽培において、中通りで飼料用米収量 75 ～ 80 kg を確保するため生育目標値を作成した。飼料用米を水田で立毛乾燥して籾水分を減少させてから通風乾燥を行うことにより、乾燥のための燃料代を削減できることを中通りにおいて実証した。

#### **A3-6 主要農作物生育解析調査**

水稻、麦類、大豆、コンニャクイモ及び葉たばこについて定期的に生育調査を実施し、生育状況等を各種会議資料及びホームページで公表し、倒伏対策等の適切な栽培管理情報を提供した。

#### **A3-7 県産米の高品質化・良食味米生産のための栽培管理技術の確立**

福島 29 号は株間を拡げて栽植密度 16.4 株/m<sup>2</sup>（株間 20.3cm）としても、株間の狭い栽植密度 21.1 株/m<sup>2</sup>（株間 15.8cm）と同等の収量・品質であった。平成 24 年の夏季高温の登熟条件では、天のつぶ、ひとめぼれ、コシヒカリとも慣行の穂肥（N 0.2kg/a）と出穂頃の実肥（N 0.2kg/a）により白未熟粒が減少し品質が向上した。

#### **A3-9 有機物を活用した大豆の高品質・多収栽培法の確立**

化学肥料の代替として有機質肥料及び緑肥作物を鋤き込み大豆を栽培（2 年目）した結果、慣行栽培と同等の収量・品質が得られたため、代替は可能と考えられた。今後は連年施用し、その効果を検討する。

#### **A3-10 福島の顔となる主要野菜の高品質・安定生産技術の確立**

夏秋きゅうりの遅まき栽培技術の確立のために適品種の選定を行った結果、供試 6 品種のうち 9 ～ 10 月の出荷量及び A 級率等から総合的に判断して 2 品種が有望と考えられた。夏秋トマトの省力的な誘引技術の確立のために 3 種類の U ターン誘引を比較した結果、いずれも収量に影響を及ぼすことなく誘引時間を慣行のひも誘引より大幅に短縮できた。

### A3-11 地域振興野菜の安定生産技術の確立

さやいんげんの安定生産技術については葉面散布剤における減収抑制効果は判然としなかった。秋冬にらの休眠特性の解明については、供試 5 品種の 1 年株において、休眠は浅く、5℃以下の低温遭遇時間が長くなると増収した。

### A3-13 主要野菜の栽培に適した有機質肥料活用型養液栽培技術の実用化

既存システムの改修や適切な施肥管理をすることで有機質肥料を活用した葉菜類での養液栽培技術を確立した。慣行の化成肥料での栽培より収量が低下したり収穫までの日数が長くなる場合もあったが、その収穫物は葉色が良く、遊離アミノ酸含量が高く、硝酸イオン濃度は低減され、食味も優れた。

### A3-14 花持ち保証に対応した切り花品質管理技術の開発

トルコギキョウの夏切り栽培において、夏場の高温条件下における切り花の花持ち日数を延長するための栽培・出荷方法について検討した結果、若苗育苗で基肥中心の肥培管理とし、生育初期が高温期となる場合に 30%遮光する栽培方法が効果的であることを実証した。

リンドウでは、窒素追肥、採花前のアザミウマ防除、蕾採花（固切り）及び防虫ネット被覆による受粉抑制、後処理剤の使用等の方法を最適化した結果、輸送シミュレーション期間の 2 日間を除いて 10.3～12.3 日の花持ち日数（30℃試験室）が達成された。

### A3-15 福島の顔となるリンドウの高収益を実現する安定生産技術の確立

連作ハウスほ場における生産性の維持、回復については、強勢品種、土壤消毒等による一定の効果が得られた。生育初期の被覆処理による開花調節については、開花時期の分散、採花本数の期間内平準化等の効果が確認された。これまで不可能だった定植年の切り花収穫については、ジベレリン処理技術の応用により一部の中晩生品種で可能となった。花卉の高温障害については、遮光による軽減技術を開発するとともに、品種による耐性差についても明らかにした。

### A3-16 地域の特徴のある花き生産技術の確立

8 月咲き小ギクの赤色光 LED 電照による開花抑制は、日の出前 4 時間電照において最も効果が高かった。ユキヤナギについてエテホン剤 500～1000 倍液処理の落葉開花促進効果の年次変動を明らかにした。西洋ウメドキについて挿し木増殖の最適な時期を明らかにした。

### A3-17 環境制御と施肥量削減による低コスト花き生産技術の確立

トルコギキョウの 4～5 月出し作型において、長日処理（電照）により開花が 12～22 日促進された。長日処理に使用する光源は白熱灯が最も適していた。シクラメンについて夜間変温管理が生育に及ぼす影響を明らかにした。

### A3-18 ナシのジョイント技術等による省力・高生産性栽培技術体系の確立

幹周は残した主枝数の違いにより、慣行樹形>新一文字型>ジョイント型の順に高い値を示した。逆に主枝長はジョイント型=新一文字型>慣行樹形の順に高い値を示し、先端新梢長は慣行樹形で高い値を示した。1 樹当たりの収穫量に差はなく、単位面積当たりの植栽本数は慣行樹形と比べジョイント型 9 倍、新一文字型 3 倍と多いことから、それらは初期に多収量を可能にする樹形であることが示唆された。ジョイント型において隣の樹と接ぎ木することが可能な新梢長を概ね確保することができたため、平成 25 年 4 月に接ぎ木を行う予定である。

### A3-19 モモ・リンゴの低樹高化による省力・高生産性栽培技術の確立

モモの低樹高開張形は下支え支柱の移動と設置に多くの作業時間を必要とした。一方、改良型開張形及び開心自然形は、主枝・亜主枝の骨格枝の湾曲などの樹形維持が課題であった。リンゴでは「みしまふじ」を穂品種として、わい性の JM7 及び半わい性の JM2 を台木に用いた従来のわい化栽培とは異なる「開心形」樹形の優位性を明らかにし、実用化技術情報とした。

### A3-20 モモ連作障害を克服する台木の選定と栽培管理技術の確立

若齢期における生育及び生産特性について参考に供する成果として発表した。樹体生育は「長野野生桃」「ネマガード」「おはつモモ」が良好であった。樹体の凍害発生は「払子」でやや多く、「長野野生桃」「おはつモモ」では発生が認められなかった。「ネマガード」で生産量が多く、果実品質では「払子」の果実糖度が高くミツ症果指数が低い傾向にあった。

### A3-21 生涯生産性の向上を目指した乳牛の飼養管理技術の確立

牛群検定の体細胞数データと分娩前乳汁検査（性状分類及び Brix 値測定）を組み合わせることで、より効率的な乳房炎の分娩前予察が可能となった

### A3-25 会津地域における低コスト・高品質米のための栽培管理技術の確立

疎植栽培について、施肥法、苗の種類の実験は、2 か年で計画通り完了した。2 つの課題をとりまとめて「会津平坦部におけるコシヒカリ（疎植栽培）の生育目標値」として参考成果とした。また、当初の計画にはなかったが、疎植栽培での刈取り時期の調査を開始した。

直播での雑草防除試験について、今まで発生していたものとは異なるタイプの雑草を確認した。ポット試験で雑草の休眠特性や石灰窒素による発芽抑制効果を調査した。

### A3-26 会津地域の特色を活かした野菜・花きの高品質安定生産技術の確立

アスパラガス伏せ込み促成栽培について、年内収量向上のための低温遭遇量及び適品種を検討した。畑地性カラーでは、球根の大きさ及び採花本数等を調査しデータを蓄積した。宿根カスミソウでは摘心法と施肥法について「夏秋期の収量を上げる栽培法」として普及成果とした。

### A3-28 会津地域における果樹の省力安定生産技術の確立

リンゴ省力樹形の生育と果実生産では、側枝の構成や積雪の影響を項目に加えて調査した。県内におけるブルーベリーの生育状況について「ブルーベリーの生育良否の実態」として参考成果とした。

### A3-29 浜通りにおける米の高品質・安定生産に向けた技術の確立

浜通りにおける水稲特別栽培米基準でのコシヒカリを使った疎植栽培において、通常の栽培密度に比べ茎数、収量がやや少ないが検査等級は良好であることを確認した。育苗費削減による疎植導入効果を明らかにした。

### A3-30 浜通りにおける大豆、麦類の高品質・安定生産に向けた技術の確立

大豆では、イヌホオズキ類の土中での生存率と、防除に有効な播種期・耕種時期及び除草剤の散布時期について明らかにした。

麦類では小麦「ふくあかり」の栽培法について検討し、出穂期追肥の増量により収量及びタンパク含量の向上が認められた。

### A3-31 浜通り気象条件下における野菜の生産振興支援技術開発

県オリジナルアスパラガス品種「福島交 10 号」の定植年生育はウェルカムに比べ良好であることを確認した。

秋冬ネギ栽培において、台風対策として行う剪葉が生育、収量に及ぼす影響を明らかにした。

ブロッコリーを高温乾燥期に機械移植する際に、1 株当たり約 30ml の灌水を行うと苗の活着に有効であることを確認した。

冬どりキャベツ栽培では、うね内部分施肥により、球重増加、除草作業の軽減、基肥散布及び追肥作業の省力化の効果が認められた。

### A3-32 浜通り気象条件下における花きの生産振興支援技術開発

ヒマワリ栽培では 11 月中旬に播種することにより、無加温栽培でも 3 月中下旬に採花開始できる可能性が示唆された。トルコギキョウ作付け後にヒマワリ、ストック、ムギを作付けすることで作土 EC の上昇が抑制された。トルコギキョウ抑制栽培では赤色ネットによる遮光により切花長が長くなる傾向が認められた。

トルコギキョウ定植 4 週後の 100ppm ジベレリン処理により、切り花長が増加するが草姿の悪化は伴わなかった。

### A3-33 葉たばこ特別調査

たばこにおける農薬使用の指標設定のための調査（JCI 設定調査）を実施し、11 剤について農薬分析のための中葉試料を JT に提供した。

## B 競争力と個性のある県産農林水産物のブランドの確立

### B1 本県に適した品種開発・家畜の改良

#### B1-1 県オリジナル水稲品種の育成

生産力検定試験（予備調査Ⅱ）の結果から酒造好適米系統「郡系酒 841」に福島酒 37 号、ひとめぼれ熟期の有望 2 系統に福島 38 号及び福島 39 号を付与し、奨励品種決定調査に配付した。福島酒 37 号については実規模醸造試験を 2 社で実施することになった。

#### B1-2 新需要対応オリジナル水稲品種の育成

センター内の生産力検定に 12 系統を供試した結果、すべての系統で収量が 60kg/a 以上となった。この内、品質、食味から 6 系統を継続、6 系統を打ち切りとした。

現地での生産力検定に 6 系統を供試した結果、収量は 6 系統すべてで対照品種のあきたこまちより多くなり、中でも福島 30 号、福島 34 号、郡系 908、郡系 946 において多く、品質はあきたこまち並だった。

福島 30 号（センター産）を業務炊飯委託試験に供試した結果、業務炊飯適性が高いことが明らかとなった。

#### B1-3 県オリジナル野菜品種の育成

イチゴ福島 12 号の現地試験では、収穫開始がとちおとめ並で草勢が強い評価を得る一方、芽数が多く整理が必要、果皮色がやや淡い、食味がやや淡泊との指摘を受けた。

アスパラガス福島交 10 号は平成 25 年度に品種登録出願し普及拡大を図ることとして、野菜オリジナル品種推進協議会において合意された。今年度新たな郡交付与はなかった。

#### B1-4 県オリジナル花き品種の育成

リンドウでは福島交 18 号を平成 25 年度に品種登録出願することとした。地域適応性検定に供試した福島交 20 号は葉腐病の発生が多く品種化を否とした。生産力検定開花期検定に供試した極早生系統の郡交 87 を有望と判断し、福島交 21 号を付与した。また、組合せ開花期検定で花色等に優れた 4 系統に郡交栄 92 から郡交栄 95 を付与した。

カラーでは個体選抜から 4 個体を選抜するとともに、培養増殖適性が良好な 2 系統を選抜した。

#### B1-5 オリジナル品種育成効率化のための支援技術開発

イネ低温出芽性の選抜マーカーの開発のため、検出した QTL が低温出芽性に作用していることを検証するための準同質遺伝子系統群を育成した。水稲のいもち病ほ場抵抗性遺伝子及び食味形質遺伝子に連鎖した DNA マーカーを用いて各品種及び福島・郡系系統の解析を行い、有用性を検証した。

リンドウ未受精胚培養により植物体を得られたが、形成率には系統間差が大きかった。昨年度、未受精胚培養により得られた植物体には、半数体、2 倍体及び同一組織に倍数性の異なる細胞が混在するものが認められた。リンドウ及びアスパラガスの系統の識別が SSR マーカーにより可能であることが示唆された。

#### B1-6 奨励品種決定調査

水稲では、予備調査において収量、品質に優れる福島 35 号、北陸 250 号をやや有望とした。一般粳 10 系統、糯 2 系統、飼料米用 1 系統、WCS 用 1 系統の計 14 系統を特性把握したため試験終了とし、収量、耐倒伏性、品質が劣る 2 系統を打ち切りとした。品質、収量に優れる早生の早熟期の福島 30 号を有望、福島 34 号をやや有望とした。

大豆では、予備調査において 7 系統を供試し 1 系統をやや有望と評価した。本調査では青豆の「あやみどり」を供試し、耐倒伏性に優れた良品質品種として有望と評価した。「あやみどり」については、特性を把

握したため調査を終了する。

麦類では、予備調査において 16 系統を供試し、小麦 1 系統（関東 225 号）をやや有望とした。本調査では「銀河のちから」について検討し、品質や耐雪性等で難があるため打ち切りとした。

#### B1-7 系統適応性検定試験

水稻では、品質に優れる早生のふ系 228 号、中生の東 1453 を有望（2 系統）、早生のふ系 227 号、ふ系 233 号、相 1022、中生の東 1457、東 1482、中生の晩の東 1465 をやや有望（6 系統）とした。

大豆 19 系統を供試し、2 系統（刈系 815 号、東山系 Z788）をやや有望とした。

#### B1-9 トルコギキョウ品種特性調査

トルコギキョウの 8 月出し作型において、28 品種を供試し生育特性、開花特性及び切り花品質について調査を行った。いずれの品種も 8 月 2 半月までに開花し、切り花品質や花色、開花時期等から評価すると「セレブイエロー(中生)」「EU-041」「コレゾライトピンク」、「セレブホワイト(中生)」が優れていた。

#### B1-10 果樹の新品種育成

ナシの注目系統 8-207 について果実の特性調査を行い、多汁で甘味が強く食味は良好だが条溝果が多い結果を得た。

モモ 11 号、リンゴ 5 号を品種登録することとした。

#### B1-11 果樹系統適応性検定試験

モモ第 9 回系統適応性検定試験として筑波系 7 系統を供試し、結実 2 年目における収穫時期、果実品質等の調査を行った。

ナシ農林水産省及び育種指定試験地で育成中の系統である筑波 54 ～ 58 号の本県での適応性を検討し、果実品質調査から筑波 54、56、58 号の 3 系統を命名希望の評価とし、残りの 2 系統を継続調査の評価とした。全国の系適成績検討会で筑波 55、58 号の品種登録が決定された。

#### B1-12 胚移植技術を利用した高能力肉用牛の効率的生産技術の確立

県産 3 種雄牛を用い最適濃度で体外受精を行った結果、1 種雄牛のみ凍結精液で発生率が向上した。性別 2 胚移植の受胎率は 0.0 ～ 33.3 %であった。現在までの性別別胚の産子の性に矛盾はなかった。

#### B1-13 DNA 情報を活用した家畜の育種改良技術の確立

大型会津地鶏後継系統（会津地鶏の雄系種鶏候補系統）及びロードアイランドレッド種 P13 系統（会津地鶏の雌系種鶏）において、コレシストキニン A 受容体(*CCKAR*) 遺伝子型の増体性（7 週齢体重）は、両系統とも遺伝子型別体重に有意差は認められなかった。会津地鶏の特徴である緑色の脚色関連遺伝子を検索した結果、候補遺伝子存在領域内に 4 つの多型（一塩基多型）を検出した。

#### B1-15 県産銘柄鶏の改良と開発

H23 年鶏種鶏の能力調査を実施した結果、繁殖性、強健性、増体性、産卵性を維持していた。大型会津地鶏後継系統は、現行系統と比較して繁殖性、産卵性に優れ、増体性は同等であった。大型会津地鶏現行系統と後継系統雄を用いて作出した現会津地鶏と新会津地鶏の肉質比較を実施した結果、新会津地鶏は現会津地鶏と比較して、脂肪酸組成比の n6/n3 比が低値と良好な結果であった。

#### B1-16 「ブランド福島牛」を確立する本県産黒毛和種種雄牛の作出

高百合産子の体重及び体高は、肥育全期間を通じて黒毛和種正常発育曲線の平均値を大きく上回る良好な数値で推移した。枝肉成績についても、いずれの形質も全国平均を大きく上回った。

#### B1-17 耐冷性といもち病抵抗性を兼ね備えた極良食味及び業務用米品種の開発とその普及

水稻では、品質に優れる早生のふ系 228 号、中生の東 1453 を有望（2 系統）、早生のふ系 227 号、ふ系 233 号、相 1022、中生の東 1457、東 1482、中生の晩の東 1465 をやや有望（6 系統）とした。

### B1-18 麦類系統適応性検定試験

小麦 29 系統、大麦 22 系統を供試し、大麦 2 系統（東山系 576、578）をやや有望とした。平成 25 年産について、大麦 21 系統、小麦 26 系統を栽培中である。

### B1-19 耐病性品種の開発と緑肥輪作等を活用した環境保全型こんにやく低コスト生産体系の確立

群馬県育成の 3 系統を供試し、2 系統（群系 80 号、81 号）をやや有望と評価した。

### B1-20 食料自給率を目指した豆類優良品種の育成

農林水産省指定育成地の大豆 40 系統・品種及び 4 比較品種について大豆紫斑病抵抗性を判定し、「極強」3、「強」24、「やや強」11、「中」2 の結果を得た。

### B2 開発品種・改良した家畜の利活用技術の確立

#### B2-2 競争力のある県産農畜産物の生産拡大へ向けた調査研究

震災後 1、2 年目のモモの生産、販売状況について、県北地方の生産者を対象にアンケート調査を実施した。

#### B2-3 県オリジナルブドウ品種「あづましずく」の省力・高品質安定生産技術の確立

ブドウ「あづましずく」の自発休眠期にシアナミド液剤を処理し芽袋被覆を行うことにより、発芽期の生育を 10 日前進化することができたが、収穫盛期は発芽時期ほどの処理間差はなく収穫前進効果は判然としなかった。また、芽袋被覆による高温障害が葉や芽に発生した。シアナミド液剤処理単独では開花期は無処理より 2 日早くなるため、花穂整形やジベレリン処理時期の労力分散に有効である。

#### B2-4 本県オリジナル品種・新品種・一般品種の生育及び栽培特性調査

モモ「はつひめ」の生育特性は、早生品種の中で果実が大きく、双胚果の発生や核障害果率が例年低く品質は安定している。収穫期は「ちよひめ」より 4 日遅く、「日川白鳳」より 4 日程早い。果実品質は、着色が良く果実糖度は並であるが食味良好である。

#### B2-5 自給飼料活用による地鶏生産方式の確立

添加油脂の種類、グリット、籾米形状の各効果を検討した。発育は 0 %代替 > 100 %代替（植物油 > 動物油 > 粉末油）の順となり、雌のみ 8 週齢以降の体重及び屠体重で粒形状の比較で半量破砕区が有意に大きく、12 週齢以降はグリッド添加の全粒籾米区が有意に小さくなった。

#### B2-6 県オリジナルソバ品種「会津のかおり」ブランド確立のための品質向上技術の確立

「会津のかおり」（秋ソバ）播種作業の分散による収穫適期幅拡大の可能性を明らかにするため、播種時期別の収穫適期の変動を調査した。夏ソバでは収量、品質が向上する播種期、播種量、施肥量を明確にするため、生育ステージの早遅、生育状況、収穫適期、品質等の相違について調査した。

#### B2-7 品種・母本の遺伝子データベース構築による果樹育種の効率化

「リンゴ中間母本 95P6」を交配親とした場合、リンゴ果肉の肉質改善に課題が残るものの交配親としての実用性は具備しているものと考えられた。今後、早生・高糖度系統の選抜への活用が期待される。

### B3 優良種苗・種畜を安定的に供給するための技術確立

#### B3-1 県オリジナル品種の優良原種苗生産技術の開発

リンドウ栄養増殖系統の培養増殖法として、4 月に順化を開始し、移植後ジベレリン処理を行う方法が良かった。

カラー郡系 1 を供試し、多芽体形成率を高める培地組成を明らかにした。カラーのウイルス保毒球から 0.8mm 程度の茎頂を摘出して培養することでウイルスフリーの個体を得ることができた。培養中の個体から採取した葉片を用いたウイルス検定が可能であった。

カラーでは多芽体の形成が可能であり、多芽体形成率を向上させる培地組成の知見が得られた。

### B3-2 「フクシマD桃太郎」の開放型育種

「フクシマD桃太郎」母豚 10 頭に他系統精液を人工授精し、計 47 頭の系統間交雑種雄を生産した。「フクシマD桃太郎」維持群の産肉能力は維持開始時と比べて概ね維持されていた。

## C 自然・環境と共生する農林水産業の推進

### C1 農林水産業における資源の循環利用のための技術確立

#### C1-1 省資源型農業の生産技術体系の確立（有機農業型）

有機栽培で用いられる成苗移植栽培でのイネミズゾウムシ成虫の寄生密度がイネの収量に及ぼす影響について検討した。寄生密度が 1 株当たり 2 頭までは減収は認められず、寄生密度の増加に伴い減収する傾向であったが、1 株当たり 8 頭のレベルであっても大きな減収にはならなかった。

#### C1-3 果樹園での資源循環利用と環境負荷軽減技術の確立

モモとリンゴを用いて堆肥処理を開始した。各ほ場の処理前の土壌は深さ別の化学性に差が少なかった。

#### C1-4 水稻の有機・特別栽培における総合的な雑草防除技術の開発

クログワイの発生に関しては 7 月中下旬までが防除に必要な抑草期間と推定された。発生は移植後 + 20 ~ 40 日が最も多く、次いで + 60 ~ 80 日で多かった。遅い時期に発生する個体は深い位置から発生することが多く、深い位置から発生する塊茎に小さいものは少なかった。各種 ALS 阻害剤に交差抵抗性を有するオモダカが確認された。このバイオタイプは Trp574 が Leu574 に変異していた。本試験に供試したオモダカを採取した集落では、各種 ALS 阻害剤に抵抗性を有するオモダカの面的な発生が認められた。

#### C1-5 多様な栽培条件下の有機 JAS 認定ほ場における水稻—大豆有機輪作体系の現地実証

コナギは大豆との輪作により埋土種子量が減少し、水田転換後の発生数も減少した。田植え時の菜種油粕の土壌表面施用や機械除草による水田雑草の抑制が顕著であった。大豆栽培では播種 7 ~ 14 日後の早期覆土と 30 日後の中耕培土の組み合わせにより、抑草効果が高くなるとともに収量が安定した。

#### C1-7 ナタネの安定生産技術と飼料利用法の確立

品種比較、播種時期、湿害回避技術についての試験結果を「播種時期と生育収量」として参考成果にした。

### C2 環境負荷低減と農林水産業の持つ多面的機能を発揮させるための技術確立

#### C2-1 生態系配慮施設整備技術の確立

生態系配慮施設（二面張排水路）の機能を維持するには草刈りが必要であること。水路内の水際植生は水生生物の生息にとり良い環境を与えていることを明らかにした。

#### C2-2 鳥獣被害対策技術及び抑制実施手法の確立

イノシシによる農産物被害軽減のため、ラジオテレメトリー調査及び現地踏査、営農的管理での改善手法の開発・実証を行ったところ、集落内に餌となるものを排除することで被害を軽減できることが示された。アスパラガスを加害する野その餌となる雑草の管理手法について現地実証を行い、秋季の雑草管理により翌春以降の被害が軽減されることが示された。

#### C2-3 天敵生物等を利用した化学合成農薬低減技術の開発

露地アスパラガス栽培での主要害虫であるネギアザミウマの土着天敵を調査した結果、アカメガシワクダアザミウマとヒメハナカメムシ類の発生が確認された。

スワルスキーカブリダニ放飼、ボーベリアバシアーナ剤 4 回散布を組み合わせることで、ハウスアスパラガスのネギアザミウマ幼虫密度を低く抑えることができた。

#### C2-4 総合的病害虫管理（IPM）による環境負荷軽減生産技術の開発

穂いもち感受性推定プログラムによりリスク評価の上で重要な水稻の出穂期を推定できること、日平均気温と出穂期の設定により、ほ場での出穂状況が推定できることを示した。



露地アスパラガスでのタイベックシート、ハウスアスパラガスでの赤色防虫ネットの使用により、ネギアザミウマをある程度低密度に抑えることができた。

#### C2-5 定植前施用による野菜のリン酸施肥削減技術の確立

ネギの定植前リン酸処理によるリン酸の減肥効果は、可給態リン酸 30mg/100g 程度以上のほ場では効果が判然としなかったが、生育を促進する効果が確認され約 120 日後まで持続した。

#### C2-7 果樹における生物資源を活用した環境調和型病害虫防除技術の開発

薬剤系統の異なる殺虫剤防除体系がフツウカブリダニの発生に及ぼす影響は、ネオニコチノイド剤において小さく有機リン剤と合成ピレスロイド剤において大きい一方、ミヤコカブリダニに対する影響はいずれの剤も小さいことが判明した。スタイナーネマ カーポカプサエ剤の樹幹注入は、ヒメボクトウ幼虫の密度低下に効果があり、春と秋の年 2 回処理することにより防除効果が高まると考えられた。

#### C2-9 果樹園における土着天敵の活用技術の開発と天敵供給源としての役割の解明

モモ樹冠下にアップルミントを植栽することで、カブリダニ類が多く発生することが分かった。また、ネオニコチノイド剤を連用するとハダニ類が多く発生することが判明した。

#### C2-10 食料生産地域再生のための先端技術展開事業（施設園芸栽培の省力化・高品質化実証研究）

被災地におけるイチゴ、トマトの早期生産再開と高度システム化に向けて実証研究を実施した。イチゴ栽培における UV-B の照射条件と病害虫抑制効果について検討した結果、照射時間帯、放射照度に関わらず葉への障害等の悪影響を及ぼすことなくうどんこ病の発生を抑制した。また、天敵であるミヤコカブリダニ及びチリカブリダニに対する悪影響は認められなかった。アザミウマ類の誘引や、アザミウマ類、チョウ目害虫の増加も認められなかった。

現地実証ほにおけるトマト病害虫総合管理（IPM）システムの構築に取り組み、害虫モニタリング及び雑草管理に関してシステムの改善を行った。

### C3 地球温暖化に対応するための技術確立

#### C3-1 全国規模の農地土壌炭素等の実態調査

土壌表面から 30cm までの土壌炭素量は地目や土壌群により異なり、有機物施用が土壌の炭素蓄積に寄与することを確認した。

#### C3-2 有機物の分解促進が温室効果ガス発生量に及ぼす影響解明

温室効果ガス発生メカニズムの解明のため耕起方法の異なる水田土壌について分析を行い、入水期の土壌において活性 2 価鉄量の変化を確認した。

#### C3-3 有機質資材施用による畑地からの亜酸化窒素発生調査

各種有機質資材のガス発生量を調査し、温室効果ガス（亜酸化窒素）排出係数を算出した。

#### C3-4 リンゴ園等における長期連用試験の土壌炭素変動実態の解析

雑草草生管理されたリンゴ園において刈取った草生の炭素量は、2 か年の内、少ないものは窒素無施用区で約 240kg/10a、多いものは窒素 20kg/10a 区で 390kg/10a あった。ただし、平成 24 年は窒素施用量の違いによる炭素量の差は認められなかった。また、優占する草種によって炭素生成量に違いがあることが示唆された。

剪定枝チップを連用している土壌では土壌中の 0-10cm の表層炭素が高い傾向を示した。

#### C3-6 温暖化の進行がカメムシ類の発生環境と斑点米被害に及ぼす影響解明

イネ出穂期及びアカスジカスミカメ各世代の発生盛期は、温暖化が進むにつれて共に早まることが予測された。イネ出穂期よりもアカスジカスミカメ発生盛期の方が早まる程度が大きいため、イネ出穂期からみると、アカスジカスミカメの発生盛期は第 1 世代が離れる一方、第 2 世代が近づくと考えられた。

### C3-7 地球温暖化対応農業生産システム確立事業

将来の気温上昇が作物の生育に及ぼす影響を予測し、以下の成果が得られた。水稻の冷害リスクは現在に比べて極端には低下しない一方、高温登熟リスクは増加する。アスパラガスの株養成に影響し、翌春の収穫量を低下させるおそれがあるが、灌水により緩和できる。リンドウでは開花が早まり高温障害が多く発生するが、早生品種では減少する可能性がある。休眠打破に対する悪影響は認められない。モモでは発芽・開花時期は前進化するが、発芽・開花予測プログラムの気温データ入力を現行の一日当たり2回から毎正時の24回とすることにより精度よく生育予測できる。

### D 農林水産資源を活用した地域産業の6次化の推進

#### D1 地域資源の再評価と素材化のための技術開発

##### D1-1 地域産業の6次化推進のための担い手の成立条件と管理手法の確立

農産物直売所における地域振興作物の加工や外販などの多角的な経営は、震災の影響（リスク）を回避する上で重要である。商品力や販売力を向上させる方法及び成長手段は各経営体で異なっており、商業的スキルの向上が支援策として重要と考えられる。

##### D1-2 養蚕・葉たばこによる中山間地域の振興支援技術の開発

家蚕では新交雑系統の2年目の検討の結果、6系統中3系統で従来の生糸強度を超える成果を得た。

葉たばこではマルチ資材の比較を行い、黒色生分解性マルチで慣行マルチと同等の生育・収量を得た。

##### D1-3 バイオエタノール原料としてのバイオマス資源作物の実用性の解明

ソルガムやコメを原料としたバイオエタノール生産で採算を図るには、原料生産に対する助成が必要である。コスト低減と安定供給、持続可能性を考慮すると、バイオマス技術の中では乾式メタン発酵方式が有望である。

#### D2 県産農林水産物の高付加価値化及び商品化のための技術開発

##### D2-1 地域産業6次化推進のための県産農産物の加工技術の開発

県産農産物を活用した加工技術の開発では、ナシの半乾燥果実は色調が良くシャリ感が残り焼き菓子に適し、モモコンポートは素材感を生かすため焼かずに利用するものに適すること、グルテンの代わりに増粘多糖類を使用することで米粉パン加工が可能であること、ヒドロキシプロピルメチルセルロース（HPMC）の利用によりグルテンフリー米粉食パンが作製できること、ナツハゼのインフルエンザウイルス吸着阻害活性成分はアントシアニン以外のポリフェノール類である可能性があること等の成果が得られた。

青大豆品種あやみどりの鮮緑色を保持するためには、成熟期以降できるだけ早く収穫することが重要であること、早生小麦品種ふくあかりでは播種量の増加により穂数が減少し収量も低下するので留意を要すること等が明らかとなった。

##### D2-2 ブランド力強化のための地鶏生産、流通、加工利用技術の確立

常温流通可能な地鶏肉製品開発のため、肉の大きさが異なる2種類のレトルト製品を業者委託にて作成した。殺菌温度到達時間は15分であり、恒温試験及び1回目の細菌試験は陰性であった。

##### D2-3 地域産業6次化推進のための県産農産物の品質保持技術の確立

ナシ果実の0℃長期保存試験を実施したが、保存中に機器が故障し試験を中止した。

## E 緊急課題

### E1 放射性物質除去・低減技術開発事業

#### E1-1 放射性物質の分布状況の把握

##### (1) 水田及び畑地における放射性物質分布状況の把握

水田代かき時期における放射性セシウムの水田への流入、流出及び排水路への影響を調査した結果、田植え直前の排水の放射性セシウム濃度は用水に比べ若干高い傾向にあった。

イネ及びヒマワリの農業用水中の溶存態放射性セシウム吸収について調査し、県内の農業用水の濃度では影響が少ないこと及び放射性セシウムの吸収に土壌中の交換性カリ含量が影響することを確認した。

プルシアンブルー担持吸着剤を用いて農業用水中の放射性セシウム濃度モニタリング技術の開発に取り組んだ。

県内農耕地 107 地点に定点を設定し、生産物及び土壌の放射性セシウムを測定した。5 年間継続して経年変化及び移行要因を把握し、放射性物質濃度分布図に随時反映させる。

##### (2) 樹園地に残留する放射性物質に関する試験

モモ、オウトウ、ナシ、ブドウ、リンゴ、カキ及びユズの汚染翌年度の環境、葉及び果実中の放射性セシウム濃度を初年度と比較した結果、果実中放射性  $^{137}\text{Cs}$  濃度は汚染初年度のほぼ  $1/3$  程度に減衰した。モモでは減衰効果に品種間差が認められた。収穫時の葉中  $^{137}\text{Cs}$  濃度についても汚染初年度と比較してほぼ  $1/3$  になる減衰効果が認められた。土壌については汚染翌年においても表層 3 cm に 90 % 以上の放射性セシウムが存在していることが明らかになった。

##### (3) 草地、飼料作物、家畜における放射性物質の動態調査

カリ施用量を慣行の 3 倍にした結果、牧草への放射性セシウム移行抑制効果を認めた。牧草への移行係数を低く保つためには、番草を経る毎に土壌中交換性カリ含量がより多く要求されることを確認した。移行係数は、土壌 pH 及び粘土比率と負の相関関係にあることを明らかにした。

平成 23 年産牧草を継続給与していた成雌牛を 5 月下旬に放牧し経時的にモニタリングしたところ、放牧 2 週間後には血液及び糞の放射性セシウム濃度が減少し、血液が  $15\text{Bq/kg}$ 、糞が  $180\text{Bq/kg}$  前後の平衡状態で推移した。

平成 24 年に採取した胎児由来組織の放射性セシウム濃度は、胎盤、羊膜、臍帯ともに平成 23 年採取と比べ  $1/8 \sim 1/27$  程度の約  $5 \sim 11\text{Bq/kg}$  となった。平成 24 年産子は生時体重も平年並みで生後の発育も順調であり、放射線の影響による変化は特に見出されなかった。

農地における放射性セシウムの動態を明らかにし、長期的なモデリングの基礎資料を得るため、沼尻分場に傾斜ライシメーターを設置した。今後、草地表面から流出する水量、土砂量及び放射性セシウム量をモニタリングする。

##### (4) 農地における放射性セシウム動態のモニタリング

農地に沈着した放射性セシウムの動態を解明し、25 年後の状況をモデリングするため、利用状況の異なる県内 4 か所（畑、果樹園、草地、未作付水田）に観測サイトを設置し、表面水や地下水等を採取、分析した。

#### E1-2 放射性物質の簡易推定法の開発

##### (1) 牛生体からの肉中放射性セシウム濃度の推定技術の開発

放射性セシウムを含む飼料を継続的に摂取している牛について、比重で補正することにより、尿中放射性セシウム濃度と筋肉中放射性セシウム濃度に高い正の相関があることを確認した。また、放射性セシウムを含む飼料の給与を中断した場合の尿中放射性セシウムの減衰傾向を明らかにした。

外部線量の影響を極力遮断した可搬式の牛体内汚染量測定装置を開発するため、装置に装着する検出器、コリメーター、遮蔽体を試作し、実用性等を検討、評価するとともに、牛体模型（標準ファントム）を作成した。

#### E1-3 放射性物質の吸収量の把握

##### (1) 農作物の放射性物質の吸収量の解明

水稲における放射性セシウムの吸収実態を調査し、稲体について器官別、生育時期別に明らかにするとと

もに、玄米について登熟期間中の推移及び乾燥法の違いが及ぼす影響について明らかにした。土壌からの放射性セシウム吸収リスクの栽培前診断法の開発を行った。

本県の主要品種である「コシヒカリ」と「こがねもち」の玄米等の放射性セシウム濃度を比較した結果、土壌の交換性カリ含量 3mg/100g 前後の低い条件下での品種間差異が認められた。

フォールアウトの影響を受けた宿根草及び木本類の年次間差を明らかにした。

畑作物に関して、冬作物については根からのセシウム吸収について、夏作物については吸収の年次変動について検討し、放射性セシウムの冬作物、夏作物への移行係数を明らかにした。大豆は着莢期の植物体の放射性セシウム濃度から子実濃度を推定できることを明らかにした。

野菜類におけるフォールアウト後 2 年目の放射性セシウム濃度を調査した結果、前年を下回ることが明らかになった。フォールアウトの影響により放射性セシウム濃度が高い傾向にある畑わさびについて、新植初年目の土壌からの吸収量は少ないことを明らかにした。土壌タイプの異なる露地畑においてカリ肥料や堆肥の施用条件を変えてキャベツを栽培した結果、土壌中のカリウム含量が多いほど放射性セシウムの吸収が抑制されることを明らかにした。

放射性セシウム吸収量が比較的高いとされる根菜類やイモ類について、土壌中の交換性カリ含量が高ければ放射性セシウム吸収量が低減されることを明らかにした。

樹皮に沈着した放射性セシウムの転流による葉及び果実への移行動態をモモ、オウトウ、ナシ、ブドウ、リンゴ、カキで調査し、フォールアウト後初年目に樹体内に移行した放射性セシウムの多くは旧枝に留まり、新生器官には全体の 2.2 % が移行していることを明らかにした。

## (2) 飼料作物、家畜における放射性物質の吸収量の解明

土壌タイプの違いによる放射性セシウムの土壌から牧草への移行について検討し、放射性セシウム濃度が高い土壌においても粘土比率が高い場合には牧草の吸収量が少ないこと、移行係数は RIP 及び pH と負の相関関係にあることを明らかにした。

飼料用米から肉用鶏への放射性セシウム移行について調査し、幼雛期 56Bq/kgDW、育成期 113Bq/kgDW の放射性セシウム濃度の飼料を給与しても筋肉中の放射性セシウム濃度は 50Bq/kgFW を超えないことを確認した。このことからトウモロコシ代替として粳米を利用する場合、調製後の飼料中の放射性セシウム濃度が 100Bq/kgDW 以内となることが目安と考えられた。

## (3) 津波被害農地における放射性セシウム濃度と作物への影響

供試した津波堆積土砂を含む土壌で水稻を栽培した結果、玄米への放射性セシウムの吸収は少なく基準値 100Bq/kg を下回った。

## (4) 飼料用イネの放射性物質の吸収量の解明

粗玄米中の放射性セシウム濃度は供試した 4 品種の中では「ふくひびき」が最も低く、地上部の放射性セシウム濃度は前年度より大幅に低下した。刈取高さが高くなると乾物収量はやや減少するが、放射性セシウム濃度は大幅に少なくなることを明らかにした。

## E1-4 放射性物質の除去・低減技術の開発

### (1) 土壌表面に残留する放射性物質の除去・低減技術の開発

樹園地においてゼオライトシートを活用した草生剥ぎ取り方式により、土壌表層の放射性物質を容易に除去できることを明らかにした。牧草地における芝刈り用機械を活用したりター除去及びロータリー耕により、単年性牧草ミレットの放射性セシウム濃度が半減した。

### (2) ほ場中に残留する放射性物質の低減技術の開発

ファイトレメディエーション有望水稻品種「Pokkali」の特性把握のため土壌の種類及び窒素施肥量をえてポット試験を行ったところ、放射性セシウム除去率（地上部の放射性セシウム吸収量/土壌の放射性セシウム量×100）については 0.15～0.56% でありコシヒカリ（0.02～0.19%）より高いこと、重要病害であるいもち病に対し強い抵抗性を示すことを明らかにした。

ファイトレメディエーションに有用な雑草について検討した結果、優占種では有望な草種は認められなかった。

栽培植物や野生植物によるファイトレメディエーションについて検討し、ナタネ、ハクサンハタザオ、ホソアゲイトウの効果を明らかにした。

土壌中の放射性セシウムの可給性を評価する方法として、0.5M シュウ酸抽出法について検討した。

放射性セシウムの吸収能力の高いソルガム類の品種を選定し、更に吸収能力を高める栽培技術を開発するため、土壌表層に放射性セシウムが多く分布する条件下においてソルガム類 16 品種を不耕起状態で栽培した結果、各品種とも放射性セシウム濃度 20 ~ 30Bq/kgFW 程度となり、品種間に有意な差は認められなかった。カリ施用量を 0、5、10 kg/10a としてソルガムを栽培したところ、カリ施用量の増加に伴いソルガムの放射性セシウム濃度が低下する傾向を認めた。

傾斜地における放牧地の除染、更新に際し、無線刈り払い機用に開発したロータリーによる更新技術を検討した結果、急傾斜地においても耕耘作業が可能であること、土壌表層 0 ~ 5cm 中の放射性セシウム量及び空間線量率が低下することを実証した。

### (3)水田における放射性物質の動態

水田における放射性セシウムの収支を明らかにするため、用排水と降下物に含まれる放射性セシウムを定量した。ポット試験において用水に含まれる溶存態放射性セシウムは 1 時間後に 95 %以上が土壌に移行することを確認した。

### (4)樹体に残留する放射性物質の低減技術の開発

高圧洗浄機による樹皮洗浄処理を行ったモモ、ナシ、リンゴ、ブドウ、オウトウの果実における放射性セシウム低減効果について調査し、カキとモモにおいて効果を確認した。

### (5)汚染畜産産物の減容化

堆肥及びサイレージの減容化に取り組んだ結果、飼料用ペレット成形機により堆肥をペレット化することで 1/3 程度まで減容化した。放射性物質濃度は約 2.5 倍に上昇した。微生物資材を用いた牧草の減容化においては、体積は減少するものの液体状となり、重量はあまり変わらず悪臭を生じた。

### (6)土壌等からの酸洗浄による放射性物質の抽出及び土壌の再利用に関する研究

産総研が開発した酸及び高温処理により土壌中の放射性セシウムをほぼ完全に回収する技術に関連し、処理土壌を再利用するための技術開発に取り組んだ結果、0.5M 硫酸で酸洗浄した土壌をアルカリ資材で pH 矯正することにより、無処理土壌に 33 %程度混合可能であることがわかった。

### (7)高濃度汚染地域における農地土壌除染技術体系の構築・実証（除染後の農用地の生産性評価）

農地の除染により土壌から有機物や肥料成分が除去されることから、除染後の生産性の評価及び地力回復技術の確立に取り組んだ。表土剥離除染を実施した飯舘村現地水田で水稻を栽培し除染 2 年目の効果を確認するとともに、表土剥離前後の土壌を用いた水稻、大豆のポット栽培試験を実施し生育等に差がないことを確認した。

### (8)高濃度農地汚染土壌の現場における処分技術の開発（化学的処分技術）

(株)東芝が開発した高濃度放射性物質汚染土壌の化学的除染により発生する処理土壌を栽培試験に使用し、農作物の生育・収量に及ぼす影響を検討した結果、0.5M シュウ酸で洗浄処理した土壌は、無処理土壌に 30 %程度混合可能であることがわかった。

## E1-5 放射性物質吸収抑制技術の開発

### (1)吸着資材による吸収抑制技術の開発

現地水田においてゼオライト、ケイ酸カリ、塩化カリ施用による放射性セシウム吸収抑制効果を確認するとともに、土壌中のカリ含量の推移について明らかにし、塩化カリ追肥による吸収抑制効果についても検証した。ゼオライトの水稻生育、収量、品質への影響は認められなかった。

吸着資材のゼオライトを施用した土壌において、連用による作物への放射性セシウムの移行程度を把握した。

ゼオライト施用量の違いが野菜の放射性セシウム吸収量に及ぼす影響について現地試験を実施した結果、

吸収抑制効果にはゼオライトから供給される交換性カリが強く影響すること、栽培前の土壌中の交換性カリ含量が低い土壌ほど吸収抑制効果が高いことが認められた。

ゼオライト施用による葉たばこの放射性セシウム吸収抑制について検討し、ゼオライト施用量 1t/10a で吸収抑制効果が認められた。

ゼオライトを内部に配合したシートを樹園地ほ場に敷設し、放射性セシウム吸着、放射線遮蔽効果を検証した。

## (2)カリウムによる吸収抑制技術の開発

カリ施用がイネの放射性セシウム吸収に及ぼす影響をポット試験において検討した結果、カリ施用によりイネによる放射性セシウム吸収量が低下すること、ケイ酸カリよりも塩化カリ施用のほうが吸収抑制効果は大きいこと、カリ追肥にも吸収抑制効果はあるものの基肥施用の方が効果は大きいことを明らかにした。

大豆栽培において、カリウム、ゼオライト等の施用が放射性セシウムの吸収に及ぼす影響について場内及び現地でも検討し、硫酸カリ施用量 3 倍及び 2 段耕により大豆子実中の放射性セシウム濃度は低下することを明らかにした。

## (3)有機物による放射性物質の吸収動態の解明

大豆栽培において有機物施用が放射性セシウム吸収に及ぼす影響を検討し、牛ふん堆肥施用によって土壌の交換性カリ含量が高まり、大豆子実の放射性セシウム濃度が低下することを明らかにした。

## (4)耕うん法による吸収抑制技術の開発

タバコ栽培において深耕が放射性セシウム吸収抑制に及ぼす効果について検討した結果、吸収抑制効果は判然としなかった。

草地更新における牧草の放射性セシウム吸収抑制の技術開発に取組み、反転耕による吸収抑制効果を確認した。暫定許容値超過牧草を産出した草地更新ほ場の共通的特徴として、化成肥料と石灰の施用が不十分で交換性カリが少なく、pH が低いことが認められた。

## (5)乳牛における牧草中の残留放射性物質吸収抑制技術の開発

乳用牛に対するゼオライト適正給与量を明らかにするとともに、放射性セシウム吸着効果のあるプルシアンブルーを混合した鉍塩の摂食による放射性セシウム吸収抑制効果について検討した。その結果、乳用牛にゼオライトを 200 g 給与することで飼料からの放射性セシウムの移行が抑制された。プルシアンブルーを含んだ鉍塩の経口投与では放射性セシウムの吸収が低下する傾向がみられたが、鉍塩の自由摂取では嗜好性が悪く鉍塩の摂取量が少なかったことから、生乳中の放射性セシウム濃度が大きく低下することはなかった。

牛ふん堆肥に含まれる放射性セシウムの牧草への移行抑制についてポット試験で検討し、移行率は牧草の収穫番草により異なることを明らかにした。

## (6)福島県中部におけるコムギ・ナタネへの移行抑制技術の選定

吸収抑制技術の確立のため経根吸収による放射性セシウムのコムギ、ナタネへの移行について調査した結果、移行係数は極めて低い値であることを明らかにしたが、カリ資材等による放射性セシウムの吸収抑制効果は子実の放射性セシウム濃度が低く判然としなかった。

## (7)牛ふん堆肥中に含まれる放射性物質の牧草・飼料作物への吸収抑制技術の開発

デントコーンのポット試験の結果、完熟堆肥施用とカリ施用量増量により移行係数が低下した。放射性セシウムを含む堆肥を反転耕後の牧草地や飼料畑に施用する際のゼオライト、石灰、カリ施用の影響を調査した結果、カリ施用により牧草の放射性セシウム濃度が低下する傾向が認められた。

堆肥及び土壌からの放射性セシウムの溶出について室内実験を行った結果、堆肥からの溶出は数%であったが、未熟堆肥抽出液を汚染土壌と混和させると、完熟たい肥抽出液を混和させた場合より多くの放射性セシウムが溶出する傾向が認められた。

## (8)せん定枝等での放射性物質吸収資材の効果検討

処理できずほ場に置かれているせん定枝や粗皮を放射性物質を伴わずほ場に還元するために、せん定枝や

粗皮をゼオライトシートを敷いたコンテナの中に充填しセシウムの流れについて調査した結果、半量以上がシートに吸収されることが明らかになった。

#### (9) 副次生産物の園外持ち出しによる放射性物質吸収抑制技術開発

樹園地の放射性セシウム量を低減させるため草生の処理法について検討した結果、土壌からの放射性セシウムの除去効果は地上部の刈取りのみでは効果が低いが、下草を表層土壌ごと剥ぎ取ることで効果が高まるものと考えられた。

#### (10) 着果位置による放射性物質の差異（ナシ）

結果枝や着果位置を変えてナシの着果位置を調整した結果、果実中の放射性セシウム濃度に着果位置の高低による差は認められなかった。

#### (11) あんぽ柿原料カキ園でのカリ葉面散布による放射性物質吸収抑制効果の検証

カリウム要求量が高いことに着目し、カキに対するカリ肥料の葉面散布による放射性セシウムの果実への移行低減効果を検証したが、効果は認められなかった。

#### (12) ブルーベリーの吸収抑制技術の開発

堆肥やカリ肥料によるブルーベリー果実や樹体での放射性セシウム吸収抑制効果を検討した結果、果実中の放射性セシウム濃度は前年比 20 % まで減少した。交換性カリ含量 10mg/100g の土壌において、カリ施肥による放射性セシウム吸収抑制効果が認められた。

#### (13) 高濃度汚染地域における農地土壌除染技術体系の構築・実証（ホットスポット水田の除染技術）

現地水田においてカリ施肥及び吸着資材施用による放射性セシウム吸収抑制効果を検証した結果、玄米の放射性セシウム濃度を最も抑制できたのは塩化カリを基肥で施用した場合であり、ゼオライト、バーミキュライトについては投入量が多いほど玄米中の放射性セシウム濃度が低下する傾向が認められた。

### E1-6 農産物における放射性物質の除去技術の開発

#### (1) 農産物内における放射性物質の分布

放射性物質が農産物内にどのように分布しているかを把握するため、果実において洗浄の効果と果肉・果皮・種子での分布状況について検討を行った。その結果、部位別の分布状況を明らかにするとともに、平成 24 年産果実においては洗浄による放射性セシウムの除去効果は認められず、外部の汚染はないと考えられた。

#### (2) 加工による放射性物質の動態

農産加工時の対策に寄与するため、加工によるウメ、ブルーベリー、モモ、リンゴ等の放射性物質の移行を検討したところ、果実の水煮やシロップ漬けでは放射性セシウム濃度が低下するが、乾燥を伴う加工では高まった。放射性セシウムを含む米糠を使用したぬか漬けでは、漬物は漬け床の 0.2 ~ 0.3 倍のセシウム濃度となり、品目による違いはなかった。切り干し大根加工では放射性物質を含んだ塵が付着しやすい環境ほど二次汚染されやすかったが、あんぽ柿の乾燥場における自然乾燥実施時の放射性セシウム濃度は検出限界以下であった。

### E1-7 農作業における放射線被曝低減技術の開発

#### (1) 樹園地内における樹皮の汚染と管理作業中の被曝低減技術開発

樹園地では作業員の被曝は土壌からだけでなく樹体からの被ばくも考慮する必要があるため、樹園地の放射線量の推移と管理作業中の累積被曝量について検討した。枝の上面は被曝時に放射性物質が多く付着しており、表皮の粗・滑の程度や枝の傾斜度によりその後の流失に差がみられた。高圧洗浄機によるモモの樹体洗浄は、管理作業時における被曝低減のために有効であることがわかった。

#### (2) 樹園地における土壌除染と管理作業中の被曝低減技術開発

大型機械が使用できない樹園地における土壌の除染方法について検討した結果、剥土作業が可能な機械としては幹の近くまで入れる小型機と樹間走行可能な機械があり、園地条件に応じて採用することにより効率

的な表土剥土作業が可能となることを実証した。

## 緊急課題解決試験

### ア 春季モモ枯死症の発生要因解明

平成 23 年時の生育や樹体管理、気象の影響を受けモモ樹が樹勢衰弱に陥り、耐寒性が著しく低下した結果、翌年 1 ～ 3 月の低温が直接的な原因となり樹勢衰弱や凍害が発生したと考えられた。対策としては、落葉前の貯蔵養分の確保や結果枝の充実など樹体の栄養状態の改善とともに、秋季の病害防除の徹底を図り樹体の健全性を確保することが重要である。

### イ バイオエタノール原料としてのソルガムの地域適応性試験

バイオエタノール原料としてのソルガムの地域適応性をセンター本部、畜研、浜研の 3 場所で検討した結果、極晩生系統は長稈で搾汁液糖度は低いものの搾汁量が多いことを明らかにした。



#### 4 試験設計・試験成績検討会の開催状況

##### (1) 一般課題

検討会名	開催日	会場
第1回生産環境・作物園芸合同部会(秋冬作(イチゴ等))	6月21日	本部
第2回生産環境・作物園芸合同部会(秋冬作(ムギ等))	10月 2日	本部
第3回生産環境・作物園芸合同部会(品種・資材)	12月 4日	本部
第1回畜産部会	1月16日	畜産研究所
第1回果樹部会	1月21日	果樹研究所
第4回生産環境・作物園芸合同部会(成果・外部発表課題)	1月18日	本部
第5回生産環境・作物園芸合同部会(未検討課題・設計)	2月21～22日	本部
第2回果樹部会	2月18～19日	果樹研究所
第2回畜産部会	3月4日	畜産研究所

##### (2) 放射性物質対策

検討会名	開催日	会場
第1回放射性物質試験研究課題に関する検討会	7月10日	本部
第2回放射性物質試験研究課題に関する検討会	10月10日	本部
第3回放射性物質試験研究課題に関する検討会	12月19日	本部
第4回放射性物質試験研究課題に関する検討会	1月15日	本部
第5回放射性物質試験研究課題に関する検討会	2月27日	本部

#### 5 試験研究成果の公表

##### (1) 試験研究成果一覧

ア 普及に移しうる成果(生産者が現場ですぐに活用できる実用性が高い成果)

No	成果名	担当部所
1	スマートフォンを使ったトラクタ転倒通報システム	経営・農作業科
2	発生予察のための簡易穂いもち調査マニュアル(改訂版)	作物保護科
3	ウリ科野菜ホモプシス根腐病の生物検定による被害発生リスク推定法	作物保護科
4	ナツハゼ果汁素材の簡易加工法	流通加工科
5	酸化しないエゴマの保存方法	流通加工科
6	唐辛子入りエゴマ油の品質保持	流通加工科
7	ソリュブル(鰹煮汁)を活用したミズナの養液栽培	野菜科
8	トルコギキョウ切り花の花持ちを良くする栽培・出荷体系	花き科
9	リンドウの切り花の花持ちを良くする栽培・出荷体系	花き科
10	気温上昇が福島県のリンドウ生産に及ぼす影響と対応方針	花き科
11	アスパラガスの伏せ込み栽培における資材と加温法	会津地域研究所
12	宿根カスミソウの夏秋期の収量を上げる栽培法	会津地域研究所
13	JM7およびJM2台木を利用した低樹高樹形の果実生産	果樹研究所
14	落葉果樹における防霜対策	果樹研究所
15	リンゴ新品種「リンゴ福島5号」	果樹研究所
16	モモ新品種「モモ福島11号」	果樹研究所
17	昆虫病原性線虫剤によるリンゴのヒメボクトウ防除技術	果樹研究所
18	牛群検定データと分娩前乳汁検査を併用することで乳房炎を効率よく予察できる	畜産研究所
19	黒毛和種の離乳から出荷までの一貫肥育体系における圧ぺん朶の代替給与技術	畜産研究所沼尻分場

イ 参考となる成果(有用な技術情報として、知っていただきたい成果)

No	成果名	担当部所
1	雑草管理を中心とした野そ防除法	企画技術科
2	フォアスを用いた水田汎用化による大豆作での増収効果	経営・農作業科
3	生態系配慮水路の水際植生を活かす管理方法	経営・農作業科
4	ユキヤナギハマキフシダニの発生状況と防除	作物保護科
5	リンドウ害虫・アカスジキイロハマキの発生生態	作物保護科
6	露地アスパラガスの土着天敵を温存する周辺植物	作物保護科
7	水稲の成苗移植栽培でのイネミズゾウムシの寄生密度と減収程度	作物保護科
8	将来の温暖化条件下におけるイネ出穂期とアカスジカスミカメ発生盛期の予測	作物保護科
9	グルテンフリー米粉食パンの作製	流通加工科
10	水田雑草オモダカの各種ALS阻害剤に対する抵抗性	稲作科
11	ゼオライト施用が水稲の生育に及ぼす影響	稲作科
12	「Google Mapによる気象予測データを利用した農作物警戒情報」の適合性	稲作科
13	立毛乾燥による飼料用米の燃料代削減	稲作科
14	「ふくひびき」を用いた鉄コーティング直播栽培の生育目標と耕畜連携の堆肥活用で肥料代削減	稲作科
15	ナタネ栽培における適期播種の重要性	畑作科
16	バイオエタノール原料としてのソルガム地域適応性試験	畑作科
17	温暖化によるアスパラガスへの影響	野菜科
18	キュウリホモプシス根腐病におけるカボチャ台木品種による発病度の差異	野菜科
19	夏秋キュウリの露地遅まき栽培における品種比較	野菜科
20	室内開花による「ふくしまみやび」の切り花の高品質化技術	花き科
21	リンドウ栽培におけるクロルピクリン畦内処理の効果	花き科
22	リンドウ中晩生品種の定植年採花技術	花き科
23	リンドウ栽培で発生しやすい葉害の症状と発生経過	花き科
24	リンドウ花卉の高温障害に対する耐性の品種間差	花き科
25	テープ状赤色光LEDを使用した小ギクの電照時間帯による開花抑制効果	花き科
26	会津平坦部におけるコシヒカリ(疎植栽培)の生育目標	会津地域研究所
27	ブルーベリー生育良否の実態	会津地域研究所
28	土壌塩分および用水塩分が定植後のイチゴ生育に及ぼす影響	浜地域研究所
29	浜通りにおける水稲特別栽培基準の疎植栽培適性	浜地域研究所
30	リンドウ小トンネル栽培の被覆開始時期	浜地域研究所
31	モモの優良台木の選定若齢期における台木別の生育と生産特性	果樹研究所
32	ナシ「あきづき」の果肉障害発生調査	果樹研究所
33	県オリジナルブドウ品種「あづましづく」の省力・高品質安定生産技術の確立～発芽促進剤による前進出荷技術～	果樹研究所
34	ナシヒメシンクイのモモ芯折れによる発生予察手法	果樹研究所
35	「梨病害防除ナビゲーション」(ナシナビ)のナシ黒星病に対する適合性	果樹研究所
36	肥育全期間に籾米を給与しても豚の発育は良好である。	畜産研究所
37	高百合の肥育時の特徴と枝肉特性の解明	畜産研究所
38	新しい会津地鶏の産肉能力	畜産研究所養鶏分場

ウ 放射線関連支援技術情報

No	成果名	担当部所
1	表土を安定的にスライスする機械	経営・農作業科
2	農地の空間線量率および土壌硬度に及ぼす反転耕の効果	経営・農作業科
3	草刈り、大豆収穫、耕うん作業での放射線の実態	経営・農作業科
4	土壌の交換性カリを増加させることによりキャベツの放射性セシウムの吸収は抑制される	環境・作物栄養科
5	現地ほ場で栽培したイモ類および根菜類野菜の放射性物質吸収	環境・作物栄養科
6	水稲栽培において効果的に放射性セシウムの吸収を抑制できる塩化カリの施肥法	環境・作物栄養科
7	各種資材の土壌中放射性セシウム吸着特性を簡易的に評価できる評価法の開発	環境・作物栄養科
8	土壌の種類が異なるほ場における土壌中交換性カリ含量と玄米中放射性セシウム濃度との関係	環境・作物栄養科
9	土壌溶液中のカリウムイオン濃度と玄米中の放射性セシウム濃度の関係	環境・作物栄養科
10	切り干し大根の放射性セシウム汚染とその原因	流通加工科
11	果実の洗浄および加工と放射性セシウム濃度	流通加工科
12	漬物加工と放射性セシウム濃度	流通加工科
13	水稲品種の低交換性カリ土壌における放射性セシウム濃度の比較	品種開発科
14	水稲におけるカリウム施用による放射性セシウム吸収抑制	稲作科
15	水稲におけるゼオライトとカリ資材の放射性セシウム吸収抑制効果	稲作科
16	水稲における塩化カリ追肥の放射性セシウム吸収抑制効果	稲作科
17	ラドディスクを用いた農業用水中放射性セシウム濃度の測定	稲作科
18	土壌からの放射性セシウム吸収の簡易評価法	稲作科
19	カリウム施用による放射性セシウムの吸収抑制	稲作科
20	乾燥法と放射性セシウム濃度	稲作科
21	大豆のカリウム施用等による子実の放射性セシウムの吸収抑制	畑作科
22	大豆着莢期の植物体による子実の放射性セシウム濃度の早期推定	畑作科
23	大豆の二段耕プラウとカリ等の施用による子実の放射性セシウムの吸収抑制	畑作科
24	牛糞堆肥施用による放射性セシウムの吸収抑制	畑作科
25	土壌の放射性セシウムの畑作物への移行	畑作科
26	ナタネの土壌の放射性セシウム吸収の時期別推移	畑作科
27	野菜におけるゼオライト施用による放射性セシウムの吸収抑制効果	野菜科
28	新植初年目の畑わさびは土壌からの放射性セシウムの吸収量は少ない	野菜科
29	野菜の放射性セシウム濃度の経年変化	野菜科
30	溶存態放射性セシウム濃度が玄米の放射性セシウム濃度に及ぼす影響	花き科
31	モモ・ウメの樹体洗浄処理による除染効果の検証	果樹研究所
32	カキの樹体洗浄処理による除染効果の検証と放射性Csの吸収移行抑制技術の開発	果樹研究所
33	モモおよびブドウの枝齢別放射性Cs濃度の経年変化	果樹研究所
34	吸着資材と下草を活用した放射性物質の除去技術の開発	果樹研究所
35	吸着資材を活用した除去技術	果樹研究所
36	小型機械等による果樹園土壌の除染方法の検討	果樹研究所
37	ナシの着果部位の違いおよび被袋の有無が果実への放射性セシウム蓄積に及ぼす影響	果樹研究所
38	リーチング現象を活用した常緑果樹の放射性セシウム除去技術の開発	果樹研究所
39	果樹用の資材の放射性Cs濃度	果樹研究所
40	樹園地内下草の放射性物質吸収特性の解明	果樹研究所
41	モモ果実中の放射性Cs濃度の減衰率と樹齢別果実濃度の比較	果樹研究所
42	果樹園土壌中放射性セシウムの垂直分布および水平分布	果樹研究所

No	成果名	担当部所
43	促成栽培による汚染翌年のモモ新生組織への放射性Cs分配率の検証	果樹研究所
44	樹皮および土壌から葉および果実への放射性Cs移行量の解明	果樹研究所
45	汚染初年度におけるモモおよびカキの部位別放射性セシウム濃度と分配率	果樹研究所
46	落葉果樹類の葉および果実中放射性Cs濃度の経時的推移および経年減衰効果の検証	果樹研究所
47	ユズの葉および果実中放射性セシウム濃度の経時的推移および経年減衰効果の検証	果樹研究所
48	樹園地における樹皮の汚染状況の推移および作業中の被曝量解明	果樹研究所
49	未更新草地の牧草(オーチャードグラス等)の放射性セシウム濃度(移行係数)の動向	畜産研究所
50	更新草地でのオーチャードグラスの放射性セシウム濃度(移行係数)の動向	畜産研究所
51	放射性セシウムを含む飼料の給与・中断による繁殖雌牛の尿中放射性セシウム濃度の推移	畜産研究所
52	放射性セシウムを含む飼料を継続摂取している牛の筋肉及び尿中放射性セシウム濃度の関係	畜産研究所
53	イタリアンライグラスの放射性物質の吸収量の解明	畜産研究所
54	放射性セシウムを含む飼料米を摂取した肉用鶏(地鶏)の移行状態の解明	畜産研究所
55	芝刈り用機械を活用したリター除去による放射性セシウムの牧草への移行低減	畜産研究所
56	牧草地の耕うんによる放射性セシウムの吸収抑制	畜産研究所
57	更新牧草地の放射性セシウム暫定許容値の超過要因解析	畜産研究所
58	泌乳牛におけるゼオライトの放射性セシウム吸収抑制効果	畜産研究所
59	飼料用トウモロコシへの放射性セシウムの移行抑制技術(堆肥、カリ)	畜産研究所
60	放射性セシウムに汚染された家畜ふんの堆肥化における放射性セシウムの溶出及び堆肥成分が土壌に及ぼす影響について	畜産研究所
61	飼料から生乳への放射性セシウムの移行について	畜産研究所

## (2) 東北農業研究成果情報

No.	成果情報名	区分	担当部所
1	水稲におけるゼオライトとカリ資材の放射性セシウム吸収抑制効果	稲(稲栽培)	作物園芸部
2	畑作物への土壌の放射性セシウムの移行	畑作物(畑作物栽培)	作物園芸部
3	スマートフォンを使ったトラクタ転倒通報システム	農業生産基盤(作業技術)	企画経営部
4	表土を安定的にスライスする土壌切削装置	農業生産基盤(作業技術)	企画経営部
5	農地の空間線量率および土壌硬度に及ぼす反転耕の効果	農業生産基盤(作業技術)	企画経営部
6	果実の洗浄および加工と放射性セシウム濃度	農業生産基盤(流通加工)	生産環境部
7	キュウリの漬物加工と放射性セシウム濃度	農業生産基盤(流通加工)	生産環境部
8	各種資材による土壌中放射性セシウムの溶出抑制能(吸着能)簡易評価法	生産環境(土壌肥料)	生産環境部
9	各種土壌におけるカリ増加による玄米中放射性セシウム濃度の低減	生産環境(土壌肥料)	生産環境部
10	各種土壌における交換性カリとキャベツの放射性セシウムの移行係数	生産環境(土壌肥料)	生産環境部
11	更新草地でのオーチャードグラスの放射性セシウム濃度(移行係数)の動向	畜産	畜産研究所
12	和牛繁殖雌牛の尿中放射性セシウム濃度の推移	畜産	畜産研究所
13	比重で補正した尿と筋肉の放射性セシウム濃度は高い正の相関関係にある	畜産	畜産研究所
14	牧草地の耕うんによる放射性セシウムの吸収抑制	畜産	畜産研究所
15	放射性セシウムを含む飼料米を摂取した肉用鶏(地鶏)における移行状態	畜産	畜産研究所
16	アスパラガス伏せ込み促成栽培における加温法と伏せ込み資材	野菜花き(野菜)	会津地域研究所
17	ソリュブル(鰹煮汁)を活用したミズナの養液栽培	野菜花き(野菜)	作物園芸部
18	春出し作型におけるトルコギキョウの暖房コスト低減に効果的な夜間変温管理方法	野菜花き(花き)	作物園芸部

## 6 品種登録・職務発明

### (1) 品種登録

作物名	品種名	登録月日	育成担当者
水稲	天のつぶ	平成24年7月26日	斎藤真一・斎藤弘文・半沢伸治・菅田充・手代木昌宏 ・佐藤弘一・大和田正幸・荒井義光・吉田直史・大寺 真史・濱名武雄・江上宗信・佐々木園子・平俊雄・木 田義信・大谷裕行

### (2) 品種登録出願

なし

### (3) 勤務発明届

発明の名称	届出月日	認定月日	発明者
土壌切削装置	平成24年6月18日	平成24年8月20日	松葉隆幸・青田聡・大野光・鈴木 庄一・高橋誠
りんご「リンゴ福島5号」	平成24年12月21日	平成25年2月28日	赤井広子・斎藤祐一・山口奈々子 ・木幡栄子・大橋義孝・小野勇治 ・瀧田誠一郎・松野英行・岡田初 彦・佐久間宣昭・沢田吉男・佐藤 守・宗形隆・國沢高明・山家弘士
もも「モモ福島11号」	平成24年12月21日	平成25年2月28日	岡田初彦・大橋義孝・木幡栄子・ 小野勇治・佐藤守・斎藤祐一・赤 井広子・山口奈々子
りんどう「福島交18号」	平成24年12月21日	平成25年2月28日	大河内栄・野田正浩・福田秀之

### (4) 特許出願

発明の名称	特許出願	出願番号	出願
土壌切削装置	平成24年9月10日	特許2012-198178 号	福島県・井関農機株式会社・株式 会社ササキコーポレーション

## 7 技術開発に伴う表彰・学位取得

### (1) 表彰

なし

### (2) 学位取得

なし

## 8 有識者懇談会の開催

農業総合センターでは、試験研究、技術移転、食農教育及び県民との交流等を進めていく上で、これらに関する全国的な動向や、県内の農業者及び消費者のニーズを把握し、よりの確で効果的な業務推進を図るため、外部の有識者から意見を聴く「農業総合センター有識者懇談会」を開催した。

### (1) 有識者懇談会の開催(平成24年度)

開催日	開催場所	テーマ
2月26日	農業総合センター(本部)大 会議室	・福島県農業総合センターにおける震災後(平成24年度)の主な取り 組みについて ・福島県農業総合センターにおける今後の取り組みについて

(2) 有識者委員

氏名	所属・役職名等
蔦谷 栄一	株式会社農林中金総合研究所 特別理事
門間 敏幸	東京農業大学 教授
日野 公代	生活協同組合コープふくしま 理事
長島 俊一	福島県農業協同組合中央会 常務理事
泉田 昭	(有)すずしろ 代表取締役
佐久間俊一	福島県指導農業士
榎本 優	元福島県農林水産部総括参事

門間委員、長島委員は当日欠席

9 試験研究推進会議の開催

「農林試験研究機関検討委員会」（委員長：農林水産部技監）及び「福島県農林試験研究に関する有識者懇談会」の検討結果を踏まえ、現場と密着した実用性の高い技術開発と迅速な技術移転を図るため、センター本部、会津地域研究所、浜地域研究所、果樹研究所及び畜産研究所ごとに生産者（指導農業士等）、団体、市町村を構成員とした「試験研究推進会議」を設置し、運営を開始した。

(1) 試験研究推進会議の開催（平成24年度）

開催日	開催場所	出席者	内容
8月23日 10:00～12:00	農業総合センター 会津地域研究所研修室	市町村13、JA3、農業者1(計17)、 県関係10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・推進会議の設立について</li> <li>・試験研究の推進方針について</li> <li>・研究成果の普及、現地との連携について</li> </ul>
8月27日 13:30～15:30	農業総合センター 本部多目的ホール	市町村21、JA11、畜産団体9、 農業者1(計91)、県関係49	
8月31日 13:30～15:30	南相馬合同庁舎 101会議室	市町村8、JA2、農業者1(計11)、 県関係9	

10 所内ゼミ

(1) 第1回（平成24年6月27日）

場所 多目的ホール

内容 研究生活を振り返って

講師 門馬信二 所長

(2) 第2回（平成24年7月5日）

場所 ゼミ室

内容 有機質肥料を活用した養液栽培

講師 (独)野菜茶業研究所 野菜病虫害・品質研究領域 主任研究員 篠原信

(3) 第3回（平成24年7月9日）

場所 大会議室

内容 東北農業試験研究発表会課題について

講師 各研究員(15名)

(4) 第4回（平成24年7月31日）

場所 大会議室

内容 農業技術の開発と普及「農林水産省の技術政策」

講師 佐々木昭博 所長

(5) 第5回（平成25年3月18日）

場所 大会議室

内容 あ 農業試験研究における統計的手法の考え方～試験設計を見直すに当たって～

講師 佐々木昭博 所長





### Ⅲ 地域農業支援

## 1 技術移転・技術支援

### (1) 高度技術移転現地実証の取り組み

先進的農業者等の高度なニーズに対応するため、新たな技術等の現地実証を関係機関、団体等と連携して行い、現地で組み立てながら完成させることにより、高度な開発技術の迅速な移転拡大を図る。

番号	部門	実証地区	実証課題名	今年度実施課題内容	今年度の成果	今後の課題等
1	作物	相馬市	東北地方太平洋沖地震による海水侵入及び土砂流入ほ場における除塩効果の実証(水稲)	高塩分土砂流入水田における除塩対策後の水稲の生育、収量への影響を調査検討し、除塩効果を実証する。	生育期間中は生育障害等の発生は見られなかった。収量は、500kg/10a程度確保できたが、倒伏が目立った。	倒伏対策として、窒素肥料の施用及び品種の選定について留意する必要がある。
2	作物	相馬市	東北地方太平洋沖地震による海水侵入及び土砂流入ほ場における除塩効果の実証(大豆)	高塩分土砂流入水田における除塩対策後の大豆の生育、収量への影響を調査検討し、除塩効果を実証する。	大豆栽培後の表層の土壌ECは、大豆栽培前に比べ低下していたが、下層部ほど高くなる傾向が見られた。生育は、場所により差がみられた。	今後、地下水により塩類が表層に集積する可能性が考えられる。
3	野菜	いわき市	津波被害地域における土壌調査及び除塩対策の実証(イチゴ)	津波被害地域におけるイチゴほ場の除塩対策の実証。	除塩後の表層土のECは0.29mS/cmまで低下した(除塩前0.81mS/cm)。畦上部のECはやや上昇が見られたが、現時点(1月末調査)では、生育への影響は見られない。	複数年にわたる除塩対策が必要と考えられる。

### (2) 農業総合センター技術移転セミナー

地域農業支援のため地域ごとにセミナーを開催し、普及に移しうる成果、参考となる成果等の農業総合センターの試験研究成果の現地への技術移転を図るとともに、意見交換の場とする。

回	時期・場所	テーマ等	内容	出席者数 ( )は農業者の内数
1	6月18日 郡山市 (農業総合センター)	リンドウの早出し生産技術について	○リンドウの早期出荷に向けた栽培技術について (作物園芸部花き科 矢島豊) ○県オリジナルリンドウ品種の育成状況について (作物園芸部品種開発科 福田秀之) ○ほ場研修、質疑応答・意見交換	44 (20)
2	8月6日 郡山市 (農業総合センター)	トルコギキョウ新品種の特性について	○トルコギキョウ新品種の特性について (作物園芸部花き科 宗方宏之) ○ほ場研修、質疑応答・意見交換	43 (20)

(3) 技術支援(鳥獣害防止対策)

内 容	市町村	月日	担当者
サル被害対策支援	猪苗代町	10/3	木幡栄子
	北塩原村	10/11	
ツキノワグマ被害対策支援	会津若松市	7/6、	
	猪苗代町	6/15、10/3	
	磐梯町	10/3、	
	柳津町	7/23	
	喜多方市	8/29、8/31	
イノシシ被害対策支援	国見町	7/6	
	二本松市	5/7、6/12、7/11、9/14	
	猪苗代町	6/15、7/3、7/12	
	矢祭町	9/6	
	磐梯町	10/3	
	郡山市	11/14	

2 指導・啓発活動

(1) 研修会

所属	担当者	内容	年月日	主催者
安全	武地誠一	平成24年度農薬適正使用アドバイザー認定研修	2012. 11. 28	環境保全農業課
安全	武地誠一	平成24年度農薬適正使用アドバイザー認定研修	2012. 12. 18	環境保全農業課
安全	武地誠一	平成24年度農薬管理指導士認定・更新研修	2012. 12. 6-7	環境保全農業課
安全	湯坐久	喜多方市有機農業研修会「有機JAS認証制度について」	2013. 1. 31	喜多方市環境にやさしい農業推進協議会
企画	木幡栄子	NOSAI講演会「鳥獣害対策」	2012. 6. 27	福島県農業共済組合連合会
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2012. 4. 10	JAすかがわ岩瀬（園芸振興大会）
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2012. 5. 16	JA全農福島（営農指導員養成技術研修講座）
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2012. 5. 18	JA伊達みらい（キュウリ生産部会放射能に関する講演会）
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2012. 5. 22	農業短期大学校（新規就農研修）
生産	三田村敏正	水との共生出前講座「水田の生物多様性」	2012. 5. 30	北会津ホテルの里を守る会、企画調整部土地・水調整課
生産	三田村敏正	NOSAI講演会「大豆の病害虫」	2012. 6. 27	福島県農業共済組合連合会
生産	丹治克男	家庭のできる農産物の保存技術について	2012. 6. 29	会津坂下農業普及所
生産	荒川昭弘・三田村敏正	畑の学校「生き物調査」（大玉村立大山小学校）	2012. 7. 18	県北農林事務所
生産	常盤秀夫	営農指導員養成技術研修講座「野菜の病害虫について」	2012. 7. 18	JA全農福島
生産	佐藤睦人	福島県農業資材商業会研修会	2012. 7. 20	福島県農業資材商業会
生産	常盤秀夫	農薬危害防止中央講習会「水稲・野菜における総合的病害虫管理（IPM）について」	2012. 7. 24	環境保全農業課
生産	宍戸邦明	園芸王国ふくしま創造県南地方推進研修会	2012. 7. 25	県南農林事務所
生産	丹治克男	農産加工における放射性物質の動態について	2012. 7. 31	相双農林事務所
生産	常盤秀夫	農薬危害防止中央講習会「水稲・野菜における総合的病害虫管理（IPM）について」	2012. 8. 2	環境保全農業課
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2012. 8. 3	特定給食施設等講習会
生産	常盤秀夫	園芸施設共済損害評価技術研修会「野菜の病害虫について」	2012. 8. 9	福島県農業共済組合連合会
生産	荒川昭弘・三田村敏正・齋藤伸考・宍戸邦明	専門技術向上研修「主要野菜の病害診断技術及び防除対策、最新の試験研究成果」	2012. 8. 9	農業振興課
生産	三田村敏正	田んぼの学校「生き物調査」（棚倉町立棚倉小学校）	2012. 8. 30	県南農林事務所
生産	荒川昭弘・宍戸邦明	園芸重点品目専門部会（トマト）会議	2012. 9. 4	園芸課
生産	丹治克男	農産加工と放射性物質の動態	2012. 9. 5	農業短期大学校
生産	関澤春仁	ブルーベリー類の抗インフルエンザ作用	2012. 9. 5	農業短期大学校

所属	担当者	内容	年月日	主催者
生産	佐藤真理	ナシ及びモモの加工素材化について	2012.9.5	農業短期大学校
生産	星絵吏子	グルテンを使った米粉加工品の開発（パン）	2012.9.5	農業短期大学校
生産	山下慎司	米粉の基礎	2012.9.5	農業短期大学校
生産	丹治克男	食品加工の前に注意することは～農業総合センターの研究成果から～	2012.11.9	県産品振興戦略課
生産	大越聡	平成24年度専門技術向上研修(土壌分析)	2012.11.9	農業振興課
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2012.11.19	農業短期大学校（教養講座）
生産	常盤秀夫	会津地方アスパラガス生産振興大会	2012.11.21	会津地方園芸振興協議会
生産	常盤秀夫	農薬懇談会	2012.11.22	福島県農薬卸商業協同組合
生産	宍戸邦明	キュウリホモプシス根腐病被害低減技術研修会	2012.11.27	県中農林事務所
生産	根本知明	夏秋ねぎ栽培技術向上セミナー	2012.11.27	いわき農林事務所
生産	常盤秀夫・岩淵幸治	農薬適正指導アドバイザー認定研修	2012.11.28	環境保全農業課
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2012.12.1	伊達市（試験栽培説明会）
生産	齋藤隆	平成24年度農薬管理指導士認定研修	2012.12.6	環境保全農業課
生産	常盤秀夫	農薬管理指導士認定研修「福島県農作物病害虫防除指針に基づく病害虫の防除等に関すること」	2012.12.7	環境保全農業課
生産	常盤秀夫・岩淵幸治	農薬適正指導アドバイザー認定研修	2012.12.18	環境保全農業課
生産	宍戸邦明	ブロッコリー病害対策研修会	2013.1.28	県南農林事務所
生産	三田村敏正	福島鉢花生産研究会研修会「鉢花の主な害虫について」	2013.2.5	福島鉢花生産研究会、県北農林事務所伊達農業普及所
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2013.2.6	肥料技術講習会
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2013.2.19	福島市川俣町農業士会研修会
生産	山田真孝	平成24年度病害虫防除員研修会 公開セミナー	2013.2.19	安全農業推進部
生産	三田村敏正	農薬工業会福島県担会五葉会研修会「生物多様性とIPM」	2013.2.21	農薬工業会福島県担会
生産	星絵吏子	米粉利用促進のための加工技術の開発	2013.3.4	農業総合センター会津地域研究所
生産	荒川昭弘・宍戸邦明	ばんだいトマト生産部会通常総会「トマトの害虫対策」「トマトの病害対策」	2013.3.8	あいづ農業協同組合
生産	三田村敏正	県南地方環境と共生する農業推進会議「水田農業と生物多様性」	2013.3.13	県南農林事務所
生産	丹治克男	食品加工と放射性物質の影響	2013.3.18	相双農林事務所
生産	荒川昭弘	東部アスパラガス生産部会通常総会「アスパラガス害虫対策」	2013.3.26	あいづ農業協同組合
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	2013.3.27	須賀川市認定農業会西袋支部
作物	宗方宏之	いわき切り花研究会研修会	2012.4.20	いわき切り花研究会
作物	鈴木幸雄	種子生産のための栽培管理技術と県オリジナル水稻新品種について	2012.6.5	福島県米改良協会

所属	担当者	内容	年月日	主催者
作物	慶徳庄司	NOSAI講演会「大豆の栽培管理」	2012. 6. 27	福島県農業共済組合連合会
作物	竹内恵	福島県農業共済組合畑作物技術講習会	2012. 6. 27	福島県農業共済組合連合会
作物	竹内恵	JAそうま大豆・麦部会研修会	2012. 7. 11	JAそうま大豆・麦部会
作物	佐藤誠	放射性物質対応技術ほか	2012. 7. 13	全国肥料商連合会福島県部会
作物	伊東かおる	営農指導員養成技術研修講座「野菜栽培の基礎知識Ⅰ 研究成果紹介 圃場研修」	2012. 7. 18	JA全農福島
作物	伊東かおる	園芸施設共済損害評価技術研修会「栽培技術について」	2012. 8. 9	福島県農業共済組合連合会
作物	原 有	キュウリホモプシス根腐病における耐病性台木及び発根促進資材活用による被害緩和技術の確立	2012. 11. 27	県中農林事務所
作物	宗方宏之	会津地方トルコギキョウ栽培技術セミナー	2012. 12. 6	会津農林事務所
作物	藤村恵人	平成24年度酒造講習会	2012. 12. 11	福島県酒造協同組合
作物	宗方宏之	福島県花き振興トップセミナー	2013. 1. 23	福島県花と緑の国づくり協議会
作物	長澤梓	平成25年度採種技術研修会	2013. 2. 5	福島県米改良協会
作物	鈴木安和	ユキヤナギ勉強会	2013. 2. 18	JAすかがわ岩瀬
作物	佐藤誠	平成24年度安全・安心稲作セミナー	2013. 2. 28	相双農林事務所
作物	矢島 豊	南会津地域花き研修会	2013. 3. 1	南会津農林事務所
作物	鈴木安和	西洋ウメモドキ栽培指導会	2013. 3. 12	JAすかがわ岩瀬
作物	藤田智博	天のつぶ栽培講習会	2013. 3. 19	JA郡山市種子生産部会
果樹	柳沼久美子	咲かそう、そうま日本なし振興セミナー	2012. 11. 27	相双農林事務所
果樹	柳沼久美子	平成24年度農薬適正使用アドバイザー認定研修および認定試験	2012. 11. 28	環境保全農業課
果樹	佐々木正剛	農薬管理指導士更新・認定研修会	2012. 12. 7	環境保全農業課
果樹	額田光彦・阿部和博・齋藤祐一・湯田美菜子・星博綱・柳沼久美子	福島県果樹経営者研究会冬期研修会	2013. 1. 11	福島県果樹経営者研究会
果樹	星博綱	JA伊達みらいプラム部会防除暦説明会	2013. 1. 28	JA伊達みらい
果樹	佐々木正剛	北海道・東北地区植物防疫職員等技術研修会	2013. 2. 21	東北農政局
畜産	遠藤孝悦・小田康典・石川雄治・生沼英之・内田守譜	コロラド州立大学・福島大学ジョイントワークショップ	2012. 5. 18-19	福島大学
畜産	石川雄治	福島家畜人工授精師講習会	2012. 5. 29	福島家畜人工授精協会
畜産	石川雄治	市場評価向上のための子牛飼養管理技術 本宮家畜市場ワンポイント講座	2012. 6. 12-13	全農福島県本部
畜産	小田康典	牛群検定研修会	2012. 7. 4	あぶくま牛群検定組合

所属	担当者	内容	年月日	主催者
畜産	生沼英之	JA郡山市酪農部会御館支部研修会	2012. 7. 6	JA郡山市酪農部会御館支部
畜産	武藤健司	市場評価向上のための子牛飼養管理技術 本宮家畜市場ワンポイント講座	2012. 7. 9-10	全農福島県本部
畜産	石川雄治	繁殖雌牛の飼養について 石川家畜市場ワンポイント講座	2012. 7. 11	石川郡畜産農業協同組合
畜産	武藤健司	技術研修会（草地除染による効果）	2012. 8. 1	福島県畜産振興協会
畜産	遠藤孝悦・武藤健司	研酪農協安達支部研修会	2012. 8. 2	福島県酪農協同組合安達支部
畜産	武藤健司	市場評価向上のための子牛飼養管理技術 本宮家畜市場ワンポイント講座	2012. 8. 9-10	全農福島県本部
畜産	生沼英之・吉田安宏	岩手畜産技術連盟講演会	2012. 9. 7	岩手畜産技術連盟
畜産	武藤健司	市場評価向上のための子牛飼養管理技術 本宮家畜市場ワンポイント講座	2012. 10. 10-11	全農福島県本部
畜産	生沼英之	岐阜県獣医学術研究会	2012. 10. 19	岐阜県獣医師会
畜産	遠藤孝悦・武藤健司	田村市農業委員会研修会	2012. 11. 8	田村市農業委員会
畜産	古閑文哉	本宮家畜市場セリ前ワンポイント講座	2012. 11. 11	全農福島県本部
畜産	京谷隆侍	平成24年度「飼料イネの研究と普及に関する情報交換会」	2012. 12. 3	(独) 畜産草地研究所、全国農業改良普及支援協会
畜産	京谷隆侍	農林水産省委託プロジェクト研究国産飼料プロ4系5系合同成果発表会	2012. 12. 4	農林水産省、山形大学農学部、東北大学大学院農学研究科
畜産	佐藤茂次・大西彩香	平成23年度集団「鶏飼養管理・生産技術及び鶏病対策コース」（地鶏の普及について）	2012. 12. 5	JICA
畜産	石川雄治	寒冷対策について 本宮家畜市場ワンポイント講座	2012. 12. 11	全農福島県本部
畜産	武藤健司	高度専門技術習得研修会	2012. 12. 17	福島県農林水産部
畜産	遠藤孝悦・武藤健司・生沼英之	帯広畜産大学研究交流会	2013. 1. 10	帯広畜産大学
畜産	武藤健司	田村市酪農振興協議会研修会	2013. 1. 29	田村市酪農振興協議会
畜産	大西彩香	会津地鶏産地懇談会「会津地鶏について」	2013. 1. 24	会津地鶏ブランド拡大戦略会議他
畜産	伊藤等・斉藤美緒・白田聡美・生沼英之・石川雄治・古閑文哉	家畜人工授精に関する講習会	2013. 2. 12-3. 4	福島県
畜産	武藤健司、石川雄治	福島県家畜人工授精師協会研修会	2013. 3. 14	福島県家畜人工授精協会
畜産	武藤健司、生沼英之	JAみちのく安達酪農専門部会研修会	2013. 3. 19	JAみちのく安達酪農専門部会
畜産	内田守譜	JA東西しらかわ和牛繁殖生産振興大会	2013. 3. 19	JA東西しらかわ
会津	大竹真紀	HBカラー栽培講習会	2012. 4. 26	あいづ農業協同組合
会津	大竹真紀	第3回宿根カスミソウ栽培技術学習会	2012. 9. 6	昭和村花き振興協議会
会津	山内敏美・新妻和敏	水稲疎植栽培セミナー	2012. 12. 10	会津疎植会
会津	山内敏美	会津美里町新鶴公民館レディースニューライフ研修会	2013. 1. 27	会津美里町新鶴公民館

所属	担当者	内容	年月日	主催者
会津	新妻和敏	水稲疎植栽培セミナー	2013. 2. 25	さなえ会
会津	新妻和敏	JA会津いいで稲作講習会	2013. 2. 26	会津いいで農業協同組合
会津	大竹真紀	南会津地域花き研修会	2013. 3. 1	会津みなみ農業協同組合
会津	大竹真紀	第5回宿根カスミソウ栽培技術学習会	2013. 3. 19	昭和村花き振興協議会
浜研	江上宗信	平成24年度水稲生育管理等指導講習会	2012. 7. 6	全国肥料商連合会福島県部会
浜研	江上宗信	会津方部青年農業士会視察研修	2012. 12. 3	会津方部青年農業士会
浜研	齋藤隆	岡山大学「植物遺伝資源・ストレス科学研究拠点」シンポジウム	2013. 2. 14	岡山大学資源植物科学研究所
短大	棚橋紺	農作業の安全について	2012. 6. 5	福島県米改良協会

(2)技術指導資料

所属	担当者	掲載資料名	発行年月	発行
企画	大野光	農地等の除染に使用した農業機械洗浄マニュアル	2012. 12	(社) 日本農業機械工業会
生産	関澤春仁	研究・技術シーズ集2011 (エゴマ加工品の酸化抑制法)	2012. 12	東北地域農林水産・食品ハイテク研究会
生産・作物	穴戸邦明・原有	ウリ科野菜ホモプシス根腐病被害回避マニュアル	2013. 2	(独) 農研機構 東北農業研究センター
生産	吉岡邦雄・丹治克男・関澤春仁	食品の調理・加工による放射性核種除去率データの整備報告書	2013. 3	(財) 原子力環境整備促進・資金管理センター
作物	佐藤誠 他	農作物の放射性セシウム対策に係る除染及び技術対策の指針 第2版	2013. 3	福島県農林水産部 (農業振興課)



## (3) 技術相談対応件数

部所	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
安全農業推進部	2	5	1	3	3	2	2	1	2	1	0	3	25
有機農業推進室	2	3	2	3	3	2	1	1	2	1	2	1	23
企画経営部	4	3	2	4	7	2	60	1	1	2	5	2	93
生産環境部	27	45	52	66	43	43	30	29	15	21	13	14	398
作物園芸部	25	33	38	26	20	25	26	10	12	10	10	13	248
果樹研究所	3	30	35	25	20	26	13	10	10	3	2	0	177
畜産研究所	3	5	0	3	2	2	2	0	0	3	10	5	35
会津地域研究所	3	5	6	15	4	0	1	0	0	0	1	2	37
浜地域研究所	9	7	8	4	5	2	2	2	0	1	3	0	43
合計	78	136	144	149	107	104	137	54	42	42	46	40	1,079

相談件数は相談区分ごとの延べ件数

### 3 主要農作物種子生産実績

主要農作物種子法に基づき、原原種・原種ほを設置し、優良種子を生産することにより本県主要農作物の生産性と品質向上を図った。

#### (1) 担当者

所属	職	氏名	担当作物
事務部			
農場管理課	課長	黒津 賢治	—
作物園芸部	部長	渡辺 有策	—
稲作科	科長	佐藤 誠	水稲
	主任研究員	藤田 智博	水稲
畑作科	科長	慶徳 庄司	小麦、大豆、なたね
	主任研究員	竹内 恵	小麦、大豆、なたね
	主任研究員	遠藤あかり	小麦、大豆、なたね
会津地域研究所	所長	山内 敏美	—
	専門研究員	鈴木 哲	水稲、小麦
	主任研究員	長谷川優子	水稲
	主任研究員	真部 武	小麦

#### (2) 原原種・原種ほ設置面積 (a)

項目	水稲	小麦	大麦	大豆	なたね
原原種 直営	30	2	0	16	0
原 種 直営	552	15	0	52	2
原 種 委託	0	0	0	10	0
合計	552	15	0	62	2

#### (3) 生産状況

##### ア 水稲

区分	品種	生産地	面積(a)	生産量(kg)
原原種 直営	ひとめぼれ	会津地域研究所	20	400
	天のつぶ	本 部	5	100
	あきたこまち	本 部	3	40
	あぶくまもち	本 部	2	20
	合計		30	560
原 種 直営	コシヒカリ	会津地域研究所	353	15,382
	ひとめぼれ	会津地域研究所	100	4,549
	天のつぶ	本 部	25	1,000
	チヨニシキ	本 部	41	1,200
	こがねもち	会津地域研究所	33	535
	合計		552	22,666

##### イ 小麦

区分	品種	生産地	面積(a)	生産量(kg)
原原種	アオバコムギ	本 部	2	20
原 種	きぬあずま	本 部	10	200
	ふくあかり	本 部	5	0

##### ウ なたね

区分	品種	生産地	面積(a)	生産量(kg)
原 種	アサカノナタネ	本 部	2	6

エ 大豆

区分	品種	生産地	面積(a)	生産量(kg)
原原種	直営 タチナガハ	本 部	16	5
原 種	直営 コスズ	本 部	4	2
	タチナガハ	本 部	26	15
	あやこがね	本 部	22	75
	小計		52	92
	委託 タチナガハ	大玉村	10	180
	合 計		62	272

4 オリジナル品種の親株等の供給実績

育成オリジナル品種について、種苗増殖するための親株等を育成し、許諾先に供給した。

作物	品種名	規格	供給数量	供給先	生産地
イチゴ	ふくはる香	ウィルスフリー化苗	10株	JA全農福島	作物園芸部
	ふくあや香	ウィルスフリー化苗	10株		
モモ	ふくしまモモ11号	穂木	7.5kg	福島天香園、菅野果樹園	果樹研究所
ブドウ	ふくしずく	穂木	1kg	菅野果樹園	果樹研究所
ソバ	会津のかおり	原原種	150kg	会津のかおり種子協議会	会津地域研究所

5 家畜管理及び生産実績

(1) 畜産研究所本所

ア 家畜繋養実績

(ア) 種雄畜

(頭)

品 種	年度初頭数	受 入		払 出		年度末頭数
		購 入	組 替	廃用	その他	
黒 毛 和 種	7		2			9
ランドレース種	9			3		6
デュロック種	4		2	1		5
大ヨークシャー種	1					1

(イ) 基幹種雄牛(黒毛和種)

名 号	生年月日		産 地	血 統		育種価(H24.6評価)		
	登録番号			父	母の父	枝重	ロース芯	脂肪交雑
勝隼茂	17.10.11		福島県石川郡石川町	平茂勝	第5隼福	67.948	7.648	2.400
	黒4850							
福景桜	17.11.22		福島県耶麻郡猪苗代町	景 東	福 桜	46.188	13.127	2.113
	黒4949							
喜多平茂	16.10.25		福島県喜多方市	平茂勝	北国7の8	58.102	8.802	2.611
	黒14188							
福福栄	16.10.13		福島県伊達郡川俣町	福 栄	平茂勝	45.180	-0.062	1.708
	黒14135							
第1勝光	15.3.27		福島県本宮市	平茂勝	東平茂	99.768	14.737	2.123
	黒原4570							
隼平茂	14.6.19		福島県石川郡玉川村	第5隼福	東平茂	27.090	9.932	2.080
	黒原4440							
日本桜	11.11.21		福島県双葉郡浪江町	北国7の8	糸清水	15.704	8.512	2.012
	黒13345							
登美貴	10.8.20		福島県双葉郡浪江町	北国7の8	高 栄	32.115	5.157	1.793
	黒原3937							

枝重：枝肉重量 ロース芯：ロース芯面積 脂肪交雑：脂肪交雑基準値

## (ウ)豚

品種	名号 (登録番号)	生年月日	血統	
			父	母
ランドレー ス種 (フクシマ L2)	07フクシマエル2-8-134-186-145 種第79566号	19. 6. 21	03フクシカ2-9-48-269-70440 種第78001号	05フクシマエル2-5-34-426-71960 種第466356号
	08フクシマエル2-108-155-329-1995 種第79945号	20. 9. 4	07フクシマエル2-8-134-186-145 種第79566号	06フクシマエル2-1-55-184-45 種第468555号
	09フクシマエル2-115-36-138-2884 種第79947号	21. 4. 2	05フクシマエル2-15-67-99-71846 種第78793号	03フクシカ2-2-46-140-70370 種第459421号
	10フクシマエル2-4-226-47-2968 種第80307号	22. 1. 10	03フクシカ2-7-57-153-70379 種第77997号	09フクシマエル2-110-126-49-2854 種第473492号
	10フクシマエル2-6-241-111-2976 種第80308号	22. 2. 13	03フクシカ2-11-27-32-70315 種第77999号	08フクシマエル2-5-145-55-1918 種第471509号
	10フクシマエル2-101-251-117-2977 種第80309号	22. 2. 15	06フクシマエル2-1-55-189-47 種第79257号	09フクシマエル2-103-151-64-2858 種第473493号
大ヨークシ ャー種 (アイリス W2)	アイリスタブル2-08-170326 種第39560号	20. 9. 19	アイリスタブル2-06-170307 種第38624号	アイリスタブル2-05-170389 種第106728号
デュロック 種 (フクシマ D桃太郎)	09フクシマテ <sup>°</sup> -モモタロウ-17-21-29-2874 種第42135号	21. 2. 14	07フクシカ3-7-38-153-1868 種第40807号	07フクシカ3-8-21-85-1839 種第80374号
	10フクシマテ <sup>°</sup> -モモタロウ-16-24-184-3599 種第43062号	22. 9. 7	07フクシカ3-6-32-129-1857 種第40806号	07フクシカ3-9-22-57-1828 種第80371号
	10フクシマテ <sup>°</sup> -モモタロウ-18-32-195-3600 種第43063号	22. 9. 9	07フクシカ3-8-21-89-1840 種第40805号	07フクシカ3-6-27-67-1832 種第80372号
	11フクシマテ <sup>°</sup> -モモタロウ-119-126-4-4192 種第43498号	23. 1. 12	09フクシマテ <sup>°</sup> -モモタロウ-19-28-139-2893 種第42136号	09フクシマテ <sup>°</sup> -モモタロウ-12-26-313-2962 種第83092号
	11フクシマテ <sup>°</sup> -モモタロウ-12-130-81-4211 種第43499号	23. 3. 13	07フクシカ3-5-37-172-1873 種第40808号	10フクシマテ <sup>°</sup> -モモタロウ-15-30-57-2997 種第83247号

イ 各家畜繋養状況

(ア) 乳用牛移動表

区 分	年度初 頭 数	増 加				減 少				年度末 頭 数
		生産	組替	購入	計	払下	組替	その他	計	
成雌牛	32	0	12	0	12	13	0	1	14	30
育成牛	29	27	0	0	27	13	12	3	28	28
計	61	27	12	0	39	26	12	4	42	58

(イ) 肉用牛移動表

区 分	年度初 頭 数	受 入				払 出				年度末 頭 数
		購 入	組 替	その他	計	出 荷	組 替	その他	計	
直接検定牛	14	4	3	0	7	2	1	0	3	18
待 機 牛	17	0	1	0	1	4	2	0	6	12
肥育試験牛	33	8	4	0	12	19	0	0	19	26
供 卵 牛	15	0	3	0	3	0	4	0	4	14
繁 殖 牛	0	0	7	1	8	0	0	0	0	8
計	79	12	18	1	31	25	9	0	39	78

(ウ) 豚移動表

区 分	年度初 頭 数	受 入				払 出				年度末 頭 数	
		生産	導入	組替	計	払下	組替	その他	計		
成豚	デュロック	4	0	0	2	2	1	0	0	1	5
(雄)	大ヨークシャー	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	ランドレース	9	0	0	0	0	3	0	0	3	6
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
成豚	デュロック	8	0	0	5	5	0	0	3	3	10
(雌)	大ヨークシャー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	ランドレース	23	0	0	1	1	3	0	3	6	18
	その他	10	0	0	1	1	2	0	0	2	9
試験豚		0	0	0	39	39	33	6	0	39	0
調査豚	デュロック	0	0	0	8	8	8	0	0	8	0
	ランドレース	0	0	0	8	8	8	0	0	8	0
	LWD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
子豚	系統豚	208	261	0	0	261	120	254	16	390	79
	大ヨークシャー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	デュロック	61	126	1	0	127	35	105	16	156	32
	雑種	70	224	0	0	224	0	197	11	208	86
肥育豚		82	0	0	519	519	456	21	6	483	118
計		476	611	1	583	1,195	669	583	55	1,307	364

ウ 各種生産実績

(ア) 生乳生産販売状況 (kg)

年 度	生産量	販売量	その他仕向け
12年度	191,120.4	184,350.3	6,770.1
13年度	215,699.9	210,806.0	4,893.9
14年度	241,805.0	237,625.0	4,180.0
15年度	214,549.0	210,274.0	4,274.0
16年度	210,418.0	207,885.0	2,632.0
17年度	216,934.2	214,372.3	2,561.9
18年度	224,926.0	222,483.3	2,442.7
19年度	251,066.1	241,242.0	9,824.1
20年度	254,555.8	249,000.0	5,555.8
21年度	244,116.2	229,463.0	14,653.2
22年度	282,271.7	252,208.0	30,063.7
23年度	272,346.2	241,905.0	30,441.2
24年度	213,863.0	197,742.0	16,121.0

(イ) 肉用牛精液生産実績

a 精液の生産及び払出

(本)

区 分	前年度繰越	生 産		払 出		廃 棄	年度末現在数
		生 産	その他	売 払	その他		
肉 用 牛	184,889	6,007	0	2,921	482	0	187,975

b 精液の月別生産状況

(本)

区 分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
肉 用 牛	877	1,148	424	562	250	553	0	266	191	448	644	644	6,007

c 精液払出状況

(本)

区 分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
肉用牛払出	311	213	221	363	234	132	128	273	178	210	255	403	2,921
所内使用	0	0	0	0	152	140	15	40	0	20	0	0	367

現場検定用他 含む

(ウ) 肉用牛検定実績

a 直接検定実績 (頭)

保留	去勢	検定中
4	6	5

b 現場後代検定実績 (頭)

対象種雄牛候補	3
---------	---

(エ) 牛受精卵生産実績

a 牛受精卵の生産及び受精卵払い下げ

採卵頭数	1頭当たり回収卵数	1頭当たり正常卵数	払い下げ卵数
38	9.1	6.1	38

(オ) 優良系統豚生産実績(フクシマL2)

a 維持頭数及び更新、配布状況(頭)

種雄豚数	6
種雌豚数	16
分娩腹数	40
生産子豚数(雄)	150
(雌)	137
子豚登記数(雄)	8
(雌)	11
自場更新数(雄)	0
(雌)	1
配布場所数	5
配布頭数(雄)	1
(雌)	10

b 繁殖成績

分娩種雌豚(頭)	生存産子	離乳頭数	育成率(%)
40	287	259	90.24

c と体形質

性頭	生体重	と体重	と体長	背腰長		と体幅	ロース		背脂肪の厚さ			大割肉片		
	と殺前 (kg)	冷 (kg)	(cm)	I (cm)	II (cm)	(cm)	長さ (cm)	断面積 (cm <sup>2</sup> )	カタ (cm)	セ (cm)	コシ (cm)	カタ (%)	ロース (%)	モモ (%)
去勢4 (標準偏差)	116.0 7.3	74.75 4.2	95.3 2.6	80.2 2.4	70.5 2.2	34.8 0.6	59.3 2.1	21.9 3.8	4.1 0.6	2.5 0.3	3.8 0.7	29.2 1.3	41.1 1.5	29.7 0.9
雌4 (標準偏差)	112.2 4.7	73.5 2.2	94.7 0.5	79.4 0.6	68.4 1.0	35.0 0.8	58.2 0.7	24.9 1.7	3.7 0.3	1.9 0.3	3.1 0.3	28.5 1.1	42.4 1.8	29.2 0.9

(カ) デュロック種「フクシマD桃太郎」生産実績

a 維持頭数及び更新、配布状況(頭)

種雄豚数	5
種雌豚数	10
分娩腹数	21
生産子豚数(雄)	102
(雌)	92
子豚登記数(雄)	8
(雌)	8
自場更新数(雄)	2
(雌)	5
配布場所数	6
配布頭数(雄)	7
(雌)	2

b 繁殖成績

分娩種雌豚(頭)	生存産子	離乳頭数	育成率(%)
21	194	121	62.3



c と体形質

性 頭	生体重	と体重	と体長	背腰長		と体幅	ロース		背脂肪の厚さ			大割肉片		
	と殺前 (kg)	冷 (kg)	(cm)	I (cm)	II (cm)	(cm)	長さ (cm)	断面積 (cm <sup>2</sup> )	カタ (cm)	セ (cm)	コシ (cm)	カタ (%)	ロース (%)	モモ (%)
去勢4 (標準偏差)	111.9 3.8	69.8 3.0	89.4 1.0	74.4 0.8	64.6 1.4	35.7 0.4	54.1 1.5	21.9 0.9	4.6 0.4	2.3 0.3	2.7 0.2	31.5 0.8	38.4 0.9	30.1 0.7
雌4 (標準偏差)	105.8 3.1	67.8 2.2	90.5 1.6	75.6 1.6	65.3 0.8	35.4 0.7	55.8 2.4	23.7 2.0	3.8 0.4	2.2 0.3	3.5 0.5	30.9 0.1	38.5 1.1	30.6 1.1

(キ) 飼料作物生産実績

a 牧乾草生産量(本所)

区分	収穫期間	面積 (a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総収量	10a当り収量	総収量	10a当り収量
1 番草	5/21 ~ 5/25	289	24,220	838	11,960	414
2 番草	7/20 ~ 7/27	289	10,240	354	8,765	303
3 番草	9/ 3 ~ 9/ 6	289	10,980	380	4,762	165
計	—	—	45,440	1,572	25,487	882

b トウモロコシサイレージ(本所)

圃場 No.	収穫期間	面積 (a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総収量	10a当り収量	総収量	10a当り収量
8、9	8/20~8/27	446	193,550	4,340	49,516	1,110

収穫面積は、ほ場内枕地を除く実栽培面積。

(2) 養鶏分場

ア 種鶏飼育状況 (羽)

区 分	計
純系会津地鶏	427
大型会津地鶏	231
大型会津地鶏後継系統	501
大型シャモ	325
ロードアイランドレッド種P13系統	439

試験用素雛及び一般譲渡用雛生産のため5系統を飼養している。

イ 孵化実績

区 分	入卵個数	孵化羽数
会津地鶏	8,385	6,556
ふくしま赤しゃも	418	344
その他	19,736	14,399
計	28,539	21,299

ウ 雛の生産状況(販売羽数)

区 分	雛 (羽)			計
	初生雛	中雛	大雛(種鶏)	
会津地鶏	1,641	—	—	1,641
ふくしま赤しゃも	176	—	—	176
種鶏(ロードアイランドレッド種)	1,500	—	916	2,416
種鶏(大型会津地鶏)	300	—	—	300
種鶏(大型シャモ)	—	—	85	85
計	3,617	—	1,001	4,618

エ 卵の生産状況

月	産卵数 (個)	内 訳			
		正常卵	破損卵	種卵	廃棄卵
4	44,048	36,660	907	5,078	1,403
5	41,703	34,005	979	4,462	2,257
6	34,931	28,284	872	3,986	1,789
7	15,409	13,403	458	901	647
8	6,986	5,139	95	1,405	347
9	9,802	8,825	203	384	390
10	24,030	22,303	458	240	1,029
11	33,248	29,019	505	2,142	1,582
12	41,989	32,692	701	6,555	2,041
1	42,118	38,844	578	1,755	1,149
2	34,532	28,649	484	4,204	1,195
3	35,313	28,297	541	5,288	1,187
計	364,312	306,120	15,016	36,400	6,776

(3) 沼尻分場

ア 肉用牛移動表

品種	区分	年度初 頭数	受 入				払 出				年度末 頭数
			生産	組替	その他	計	払下	組換	その他	計	
黒毛和種	成牛(雌)	112	0	11	0	11	0	2	2	4	119
黒毛和種	子牛	35	56	0	0	56	20	19	6	45	46
黒毛和種	肥育試験牛	31	0	0	0	0	15	0	0	15	16
	計	178	56	11	0	88	35	21	8	64	181

イ 産子成績

品種	分娩頭数	生産頭数	(死産)	(へい死)	事故率
黒毛和種	58頭	50頭	(3頭)	(6頭)	18%

ウ 繁殖成績

人工授精(受胎頭数/受胎牛授精回数)	受精卵移植(受胎頭数/全移植回数)
50%(46/92)	21.4%(6/28)

エ 牧草生産量(沼尻分場)

区分	刈取期間	面積 (a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総収量	10a当り収量	総収量	10a当り収量
1 番草	—	—	—	—	—	—
2 番草	—	—	—	—	—	—
3 番草	—	—	—	—	—	—
計	—	—	—	—	—	—

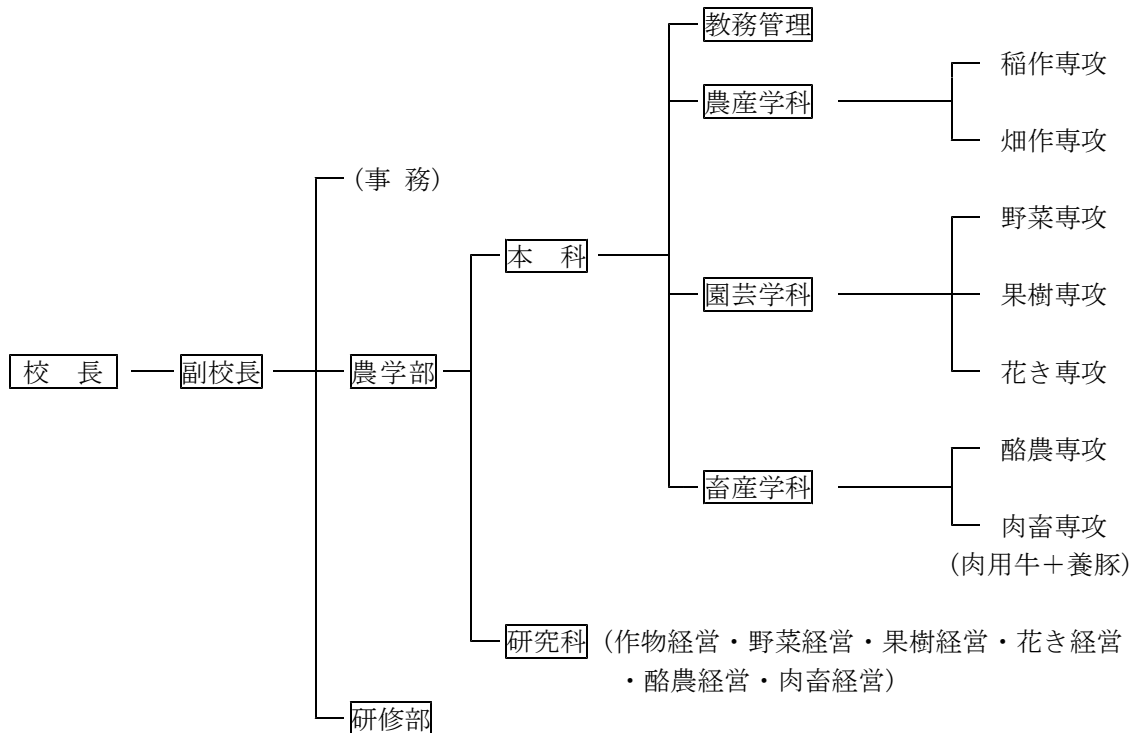
猪苗代町は国の通知に基づく永年生牧草の流通・利用を自粛する地域であるため生産できなかった。  
なお、草地の維持管理のための収穫は実施した。

## IV 先進的農業者育成・支援

# 1 農業短期大学の業務実績

## (1) 概要

### ア 組織



### イ 施設

#### (ア) 建物

区分	主な施設内容
教育施設	本館(教室、教養ホール、視聴覚教室、職員室、事務室、会議室、教育相談室、講師控室) 研究実験棟(各学科、専攻教室(ゼミ室)、実験演習室、研究室、無菌室、培養室) 多目的学習棟(図書室、情報処理演習室、学生ホール) 男子寮(けやき寮)、女子寮(せんだん寮)、食堂、体育館、運動場、テニスコート
実習教育施設	実習教育棟、作業棟(園芸、農産)、機械格納庫、果実選果場、養液栽培温室、育成栽培管理温室、パイプハウス、乳牛舎、肉牛舎、肥育牛舎、豚舎、畜産加工演習棟、堆肥舎
研修施設	研修棟、宿泊施設(あかしや寮) 農業機械実習棟(整備実習室)、トラクタ運転練習コース 畜産加工技術センター(開発室、発酵加工室、高湿加工室、粉体加工室)

#### (イ) 土地

面積 52.1ha

内訳：建物敷地5.9ha、水田7.4ha、普通畑2.9ha、樹園地2.7ha、牧草地12.9ha、山林9.8ha、その他10.5ha(グラウンド、テニスコート等)

## (2) 農学部の取り組み

次代を担う農業者及び地域農業指導者を養成するため、全寮制のもとに学生の自主性・協調性等を醸成しながら、農業に関する講義や実験・演習、実習をきめ細かく行った。

平成24年度も、農業総合センター農業短期大学の教育のあり方検討委員会により取りまとめられた「農業短期大学の機能強化に関する提言書」(平成19年2月)の実現に向け、「資格等の取得の充実」等各項目について取り組んできた。

### ア 農業への意欲の高い人材育成のための教育内容の充実

#### (ア) 資格等の取得の充実

各種資格取得対策に積極的に取り組んだが、合格率は昨年度を下回る結果となった。

大型特殊運転免許については、既取得学生を合わせ49名中47名が取得した。

(イ) 専修学校化について

平成20年度より専修学校化し、専門士(農業専門課程)の称号が付与された者は49名であった。また、独立行政法人日本学生支援機構の奨学金貸与者は第1種7名、第2種14名であった。

(ウ) 農業高校との連携について

農業高等学校の生徒及びPTAの研修や視察を本校において4件受け入れた他、農業高校に出向き、農業短期大学の学校説明やPRを行った(2件)。また、高校学校教育研究会農業部会を連携し、農業技術検定等を支援した。

イ 時代のニーズに対応した学科について

(ア) 農家、流通・市場等体験学習の充実

「先進農家等留学研修」を1学年時に14日間の宿泊研修として実施した。

また、2学年時には「企画研修」を個人ごとに実施し、学生個々の目的や目標に沿った研修を行った。

(イ) 経営・販売力向上のためのカリキュラムの充実

パソコンを活用した農業経営管理の演習や「マーケティング論」「農業情報処理Ⅱ」等により、農畜産物の付加価値を高め販売するための理論やインターネットを活用した農産物の直接販売など具体的な手法についての講義を行った。

(ウ) 新たな農業関連事業に関するカリキュラムについて

農業協同組合や農業共済組合について学ぶ「農業団体論」に加え、平成20年度より開講した「農業関連産業論」では、地域中小企業人材確保・定着支援事業(出前講座)を活用し、食品産業における現状と展望について学習した。この他、農産物の生産、流通、消費に関する産業の役割やシステムについて学習する校外研修を実施した。

また、「環境保全と農業」等の科目で、除染や放射性物質関連の内容をとりあげた。

ウ 農業総合センターを活用した教育内容の充実

農業総合センターの研究員の指導のもと、「有機農業」「生物工学Ⅰ・Ⅱ」等について授業を行った。

エ その他農学部教育の内容と成果

(ア) 各種プロジェクト発表会等への参加

本年度は、以下の発表会に本校の代表が参加した。

- a 東日本農業大学校等プロジェクト発表・交換大会(青森県 1/21~22)  
4名参加(意見発表1名、プロジェクト発表3名)
- b 全国農業大学校等交換大会・プロジェクト発表会(東京都 2/19~21)  
5名参加(プロジェクト発表1名)
- c 福島県農村青年会議プロジェクト発表大会(郡山市 2/8)  
2名参加

(イ) 学生の生活指導

非常勤舎監6名を委嘱し、カウンセリングを随時実施するなど学生の生活指導に努めた。また、舎監会議を開催し、舎監業務の徹底を図るとともに、学生への対処法等について話し合い、学生の生活実態の把握と指導に努めた。

さらに、のべ48名の職員による舎監を充て、学生の寮生活指導にあたった。

(ウ) 就農促進、進路指導対策

就農率の向上及び地域農業指導者養成を目指した進路指導を実施した結果、3月21日現在就農率18.3%、指導者18.3%である。

また、雇用情勢の厳しさが増す中、進路内定率向上のため、試験対策勉強会、小論文の添削・助言や模擬面接等を実施し、就職予定の学生に対する支援強化に努めるとともに、職員による農業団体や農業法人、農業関連会社等への積極的なアプローチを行い、求人の開拓を行った。

3月21日現在の内定率は、92.3%と昨年同時期の内定率93.4%を若干下回っている。

オ 学生数

(ア) 専攻別

1 学年 (人)

学科	専攻	男子	女子	計
農産	稲作	6	0	6
	畑作	4	0	4
	計	10	0	10
園芸	野菜	4	4	8
	果樹	4	2	6
	花き	2	4	6
	計	10	10	20
畜産	酪農	1	3	4
	肉畜	1	2	3
	計	2	5	7
合 計		22	15	37

2 学年 (人)

学科	専攻	男子	女子	計
農産	稲作	8	1	9
	畑作	6	0	6
	計	14	1	15
園芸	野菜	8	1	9
	果樹	7	0	7
	花き	4	3	7
	計	19	4	23
畜産	酪農	4	0	4
	肉畜	3	4	7
	計	7	4	11
合 計		40	9	49

研究科 (人)

学 科	男子	女子	計
作物経営	1	0	1
野菜経営	2	0	2
合 計	3	0	3

(イ) 農家、非農家別 (人)

	1 学年		2 学年		研究科		合計		
	学生数	割合	学生数	割合	学生数	割合	学生数	割合	
農 家	専業	8	21.6%	10	20.4%	0	0.0%	18	20.2%
	兼業	16	43.2	20	40.8	1	33.3	37	41.6
	計	24	64.8	30	61.2	1	33.3	55	61.8
非農家	13	35.2	19	38.8	2	66.7	34	38.2	
計	37	100	49	100	3	100	89	100	

(ウ) 出身高校課程別 (人)

	1 学年		2 学年		研究科		合計	
	学生数	割合	学生数	割合	学生数	割合	学生数	割合
農業高校	20	54.1%	25	51.0%	0	0.0%	45	50.6%
普通高校	11	29.7	13	26.5	3	100	27	30.3
その他	6	16.2	11	22.4	0	0.0	17	19.1
計	37	100	49	100	3	100	89	100

カ 教育科目

(ア) 本科

a 教養・専門科目

区分	科 目	単位	時 間			1学年		2学年		備 考	
			講義	実演	実習	前期	後期	前期	後期		
教 養 科 目	各 科	小論文	1	15		15				2班編成(球技大会、スポーツ大会を含む)	
		生物	2	30		30					
		化学	2	30		30					
		数学	2	30		30					
		体育	2		60	20	20	14	6		
	教養講座	1	15		4	4	4	3			
	科 共 通	(選択) 経済	1	15		15					
		(選択) 法律	1	15		15					
		(選択) 英会話	1	15		15					
		(選択) 心理	1	15			15				
目 通	必修科目	10	120	60		129	24	18	9	3単位必須	
	選択科目 計	4 14	60 180	60		45 174	15 39	18	9		
専 門 科 目	各 科	国際農業比較論	1	15		15				植物5回、動物2回 作物園芸5回、畜産4回	
		生物工学 I	1	15		15					
		簿記	2	30		30					
		農学概論	2	30		30					
		農業概論	2	30		30					
		農業機械 I	2	30		30					
		簿記演習	2		60	60					
		基礎実習	2			90	90				
		農畜産物加工	1	15				15			
		農業情勢	1	15				15			
	科 共 通	農業情報処理 I	1	15				15		2班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成 3班編成	
		農畜産物加工演習	1		30			30			
		生物工学 I 実験	1		30			30			
		土壌肥料実験	1		30			30			
		農業情報処理 I 演習	2		60			44	16		
		農業機械 I 実習	2			90		45	45		
		農産物流通	1	15					15		
		有機農業	1	15					15		
		環境保全と農業	2	30					30		
		土壌肥料概論	2	30					30		
		卒業論文	4		120				60		60
		マーケティング論	1	15							15
		農業経営演習	1		30						30
		農業経営	2		30						30
		マネージメントゲーム16hr 含む									
		目 通	択 農業団体論	1	15				15		
一 農業関連産業論	1		15				15				
択 農村調査法	1		15				15				
一 簿記会計	1			30			30				
(選択) 生物工学 II	1		15					15			
(選択) 農業機械 II 実習	1				45			45			
(選択) 農業気象	1		15					15			
(選択) 農業情報処理 II	1		15					15			
(選択) 食用きのこ論	1		15					15			
(選択) 農業土木概論	1		15					15			
目 通	必修科目	38	330	360	180	300	224	211	135	6単位必須	
	選択科目	10	120	30	45		75	60	60		
	計	48	450	390	225	300	299	271	195		

b 専攻科目

区分	科目	単位	時間			1学年		2学年		備考	
			講義	実演	実習	前期	後期	前期	後期		
専攻	農 共通	植物病理	1	15			15			2班編成(病理4回、昆虫3回)	
		応用昆虫	1	15				15			
		植物病理昆虫実験	1		30				30		
		植物育種	2	30					30		
	産 稲作	植物生理	2	30					30	県内研修、県外研修、企画研修	
		稲作各論先進農家等留学研修	5			225	225				
		稲作各論研修	2			90	8	28	46		8
		稲作各論実習	18			810	225	180	225		180
		稲作各論Ⅰ	2	30				30			
		稲作各論Ⅱ	2	30					30		
		稲作各論Ⅲ	2	30							30
	科 畑作	畑作各論先進農家等留学研修	5			225	225			県内研修、県外研修、企画研修	
		畑作各論研修	2			90	8	28	46		8
		畑作各論実習	18			810	225	180	225		180
		畑作各論Ⅰ	2	30				30			
畑作各論Ⅱ		2	30					30			
畑作各論Ⅲ		2	30						30		
農産学科共通専攻科目計		38	180	30	1125	473	253	361	248		
攻	園 共通	植物病理	1	15			15			2班編成(病理4回、昆虫3回)	
		応用昆虫	1	15				15			
		植物病理昆虫実験	1		30				30		
		植物育種	2	30					30		
	芸 野菜	植物生理	2	30					30	県内研修、県外研修、企画研修	
		野菜各論先進農家等留学研修	5			225	225				
		野菜各論研修	2			90	8	28	46		8
		野菜各論実習	18			810	225	180	225		180
		野菜各論Ⅰ	2	30				30			
		野菜各論Ⅱ	2	30					30		
	学 果樹	野菜各論Ⅲ	2	30						30	県内研修、県外研修、企画研修
		果樹各論先進農家等留学研修	5			225	225				
		果樹各論研修	2			90	8	28	46	8	
		果樹各論実習	18			810	225	180	225	180	
		果樹各論Ⅰ	2	30				30			
果樹各論Ⅱ		2	30					30			
科 花き	果樹各論Ⅲ	2	30						30	県内研修、県外研修、企画研修	
	花き各論先進農家等留学研修	5			225	225					
	花き各論研修	2			90	8	28	46	8		
	花き各論実習	18			810	225	180	225	180		
	花き各論Ⅰ	2	30				30				
	花き各論Ⅱ	2	30					30			
園芸学科共通専攻科目計		38	180	30	1125	473	253	361	248		
目	畜 共通	家畜育種	1	15			15				
		家畜解剖	1	15				15			
		家畜繁殖	1	15					15		
		家畜衛生	1	15					15		
		家畜解剖実験	1		30				30		
	産 酪農	家畜飼養	2	30					30	県内研修、県外研修、企画研修	
		酪農各論先進農家等留学研修	5			225	225				
		酪農各論研修	2			90	8	28	46		8
		酪農各論実習	18			810	225	180	225		180
		酪農各論Ⅰ	2	30				30			
		酪農各論Ⅱ	2	30					30		
	学 肉畜	酪農各論Ⅲ	2	30						30	県内研修、県外研修、企画研修
		肉畜各論先進農家等留学研修	5			225	225				
		肉畜各論研修	2			90	8	28	46	8	
		肉畜各論実習	18			810	225	180	225	180	
肉畜各論Ⅰ		2	30				30				
肉畜各論Ⅱ		2	30					30			
畜産学科共通専攻科目計		38	180	30	1125	473	253	361	248		
必修科目合計	農産学科	86	630	450	1305	902	501	590	392		
	園芸学科	86	630	450	1305	902	501	590	392		
	畜産学科	86	630	450	1305	902	501	590	392		
選択科目合計		9	135			135				講義9科目9単位選択の場合	
学校行事			180			180					
合計		95	2700			2700					



## (イ) 研究科

## a 共通・専攻科目

区分	科 目	単位数	時 間			前期	後期	備 考	
			講義	実・演	実習				
共 通 科 目	農業経営	2	30			30			
	農業法規	2	30			20	10		
	情報処理	1	15			15			
	情報処理演習	1		30		30			
	農産物流通	1	15				15		
	財務会計	1	15			15			
	財務会計演習	1		30		30			
	経営工学	1	15				15		
	税法	1	15			15			
	農政時事	1	15				15		
	マーケティング	1	15			15			
	マーケティング演習	1		30		22	8		
	環境保全型農業論	1	15			8	7		
国際農業	1	15			8	7			
国際農業実習	2			90		90			
小 計		18	195	90	90	208	167		
専 攻 科 目	共通	卒業論文(研究プロジェクト)演習	5		150		24	126	
		卒業論文(研究プロジェクト)実習	12			540	300	240	
	作物	作物各論	4	60			30	30	
	経営	作物各論実習	3			135	70	65	
	野菜	野菜各論	4	60			30	30	
	経営	野菜各論実習	3			135	70	65	
小 計		24	60	150	675	424	461		
計		42	255	240	765	632	628		
学 校 行 事					40	20	20		
合 計					1300	652	648		

## b 卒業論文(研究プロジェクト)

学生氏名	専攻	課題名	指導担当職員
梶村 洋之	野菜経営	ナスの露地栽培における土着天敵とその温存植物の利用	荒川昭弘(作物保護科)
齊藤 雅浩	野菜経営	夏秋トマトにおける省力的な誘引方法の検討	齋藤裕史(野菜科)
添田 康貴	作物経営	水稻の密植栽培におけるコナギの発生抑制効果について	横井直人(研究科)

## キ 非常勤講師一覧

## (ア) 本科

	科 目	講師名	所属・職・機関
教 養 科 目	小論文	成田章江	第一学習社小論文講師
	化学	柳沼力夫	元日本大学工学部非常勤講師
	(選択)経済	藤原一哉	福島大学経済経営学類教授
	(選択)法律	吉川幸雄	吉川幸雄法律事務所長
専 門 科 目	(選択)英会話	担当職員	英会話スクール
	(選択)心理	玄永牧子	元福島学院大学専任講師
	教養講座(救急救命講座)	担当職員	矢吹消防署
	教養講座(福島県農業総合センターの放射性物質 対策研究の取り組み)	吉岡邦雄	農業総合センター生活環境部長
専 門 科 目	教養講座(交通安全講話)	國井文人	白河警察署交通課第1係巡查長
	教養講座(卒業記念講演「夢をかなえるコツ」)	白石豊	福島大学人間発達文化学類教授
	国際農業比較論、農産物流通	玉城昌幸	宇都宮大学名誉教授
	農薬概論(劇毒物の解説)	柳沼力夫	元日本大学工学部非常勤講師
	農畜産物加工	鋏野信子	郡山女子大学短期大学部准教授
	農業情報処理 I	担当職員	パソネットワールド
	農畜産物加工演習(園芸(花き専攻))	中村良美	フラワースタジオ ポコアポア主宰
	生物工学 I 実験(動物)	担当職員	農業総合センター畜産研究所
	有機農業	担当職員	農業総合センター
	マーケティング論	西元良行	福島大学名誉教授
農業経営演習	担当職員	株式会社はらき総合会計	
農業経営	津谷好人	宇都宮大学農学部教授	

科 目		講師名	所属・職・機関
専 門 科 目	(選択) 農業団体論(農協論)	担当職員	福島県農業協同組合中央会
	(選択) 農業団体論(共済論)	担当職員	福島県農業共済組合連合会
	(選択) 農村調査法	安倍秀雄	元東北農政局統計情報部長
	(選択) 生物工学Ⅱ(動物)	担当職員	農業総合センター畜産研究所
	(選択) 農業気象	新井俊男	元福島気象台予報官
	(選択) 農業情報処理Ⅱ	担当職員	パソネットワールド
	(選択) 食用きのこ論 (選択) 農業土木概論	担当職員 担当職員	森林林業総室 農村整備総室
専攻 科目	植物育種	岩崎繁	元農林水産部次長
	家畜解剖実験	担当職員	県中家畜保健衛生所
	家畜衛生	担当職員	県南家畜保健衛生所

(イ) 研究科

科 目		講師名	所属・職・機関
共 通 科 目	農業経営	担当職員	農業総合センター
	農業法規	担当職員	農村計画課、農業総合センター
	情報処理及び同演習	担当職員	パソネットワールド
	農産物流通及び国際農業	玉城昌幸	宇都宮大学名誉教授
	経営工学	担当職員	農業総合センター
	税法	板倉雄一郎	税理士法人寺田共同会計事務所(税理士)
	マーケティング及び同演習 環境保全型農業論	西元良行 舘川洋	福島大学名誉教授 開発肥料販売株式会社特別技術参与
専攻 科目	共通 卒業論文演習及び実習	担当職員	農業総合センター
	野菜経営 野菜各論及び実習	担当職員	農業総合センター
	作物経営 作物各論及び実習	担当職員	農業総合センター

ク 教育行事経過

月 日	行 事 名
平成24年 4月 9日 11日 17日 18日	始業式
	入校式
	健康診断
	防火避難訓練
5月 22日 25日 31日～6月1日	植付け祭、スポーツ大会(学生自治会主催)
	卒業論文設計発表会(本科)
	農業大学校等親善球技大会(山形県)、球技大会(学生自治会主催)
6月 20日～7月3日	先進農家等留学研修(前期)
7月 16日	学校記念日(休業日)
8月 6日～19日 23日 24日～9月6日	夏期休業
	毒物劇物取扱者資格試験
	先進農家等留学研修(後期)
9月 7日 9月 24日～28日	先輩と語る会(1学年)
	前期試験
10月 21日 25日～26日	擲隆祭(擲隆祭実行委員会主催)
	県外研修(1学年)
11月 9日 30日	意見発表会選考会(1学年)
	収穫祭、球技大会(学生寮自治会主催)
12月 11日 12日 13日 20日 25日～1月15日	防火避難訓練
	卒業論文発表会(研究科)
	学科内卒業論文発表会
	卒業論文発表会(全体)
	冬期休業
平成25年 1月 18日～19日 27日～31日 30日～3月5日	東日本農業大学校等プロジェクト発表・交換大会(青森県)
	後期試験
	家畜人工授精に関する講習会
2月 1日 10日 19日～21日 24日 27日	就農予定学生と県農林水産部長との懇談会
	県農村青年会議プロジェクト発表会(郡山市)
	全国農業大学校等プロジェクト発表会・交換大会(研究科、東京都)
	第133回日商簿記検定試験
	卒業記念講演
3月 7日 8日 11日～	終業式
	卒業式
	春期休業

ケ 各種資格取得状況

免許・資格	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)
大型特殊(農耕車に限る)	43(53)	41(53)	95.3(100.0)
けん引(農耕車に限る)	39(40)	31(37)	79.5( 92.5)
毒物劇物取扱者(一般・農薬用品目)	50(53)	5(10)	10.0( 18.9)
日商簿記検定(3級)	10(18)	2( 5)	20.0( 27.8)
家畜人工授精師	9(13)	6(13)	66.6(100.0)

( )内は平成23年度実績

コ 卒業生の進路状況

進 路		本科	研究科
就 農	自家	3	1
	法人	4	1
	研修	0	0
	計	7	2
非就農	臨時職員(本校等)	1	0
	公務員	2	0
	農協	8	1
	農業関連団体	0	0
	農業関連産業	17	0
	他産業	5	0
	進学	1	0
	その他	5	0
未 定	3	0	
合 計	49	3	

(3) 研修部の取り組み

ア 研修実施状況

平成24年度の研修は、昨年の震災や原発事故の影響がまだ続いているものの、計画どおりの内容で研修を実施した。

研修の内容は、本県への積極的な就農を推進するための就農研修、地域産業6次化を推進するための農産加工研修及び農業機械の安全操作と多発する農作業の事故を未然に防止するための農業機械研修とし、各研修とも放射性物質に関する基礎的な知識や除染対策などについても学べる内容とした。

イ 研修実績

(ア) 就農研修

a 就農体験研修

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
(a)春コース	[講義] ・栽培のための基礎知識 ・営農に係る基礎知識 [実習] ・栽培管理実習 ・農業機械体験実習	就農予定(希望)者	5～8月 (日曜日開催、7日)	7名
(b)秋コース	[講義] ・栽培のための基礎知識 ・営農に係る基礎知識 [実習] ・栽培管理実習 ・農業機械体験実習	就農予定(希望)者	9～11月 (平日開催、7日)	11名

b 新規就農研修

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
(a)基礎コース	[講義、演習、見学] 共通科目：農薬適正使用、土壌肥料、気象 専門科目：稲作、野菜、果樹、花き、有機農業、農業機械	新規就農3年以内で農林事務所が受講を勧める農業者	5～11月 (平日開催、43日)	7名
(b)専門コース	[講義科目] 土壌肥料、水稲、野菜、果樹、花き、有機農業 ※講義科目の中から1科目以上選択して受講できる。	農業生産法人等に就農した農業者で農林事務所が受講を勧める農業者	5～10月 (平日開催、1科目5日程度)	9名

(イ) 農産加工研修

a 加工初心者基礎研修

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
農産物加工活動の基礎 (a)第1回	農産物加工に取り組むために必要な基礎知識を講義した。 ①加工品販売と食品営業許可、JAS表示等 ②施設運営の基礎等	今後、農産物加工活動を始めようとする農業者	5月25日 (1日)	38名
(b)第2回	③加工に必要な施設・器具・機材等		12月5日 (1日)	20名

b 6次化推進研修

米粉の知識、農産加工品の保存技術及び商品化のための知識を習得する。

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
(a)米粉活用研修 i 米粉のパン	惣菜パンの作り方	農産物加工販売者若しくは予定者	6月6日 (1日)	24名
ii 米粉の菓子	和菓子等の作り方		6月20日 (1日)	20名
iii 米粉の麺	ソース・たれの作り方		9月19日、11月21日 (2日)	27、19名

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
(b)保存技術研修				
i 食品の乾燥	乾燥機器の事例紹介、脱酸素剤の使用方法	農産物加工販売者若しくは予定者	7月4日 (1日)	24名
ii 漬物の保存	加熱殺菌の方法		7月18日 (1日)	21名
iii 果物の保存	ジャム加工と瓶詰め		8月22日 (1日)	27名
iv 切餅の保存	真空包装、脱酸素剤の使用方法		11月7日 (1日)	19名
(c)商品化研修				
i 農産加工と放射性物質	農産加工による放射性物質の動態	農産物加工販売者若しくは予定者	5月25日 (1日)	34名
ii 商品のPR	パッケージデザインについて		8月1日 (1日)	41名
iii 地域産業との連携	県内の委託加工業者の取組みについて		9月5日 (1日)	18名

(ウ)農業機械研修

a 運転免許取得研修

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
(a)トラクタ運転免許取得	大型特殊免許(農耕車限定)取得のための運転練習等			
i 第1回	①運転練習 ②仕業点検 ③農作業安全知識 ④傾斜路走行体験	農業者等(60歳未満)	5月29日～6月1日 (4日)	9名
ii 第2回		農業者等(60歳未満)	6月5～8日 (4日)	8名
iii 第3回		農業者等(60歳以上)	10月29日～11月2日 (5日)	9名
iv 第4回		農業者等(60歳未満)	11月6～9日 (4日)	11名
(b)トラクタけん引免許取得	けん引免許(農耕用)取得のための運転練習	農業者等		
i 第1回			6月19～22日 (4日)	0名
ii 第2回			6月26～29日 (4日)	5名
iii 第3回			11月13日～16日 (4日)	14名

b 農業機械技術研修

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
(a)初めての刈払機	刈払機の基礎知識、基本操作法の習得	農業に従事している者		
i 第1回			4月21日 (1日)	0名
ii 第2回			6月15日 (1日)	5名
iii 第3回			8月3日 (1日)	9名
(b)刈払機の資格取得	刈払機取扱作業安全衛生教育修了証取得のための刈払機の安全操作習得	農業に従事している者		
i 第1回			6月16日 (1日)	19名
ii 第2回			8月4日 (1日)	0名
(c)初めてのアーク溶接	アーク溶接の基礎知識、基本操作法の習得	農業に従事している者	11月21日 (1日)	10名
(d)初めてのアーク溶接	アーク溶接作業安全衛生教育修了証取得	農業に従事している者	12月13～14日 (2日)	17名

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
(e)トラクタの操作技術向上	トラクタ操作に係る基本技術の修得 ①農業機械の基礎知識・効率利用 ②トラクタと作業機の構造と機能・点検整備 ③耕うん作業	農業に従事している者	11月26日～30日 (5日)	4名

### c 農作業安全推進研修

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
(a)推進者育成研修 i 第1回	①農業機械の構造と事故発生のメカニズム ②高齢者の農作業事故 ③トラクタの転倒事故体験 ④管理機による農作業事故	市町村職員、JA職員、普及指導員等	7月4～5日 (2日)	6名
ii 第2回			8月29～30日 (2日)	
(b)現地で学ぶ農作業安全 i 第1回(会津若松市)	①農作業安全 ②農業機械の安全な取り扱い	農業者等	6月5日 (1日)	154名
ii 第2回(石川町)			9月13日 (1日)	30名

### (エ)施設利用研修

#### a 農産加工研修

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
施設利用	①米粉を使った粕餅加工	農産物加工者連絡協議会	4月17日 (1日)	6名
	②加工活動の基礎	石川町中谷まちづくり委員会女性部	5月21日 (1日)	3名
	③米粉を使ったパン加工	会津農林高校食品加工科	6月8日 (1日)	5名
	④米粉を使った菓子・麺加工	会津農林高校食品加工科	6月22日 (1日)	5名
	⑤納豆の加工技術	(株)元気村	6月25日 (1日)	1名
	⑥米粉を使った加工品開発	農園やいこばあちゃん	7月23日 (1日)	2名
	⑦ピクルスの加工技術	農園やいこばあちゃん	8月27日 (1日)	2名
	⑧保存技術及び食品衛生	農産物加工者連絡協議会	8月29日 (1日)	17名
	⑨野菜を使った加工	農産物加工者連絡協議会	10月18日 (1日)	15名
	⑩デントコーンの製粉	NPO東北農業支援ネットワーク	10月22日 (1日)	2名
	⑪ブドウの乾燥	伊藤農園	10月29日 (1日)	3名
	⑫野菜を使ったソース加工	田村地方農産物加工研究会	11月14日 (1日)	9名
	⑬米粉パン用の製粉	パン工房mana	11月21日 (1日)	1名
	⑭米粉菓子の加工技術	農園やいこばあちゃん	11月22日 (1日)	2名
	⑮きな粉の加工	オーチャード斉藤	1月10日 (1日)	3名
	⑯ジャムの加工	6次化創業塾	1月11日 (1日)	34名
	⑰米粉パンの加工	6次化創業塾	1月25日 (1日)	34名
	⑱イチゴの有効活用	伊達市めぐみの会	1月30日 (1日)	5名
	⑲大豆の加工品開発	(株)国際米流通センター	2月19日 (1日)	5名

b 農業機械研修

名 称	主な内容	対象者	開催期間(日数)	受講者数
施設利用	①刈払機・管理機研修	農業者	5月17日 (1日)	1名
	②農作業安全研修	喜多方市大木農事組合	6月16日 (3日)	14名
	③農作業安全研修	田村地方農業士会	6月18日 (1日)	15名
	④トラクタけん引免許取得	農業者	11月19日～21日 (1日)	3名

## 2 研修生・講習生の受け入れ

福島県農林水産試験場等研修生受入れ要綱、農業総合センター講習生受入れ要綱及び福島県インターンシップ実施要綱に従い研修生等の受け入れを行った。

### (1) 研修生の受け入れ

受入部所	氏名	期間	派遣研修団体
畜産研究所	柳沼日佳里	8月8日～8月10日	新潟大学（農学部）
畜産研究所	佐藤茉美	8月22日～8月24日	岩手大学（農学部）

### (2) 講習生の受け入れ

受入部所	氏名	期間
果樹研究所	中村孝雄	4月9日～ 3月18日
果樹研究所	安齋直樹	4月9日～ 3月18日
果樹研究所	栗原拓也	4月9日～ 3月18日
作物園芸部	宮崎和志	4月13日、6月14日、11月28～29日(延べ4日間)

### (3) インターンシップの受け入れ

受入部所	氏名	期間	派遣研修団体
企画経営部	萩野里香	9月18日～9月28日	福島大学（人文社会学群経済経営学類）



## V 食の安全・環境にやさしい農業支援

1 安全農業推進部の取り組み

(1) 指導・有機認証課の業務

ア 農薬に関する業務

(ア) 農薬販売届の受理

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
18	180	22	1,178

(イ) 農薬販売者立入検査

立入検査延べ数	注意指導票による指導実件数						改善済み実件数
	販売の制限、禁止	虚偽宣伝等の禁止	販売所の届出	帳簿の備え付け	指導延べ件数計		
371	44	0	0	14	31	45	44

(ウ) 主な農薬適正使用指導記録

月 日	内 容	対象者数
7月24日	農薬危害防止中央講習会	200
8月 2日	〃	172
11月28日	農薬適正使用アドバイザー認定研修	61
12月6,7日	農薬管理指導士認定・更新研修	36
12月18日	農薬適正使用アドバイザー認定研修	82
2月22日	農薬販売協会・農薬適正使用講習会	15
3月11日	ゴルフ場農薬安全使用責任者講習会	65

(エ) ゴルフ場の検査・指導

農薬使用実績に基づく適正使用確認件数	48件(9件は休業)
内、指導した件数(延べ数)	63件(農薬使用基準遵守)
立入検査の実施	5件

(オ) 航空防除(無人ヘリコプター)に関する指導

防除実施面積：6,944ha(水稻6,152ha(放射性セシウム吸収抑制用資材散布等も含む)、大豆669ha、麦104ha、ソバ20ha)
事故発生状況：なし
指導対応状況：防除実施者等に対し、周辺住民等への事前情報提供、飛散防止、作業事故防止等について文書で周知し、併せてホームページに安全対策等の情報を掲載した。

(カ) 病害虫防除指針掲載農薬登録変更内容の確認とホームページによる周知

防除指針掲載農薬の登録内容変更に関する情報	12回
防除指針掲載農薬の使用制限に関する情報	7回

(キ) 農薬流通量調査

平成23年10月から平成24年9月までの期間(平成24農薬年度)を対象に、農薬卸売業者及びホームセンターから、農薬販売量の報告を求め、県内の流通量を取りまとめた。

イ 農作物の野生鳥獣被害とりまとめ

総被害面積	346.48 ha
総被害金額	117,926 千円(鳥害29,911千円、獣害88,015千円)

ウ 肥料に関する業務

(ア) 知事登録普通肥料 登録・届出受理

新規登録	登録更新	変更届出	失効届出
2	5	8	2

(イ) 指定配合肥料届出受理

新規届出	変更届出	廃止届出
2	2	0

(ウ) 特殊肥料生産・輸入届出受理

生産業者届出	変更届出	廃止届出
21	21	19

(エ) 肥料販売業務開始届出受理

新規届出	変更届出	廃止届出	有効届出数
31	48	24	1,439

(オ) 肥料生産・販売事業場立入検査

立入検査件数	収去・分析	主な検査・指導事項
60	17	表示票、譲渡記録、届出内容、重量検査(製造業者)、内容成分(収去肥料)

(カ) 肥料入荷量調査

調査対象期間は、平成23年6月から平成24年5月までとした。

総入荷量は95,843 t で、前年比85%であった。肥料の種類ごとの入荷量は以下のとおり。

(t)

窒素質	りん酸質	加里質	複 合	石灰質	有機質	その他
4,342	4,556	11,432	58,356	11,619	4,849	689

石灰質はケイ酸質肥料を含む

(キ) 肥料生産数量調査

平成24年1月から12月までの1年間を対象に特殊肥料等の生産数量を調査しとりまとめた。

	知事登録肥料	指定配合肥料	特殊肥料	特殊輸入肥料
事業者数	32(18)	10(6)	708(416)	7(2)
銘柄数	47(26)	60(17)	803(470)	17(4)
生産数量	63,642 t	851 t	190,528 t	242 t

( )内は生産実績があるもの

(ク) たい肥の放射性セシウムの検査

東京電力福島第一原発事故に伴い、たい肥の放射性セシウムの検査を行った。検査は、(独)農林水産消費安全技術センター及びSGSジャパン(株)に依頼した。検査結果は以下のとおり。

項 目	牛ふんたい肥
400Bq/kg超 (出荷・施用自粛)	317 (19%)
400Bq/kg以下 (出荷・施用可)	1,334 (81%)
計	1,661

エ 飼料に関する業務

(ア) 飼料販売届出受理

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
3	14	4	133

(イ) 飼料添加物販売届出受理

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
1	6	1	38

(ウ) 飼料製造・販売事業者立入検査

立入検査件数	収去・分析	主な検査・指導事項
32	1	表示票、帳簿、BSE対応ガイドライン、有害物ガイドライン及び食品残渣ガイドラインの策定及び遵守状況。 栄養性及び安全性(収去飼料)、地域流通飼料の肉骨粉の鑑定(収去飼料)。

オ 有機認定に関する業務

(ア) 業務経過

月 日	内 容
6月19日	第1回判定委員会(認定申請3件、継続7件、臨時3件)
7月 4日	第1回認定業務講習会(受講者12名)
7月24日	認定証交付式及び研修会(認定者3件)
9月14日	格付実績及び面積報告(農水省へ)
10月 4日	第2回判定委員会(認定申請1件、継続14件、臨時2件)
10月～12月	FAMICによる実地調査の立会(10/23, 11/16, 28, 12/4、計4回)
12月 3日	第3回判定委員会(新規1件、継続5件、臨時2件)
2月 8日	登録認定機関内部監査
2月15日	第4回判定委員会(継続11件)及び第1回公平性委員会
2月20、21日	FAMICによる登録認定機関定期的調査
2月26日	認定証交付式及び研修会(認定者2件)
3月 6日	認定生産行程管理者全体研修会(参加者68名)
3月19日	第2回認定業務講習会(受講者12名)

(イ) 認定状況(平成25年4月1日現在)

申請受理件数	5件(92件)	
受理後自ら申請を取り下げた件数	0件( 2件)	
認定生産行程管理者数	5件(84件)	
認定しなかった件数	0件( 6件)	
認定を取り消した件数	0件( 1件)	
認定を自ら取り下げた件数	9件(25件)	
認定事業者数	58件(84件)	内訳 個人51件、組織7件、農家総数86戸
認定ほ場面積	9,559.1a	内訳 水田7,246.6a、畑2,042.5a、その他270.0a

( )内は業務開始からの累計

(ウ)平成23年度有機農産物格付実績

	(kg)
野菜	31,760.7
果樹	166.8
米	164,641.0
小麦	0.0
そば	2,992.5
大豆	0.0
雑穀	0.0
きのこ類	22.5
香辛料(ハーブ)	0.5
合計	199,584.0

平成24年9月 農林水産大臣へ報告

## (2) 発生予察課の業務

### ア 病害虫発生予察事業

#### (ア) 普通作物

水稲は定点11ほ場、巡回260ほ場、麦類は巡回44ほ場、大豆は巡回30ほ場において病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、予察灯3ヶ所、フェロモントラップ等12ヶ所で害虫の発生活長を調査した。

#### (イ) 果 樹

リンゴで定点8ヶ所、巡回26ヶ所、モモで定点3ヶ所、巡回15ヶ所、ナシで定点5ヶ所、巡回21ヶ所、カキは巡回7ヶ所で、病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、フェロモントラップ等32ヶ所、カメムシ越冬量調査7ヶ所で害虫の発生活長を調査した。

#### (ウ) 野菜・花き

キュウリで定点4ヶ所、巡回24ヶ所、トマトで定点3ヶ所、巡回9ヶ所、イチゴで定点4ヶ所、巡回23ヶ所、キクで定点3ヶ所、巡回10ヶ所 で、病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、フェロモントラップ16ヶ所(センター1を含む)で害虫の発生活長を調査した。

#### (エ) 情報の提供

病害虫発生予察情報を延べ14回発表し、各作物の防除対策資料として提供した。また、モモせん孔細菌病2回、ナシ黒星病2回、果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ)1回、斑点米カメムシ類(会津)1回の注意報を発表した。

ホームページに各作物の病害虫発生状況延べ43回や防除対策情報延べ26回、BLASTAM、予察灯やフェロモントラップのデータなどの防除情報を提供した。

#### (オ) 国への報告事務

病害虫発生予察現況報告(13回)、ウンカ類発生現況報告(随時)、各農作物病害虫発生面積報告(10月、3月)、その他病害虫発生情報等を報告した。

#### (カ) 病害虫防除員

農家、農協職員72名を委嘱し、予察灯やフェロモントラップの調査及び病害虫発生状況情報を定期的に収集した。また、病害虫防除員の資質向上のため2月12日に病害虫防除員研修会を開催し、併せて「作物の細菌病とその防除」という演題で、東京農業大学 農学部 植物病理学研究室 准教授 篠原弘亮氏による講演会を開催した。

## イ 病害虫診断同定

平成24年(1月1日～12月31日)の依頼件数は62件で前年並であった。

病害虫診断・同定結果：

- 病害39件(糸状菌病27、細菌病8、ウイルス病4)、
- 虫害 1件(ネコブセンチュウ1)、
- 生理障害9件、その他3件(薬害)、原因不明・検討中10件

## ウ ミバエ類等侵入警戒調査事業

諸外国から侵入の危険性の高い病害虫、チチュウカイミバエ・火傷病5ヶ所、コドリリング2ヶ所でフェロモントラップ等により侵入状況を調査した。チチュウカイミバエ及びコドリリングは、誘殺されなかった。火傷病については、リンゴ、ナシにおいて、いずれの地点においても疑わしい症状が認められなかった。

## エ ウメ輪紋ウイルス(plum pox virus)の発生状況調査

東京都のウメにおいて国内初確認されたウメ輪紋ウイルスによる病害(平成21年4月8日、東京都発表)について、本県で生産されている核果類について発生状況を調査した。

調査区域は県内30ヶ所とし、調査対象植物の栽培面積から農林事務所ごとに調査数を設定した。ほ場における調査は目視による病徴確認を行った後、病徴の有無によらず1ヶ所あたり5樹を選定し、1樹から成葉5枚以上を採取し、横浜植物防疫所に送付しウイルス検定を受けた。なお、調査にあたっては関係機関・団体の協力を得て行った。

ウメ輪紋ウイルスによる病害は目視調査で病徴が確認されたものではなく、すべての検体でウイルス検定は陰性であり、県内での発生は確認されなかった。

## オ 主要病害虫の発生状況

### (ア)水 稲

#### a いもち病

6月下旬から7月上旬にかけて曇雨天の日が多く、BLASTAMの感染好適条件の出現が頻発し、感染の機会が多くなり一部で葉いもちの目立つほ場があったが、7月9日の梅雨明け以降7月5半旬まで、感染好適条件の出現は散発的であった。7月6半旬から8月1半旬に降雨があり、上位葉への葉いもち進展が進み、中通りや会津での一部ほ場で穂いもちの発生が目立つ要因となった。しかし県全体の発生面積及び発生程度は平年並であった。

#### b 紋枯病

初発生確認時期は8月1半旬と平年より遅かったが、8月上旬から中旬及び9月上旬の高温により病勢が進展し、中通り中部や浜通り南部では発生程度の高いほ場が認められ、県全体の発生量はやや多かった。

#### c 稲こうじ病

穂ばらみ期の7月下旬を中心に降雨が続き感染の機会があったが、8月2～4半旬まで好天が続いたため、県全体の発生量はやや少なかった。

#### d ごま葉枯病

8月以降、葉の病斑が県内各地で目立つようになり、9月になると中通り南部や浜通りの常発地では上位葉まで病勢が進展したが、発生量は平年並であった。

#### e イネミズゾウムシ

5月中旬から6月の気温が全般に高かったため、6月上旬には食害程度の高いほ場が各地で散見されたが、発生量は平年並であった。

#### f イネドロオイムシ(イネクビボソハムシ)

6月下旬の被害ほ場割合は、浜通りでは高かったが、全体的には平年並であった。

#### g フタオビコヤガ(イネアオムシ)

7月上旬より各地で幼虫食害が目立ち8月には食害ほ場が増加したが、発生量は平年並であった。

#### h 斑点米カメムシ類

7月上旬の畦畔雑草すくい取り調査では、カスミカメムシ類を中心にすくい取り頭数及び発生地点割合が平年より高かったため、発生予察注意報(7/14)を発表した。8月上旬の水田内すくい取り調査では、会津でアカヒゲホソミドリカスミカメ、中通りでホソハリカメムシ、浜通りではアカスジカスミカメ及びクモヘリカメムシの発生が目立ち、県全体の発生量はやや多かった。

定点ほ場の産米における斑点米混入率は、各地方とも大半の地点で0.1%未満であったが、中通りの一部で混入率が0.7%以上の高い地点が見られた。会津及び浜通りでは、斑点米混入率が0.1～0.3%以上となったところがそれぞれ1地点ずつ見られた。

#### i ツマグロヨコバイ

8月～9月に、中通りや浜通りで発生の目立つほ場が見られ、一部で多発によるすす病の発生も認められたが、発生量はやや少なかった。

#### j イチモンジセセリ(イネツトムシ)

浜通りの青色粘着トラップ調査では、平年同様に7月以降に誘殺が認められたが、その誘殺数は平年より少なかった。8月上旬の巡回調査では、会津で微発生ほ場が多く見られたが、県全体の発生量はやや少なかった。

### (イ)ムギ類(平成23年産)

#### a 赤かび病

6月中旬の調査では、中通りや浜通り地方の各地の小麦において、平年並に発病穂が見られた。中通りや浜通りでは、小麦の出穂・開花期にあたる5月3～4半旬に降雨が続き感染に好適であった。生産団地では無人ヘリや共同防除により1～2回薬剤防除が実施されたため、発生量は平年並に抑えられたと考えられる。

#### b 雪腐病

会津では、根雪日数が90日と平年(65日)より長く本病の発生に適していたため、雪腐褐色小粒菌核病の発生が見られ、発生ほ場では葉先枯れが認められたが、株の枯死・消失は見られなかった。

(ウ) ダイズ

a 紫斑病

8月中旬～9月上旬の降水量が少なく本病の感染に不適であったため、発生量はやや少なかった。

b 吸実性カメムシ類

8月中旬及び9月中旬の調査で、会津においてホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシなどの寄生頭数が例年より多かったが、発生量は平年並であった。カメムシによる子実の被害粒割合は平年よりも少なかった。

c ハスモンヨトウ

9月中旬の調査では、浜通りで幼虫による葉の食害が散見され、発生が目立つほ場も認められたが、発生量は平年並であった。

d フタスジヒメハムシ

8月中旬の調査では、会津で例年よりも寄生が多かったが、9月中旬の調査では例年並の発生となり、子実被害粒割合はほぼ平年並であった。

e アブラムシ類

8月中旬の調査では、会津及び浜通りの一部ほ場で葉の寄生頭数が多かったが、全般的には例年並の発生であった。

(エ) リンゴ

a 斑点落葉病

中通り、会津ともに、6月から発生が確認されたが、それ以降の発生ほ場割合は平年並であった。発生程度はほとんどが少発生であったが、9～10月には一部で中発生ほ場が見られた。

b 褐斑病

新梢葉での発生確認は平年より遅い8月で、9月の発生ほ場割合は平年並であったが、10月以降に多発生ほ場が見られ、中通り南部の一部ほ場では果実での発生も確認された。

c 腐らん病

中通りの発生ほ場割合は平年並であったが、会津の発生ほ場割合は平年よりやや低かった。中通り南部では一部で多発生ほ場が見られた。

d 輪紋病

中通り、会津とも9月に発生が確認され、発生量は平年並であった。

e すず点病・すず斑病

すず点病、すず斑病とも中通り南部で発生が確認された。特にすず斑病の発生ほ場割合が平年より高く、発生程度も高かった。梅雨期や7月下旬の多雨、9月の台風による降雨など、適期防除が実施できなかったため、感染が助長されたと考えられる。

f アブラムシ類

中通り北部では発生ほ場割合が5月に平年より高くなったが、6月には平年並となった。全般的には発生量は平年並であった。

(オ) モモ

a せん孔細菌病

伊達地域では春型枝病斑の発生が5月上旬から確認された。5月下旬には福島地域でも春型枝病斑の発生が確認され、両地域とも発生ほ場割合が高かったため、発生予察注意報(6/3)を発表した。新梢葉での発生は福島地域では7月下旬に確認したが、発生量は平年並であった。伊達地域では6月上旬に新梢葉での発生が確認されてから、発生ほ場割合が平年よりやや高く推移し、9月下旬には平年並となったが、発生程度が甚ほ場も一部で見られた。果実での発生は福島地域では8月下旬に晩生種の一部で確認されたが、伊達地域では6月下旬に確認されてから継続して見つかかり、8月下旬の晩生種では平年より発生ほ場割合が高くなった。前年の秋雨や秋期防除の遅れ、5月下旬や梅雨期の6月下旬の降水量が多かったことにより、病勢が進展したと考えられる。

b ハダニ類

クワオオハダニの寄生は福島地域では6月に確認され、8～9月には発生ほ場割合が平年より高くなり、一部では発生程度の高いほ場が見られた。伊達地域では7～9月に発生が確認され、発生ほ場割合は概ね平年より高く推移し、一部では発生程度の高いほ場も見られた。リンゴハダニ及びナミハダニの寄生は確認されなかった。



(カ) ナシ

a 黒星病

新梢葉での発生は各地方とも6月下旬から確認され、中通りでは7～8月に発生ほ場割合が高くなったが、その後はほぼ平年並となり発生程度も低く推移した。浜通りでは8月下旬以降に発生ほ場割合が平年より高くなり、一部では発生程度の高いほ場も見られた。果実での発生は中通りでは8月下旬(「幸水」)には平年より低い発生ほ場割合であったが、浜通りでは平年より高く、一部で発生程度の高いほ場があった。9月上旬(「豊水」)には各地方とも平年並～やや少ない発生ほ場割合であったが、浜通りでは発生が中程度であった。

b ハダニ類

リンゴハダニの発生は中通り南部と浜通りの一部で8月にのみ確認されたが、発生程度は低かった。ナミハダニの発生は各地方とも確認されなかった。クワオオハダニの発生は中通り北部で7月、浜通りでは6月及び8～9月に確認された。

(キ) カキ

a 円星落葉病

ほとんどの調査ほ場で発生が確認されたが平年よりもやや少ない発生状況であった。発生には地域間差があり会津美里町で発病葉率の高い園地が多い傾向にあった。

(ク) 夏秋トマト

a 葉かび病・すすかび病

栽培期間を通して発生ほ場割合は平年より低かった。葉かび病抵抗性品種の作付割合が増加してきたため発生が少なくなってきたと考えられる一方、葉かび病抵抗性品種を侵す葉かび病菌のレースが確認されている。葉かび病に病徴の類似したすすかび病の発生も増加してきている。

b 灰色かび病

8～9月の発生ほ場割合が平年よりやや高く発病株率もやや高かった。7月以降高温が続いたことで例年よりかん水が多く必要となり、施設内の湿度が高く経過した結果、発生が助長されたと考えられる。

(ケ) 夏秋キュウリ

a ベと病

6月から発生が確認されたが、7月以降の発生ほ場割合はやや高く、8月には発生程度の高いほ場も多くなった。7月以降の高温及び7～9月の降雨が発生に好適であったため、平年よりやや多い発生になったと考えられる。

b うどんこ病

5月から発生が確認されたが、7月以降の発生ほ場割合はほぼ平年並となった。5月下旬の低温で6月の発生は抑えられたが、7月以降の高温により発生は平年並になったと考えられる。

c 炭疽病

8月以降に発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや高かった。7月下旬及び9月の降雨が多かったため8月以降の発生が多くなったと考えられる。

d 褐斑病

7月の発生ほ場割合は低かったが、8月にほぼ平年並の発生となり、9月には平年よりやや高くなった。5～7月中旬まで小雨に経過したため6～7月の発生は抑制されたが、7月下旬及び9月の降雨が多かったため9月の発生が平年よりやや多くなったと考えられる。

e つる枯病

7月から発生が確認され、8月以降の発生ほ場割合は平年よりやや高かった。7～9月が高温で経過し、7月下旬及び9月の降雨が多かったため、8月以降の発生がやや多くなったと考えられる。

(コ) 冬春キュウリ(平成23年冬作)

a ベと病

3月から発生が確認され、5～6月の発生ほ場割合は平年よりやや高かった。5月中旬の高温と多雨により発生が助長され、発生がやや多くなったと考えられる。

b うどんこ病

4月上旬から発生が確認されたが、発生量は平年並であった。

c ハダニ類

栽培期間を通じて発生が確認されたが、発生量は平年並であった。

(サ)イチゴ(平成23年冬作)

a うどんこ病

発病果の発生ほ場割合は、平年よりやや低く経過したが、5月には発生程度の高いほ場が散見された。3～5月にかけての気温がやや低く経過したため、平年よりやや少ない発生になったと考えられる。

b 炭疽病・萎黄病

定植直後から発生が確認され、両病害が混発しているほ場も見られた。近年、発生が増加傾向にあるが、育苗段階で感染したものが定植後に発病して広がっているものと考えられる。

c コナジラミ類

栽培期間を通じて発生が認められたが、発生量はほぼ平年並であった。

d アザミウマ類

花での寄生は1月から確認され、3～5月における寄生花率のほ場割合はやや高く推移した。2月及び4月以降の気温がやや高く経過したことから、発生量が多くなったと考えられる。

e ハダニ類

栽培期間を通じて発生が認められたが、発生量は概ね平年並であった。

(シ)キク

a アブラムシ類

5月から寄生が確認され、その発生ほ場割合はやや高かったが、6月以降の発生量はほぼ平年並であった。

b ハダニ類

7月以降に寄生が確認されたが、発生量は平年よりやや低く推移した。6月以降が高温・少雨で経過したため7月に発生が確認されるようになったが、適切な防除により8月以降の発生が抑制されたものと考えられる。

c タバコガ類(オオタバコガ)

6月下旬から寄生が確認され、7～8月の発生ほ場割合は平年より高く、例年被害の少ない盆咲きの品種でも被害が認められた。6月以降の気温が平年よりやや高く経過したため、発生時期が平年よりやや早まったと考えられる。また、7～8月の高温、乾燥傾向がタバコガ類の増殖を助長したものと考えられる。

d アザミウマ類

5月の発生ほ場割合がやや高かったが、6月以降は平年並の発生量であった。4月上旬及び5月中旬の高温により5月の発生が助長されたが、7月下旬～8月上旬の低温・多雨により発生が抑制されたため、7月以降の発生量が平年並になったと考えられる。

(3)分析課の業務

ア 分析課の体制

平成23年3月に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う農林水産物の緊急時環境放射線モニタリングを実施するため、平成23年9月1日に安全農業推進部内に分析課が設置された。平成24年度は昨年度に引き続き、ゲルマニウム半導体検出器10台により課長以下職員16名で業務を実施した。

イ 農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査

災害対策基本法及び原子力災害対策特別措置法等に基づき農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査を実施した。分析課は、主務課が作成したサンプリング計画に基づき農林事務所等が採取した試料の放射能(放射性セシウム)を分析し、検査結果をオフサイトセンター及び環境保全農業課を通して主務課に報告した。環境保全農業課が発表した農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング実施状況は表1のとおりである。

表1 農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング実施状況(平成24年度)

平成25年4月30日現在  
福島県環境保全農業課

食品群	品目数	検査件数													基準値 超過件数	基準値 以下件数
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計		
玄米	1	0	0	0	0	1,880	5,586	22,715	3,970	1,158	0	0	0	35,309	71	35,238
穀類(玄米除く)	9	0	0	0	45	97	73	572	644	645	80	11	12	2,179	10	2,169
野菜・果実	258	692	736	1,006	1,149	945	691	867	673	220	131	96	65	7,271	7	7,264
原乳	1	40	45	36	36	45	32	40	32	32	39	32	32	441	0	441
肉類	5	573	546	556	492	498	561	470	540	571	447	440	616	6,310	0	6,310
鶏卵	1	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	144	0	144
牧草・飼料作物	-	0	103	347	102	196	249	422	251	37	5	0	0	1,712	48	1,664
水産物	165	504	560	559	556	626	516	524	629	588	564	617	673	6,916	879	6,037
山菜・きのこ	66	132	310	55	38	31	97	295	123	16	14	21	48	1,180	90	1,090
その他	3	0	0	36	6	0	2	18	5	1	1	0	0	69	1	68
合計		1,953	2,312	2,607	2,436	4,330	7,819	25,935	6,879	3,280	1,293	1,229	1,458	61,531	1,106	60,425

- (※) 食品衛生法における食品の基準値(セシウム134、セシウム137の合算値)：一般食品 100Bq/kg、牛乳 50Bq/kg。
- (※) 米は、食品衛生法の経過措置により、平成24年9月30日までは、暫定規制値500Bq/kg(セシウム134、セシウム137の合算値)が適用される。
- (※) 牛肉は、食品衛生法の経過措置により、平成24年9月30日までは、暫定規制値500Bq/kg(セシウム134、セシウム137の合算値)が適用される。  
平成24年4月1日から9月30日までに100Bq/kgを超過し、500Bq/kg以下であった件数は2件。
- (※) 大豆は、食品衛生法の経過措置により、平成24年12月31日までは、暫定規制値500Bq/kg(セシウム134、セシウム137の合算値)が適用される。  
平成24年4月1日から12月30日までに100Bq/kgを超過し、500Bq/kg以下であった件数は15件。
- (※) 海藻の取扱い：平成23年度の検査結果では野菜として集計したが、平成24年度は品目別試料採取基準に従い水産物として集計した。

ウ その他

農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査以外に、放射能分析を表2のとおり実施した。

表2 農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査以外の調査点数(平成24年度)

食品群	検査件数												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
米	0	0	0	0	205	2	54	14	12	0	0	0	287
穀類(米除く)	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4
野菜・果実	38	219	364	257	145	194	332	89	120	23	3	2	1,786
原乳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	8
肉類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鶏卵	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
牧草・飼料作物	56	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	63	120
水産物	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
山菜・きのこ	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
その他	4	0	5	1	0	1	0	3	2	0	2	1	19
合計	113	220	369	258	350	197	387	110	134	31	5	66	2,240

## 2 有機農業推進室の業務実績

### (1) 有機推進担当連携会議の開催

有機農業の技術確立、普及を目的とした各方部有機推進担当者による連携会議を3回開催し、技術実証ほの運営及び有機農業に寄与する研修会等の推進戦略を検討した。

第1回(4月17日) 平成24年度実証ほ関連事業の内容周知と実証ほ設置及びオーガニック通信の発行について協議した。

第2回(7月3日) 実証ほの設置の進捗状況とオーガニック通信の発行に関する検討等をおこなった。

第3回(11月20日) 実証ほの進捗状況、本年度事業の周知、事業の確認と検討、及び県内有機農業者の状況についての情報交換を行った。

### (2) 各種技術研修会等の開催

新規参入者に対する支援セミナー、有機農業技術セミナー及び技術実演会等を開催して有機農業者の技術的支援を行った。

ア 有機農業における6次産業化の先進的な経営形態や栽培技術、有機農産物の流通・販売や加工等に関する知識習得するための先進地視察研修(12月6~7日 17名参加 埼玉県本庄市、児玉郡)

イ 有機農産物の流通・販売に関する知識習得を支援し、有機農産物等を取り扱う流通企業との交流の機会を得るためのセミナー(3月13日 35名参加、ビッグパレット)

### (3) 有機農業者組織への活動支援

ア オーガニックふくしま安達の活動に対する支援

6月14日 役員会、5月20日 棉苗定植作業体験、7月3日 現地ほ場巡回(目揃い会)、10月21日 綿花摘み取り体験、12月20日 出荷反省会、3月1日 平成25年度出荷計画検討会及び平成24年度総会

イ 福島県有機農業ネットワーク主催の各種研修会等に対する開催支援

11月3日 シンポジウム「有機農業の原点」開催支援(農業総合センター)

12月15日 技術・加工連続セミナー 第1回「有機稲作技術の到達点と課題」(農業総合センター)

1月26日 同 第2回「有機栽培による果菜づくり」(二本松市市民交流センター)

3月23日 同 第3回「農家のエネルギー自給」(喜多方市大和川酒造北方風土資料館)

ウ 二本松有機農業研究会の活動に対する支援

2月8日 福島百年未来塾の開講・講演(農業総合センター)

### (4) 一般講演会、視察対応

センターにおける有機農業関連の視察 1回(JA岩手ふるさと15名)に対応した。

### (5) 有機農産物販売促進支援

有機農産物販売促進活動を農業総合センターまつり(有機農産物販売)と東京方面で実施した。

(4/21-22 東京都 Earth Day Tokyo 2012、11/13 東京都 産業労使秋祭り)

### (6) 新規有機農業者の就農支援

有機農業推進室が独自に受けた新規有機就農相談は2件であった。

### (7) 広報誌「オーガニック通信」の発行

有機農業推進のための各種情報を掲載した広報誌を6回発行した。

第1号(5月29日発行) 190部

第2号(7月25日発行) 210部

第3号(8月31日発行) 200部

第4号(11月6日発行) 220部

第5号(1月10日発行) 220部

第6号(3月27日発行) 220部

(8) 農業総合センター農業短期大学校での有機農業の講義・研修の実施

6月から7月にかけて7回、本科2学年の学生に行った。研究科の学生に対して9月に1回実施した。また、就農体験研修を6名に対して6月から10月にかけて計5回行った。



## VI 県民との交流・情報発信

1 交流事業

(1) 第7回福島県農業総合センターまつり

ア 開催期間 10月20日(土)～21日(日)

イ 入場者数 742人(20日)、762人(21日)、計1,504人

ウ 主な内容 試験研究成果展(放射線対策・一般試験研究等)、放射性物質に関する講演会、研究成果セミナー、農業技術相談、生産物直売展、地域6次化推進(試食)・体験コーナー、地産地消直売展他

※ 東日本大震災の影響により、昨年度に引き続き例年より時期を遅らせ本部会場のみで実施した。

(2) 各種セミナー

ア 農的楽しみセミナー(趣味の園芸講座)

東日本大震災の影響により、昨年度に引き続き開催を見合わせた。

イ 子どもアグリ科学教室

回	月 日	内 容	講 師	参加人数
1	7月26日(木)	手作りこんにやくに挑戦!	平山孝 他	23
2	8月 2日(木)	米粉でピザを作ろう!	鵜浦成子 他	22
3	8月 9日(木)	身近な昆虫を観察しよう!	三田村敏正 他	19
4	8月23日(木)	「天のつぶ」でおにぎりを作ろう!	佐久間秀明 他	21

(3) 田んぼの学校

東日本大震災の影響により、昨年度に引き続き開催を見合わせた。

(4) 視察見学者の受け入れ状況

月	本 部		果樹研究所		畜産研究所		会津地域研究所		浜地域研究所	
	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数
4月	3( 2)	30	0( 0)	0	0( 0)	0	0( 0)	0	0( 0)	0
5月	11( 4)	188	1( 0)	30	1( 1)	14	0( 0)	0	0( 0)	0
6月	26( 9)	556	1( 0)	20	1( 0)	10	3( 2)	20	0( 0)	0
7月	25( 8)	626	11( 8)	114	1( 0)	6	5( 0)	76	1( 0)	13
8月	13( 8)	177	10( 10)	82	2( 2)	2	2( 1)	35	0( 0)	0
9月	16( 3)	398	9( 4)	119	1( 0)	2	1( 0)	9	0( 0)	0
10月	12( 5)	313	4( 0)	70	1( 1)	6	2( 1)	49	0( 0)	0
11月	16( 7)	424	3( 2)	40	0( 0)	0	3( 2)	20	0( 0)	0
12月	11( 5)	211	1( 1)	15	1( 0)	8	0( 0)	0	1( 0)	10
1月	8( 2)	187	3( 1)	34	0( 0)	0	0( 0)	0	0( 0)	0
2月	12( 7)	147	0( 0)	0	1( 0)	19	0( 0)	0	0( 0)	0
3月	7( 2)	127	0( 0)	0	3( 1)	52	0( 0)	0	0( 0)	0
合計	160(62)	3,384	43(26)	524	12( 5)	119	16( 6)	209	2( 0)	23

( )は県外団体の内数。人数は個人見学者と団体見学者の合計。畜産研究所は養鶏分場、沼尻分場を含む。



## 2 施設の利用状況

### (1) 多目的ホール、大会議室

#### ア 件数及び利用者数

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	5	1,730	10	790	12	955	27	3,475
5月	9	840	11	880	15	1,660	35	3,380
6月	12	1,360	20	1,882	16	1,330	48	4,572
7月	8	470	16	1,509	22	1,963	46	3,942
8月	3	375	12	1,390	16	2,070	31	3,835
9月	8	1,000	19	1,830	20	1,650	47	4,480
10月	6	500	15	1,280	10	860	31	2,640
11月	5	470	7	780	14	1,135	26	2,385
12月	3	160	11	951	13	895	27	2,006
1月	0	0	3	470	11	835	14	1,305
2月	8	670	15	1,610	10	765	33	3,045
3月	6	565	16	1,330	6	380	28	2,275
合計	73	8,140	155	14,702	165	14,498	393	37,340

#### イ 会場別（多目的ホール）

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	4	1,650	5	540	4	600	13	2,790
5月	5	400	3	450	9	1,290	17	2,140
6月	8	1,240	9	1,220	7	820	24	3,280
7月	5	330	6	760	12	1,398	23	2,488
8月	2	350	8	1,170	8	1,580	18	3,100
9月	4	820	10	1,310	11	1,240	25	3,370
10月	5	440	8	920	4	520	17	1,880
11月	2	350	6	740	8	770	16	1,860
12月	0	0	5	661	6	585	11	1,246
1月	0	0	2	390	5	510	7	900
2月	5	540	11	1,320	5	530	21	2,390
3月	2	350	8	960	3	270	13	1,580
合計	42	6,470	81	10,441	82	10,113	205	27,024

#### ウ 会場別（大会議室）

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	1	80	5	250	8	355	14	685
5月	4	440	8	430	6	370	18	1,240
6月	4	120	11	662	9	510	24	1,292
7月	3	140	10	749	10	565	23	1,454
8月	1	25	4	220	8	490	13	735
9月	4	180	9	520	9	410	22	1,110
10月	1	60	7	360	6	340	14	760
11月	3	120	1	40	6	365	10	525
12月	3	160	6	290	7	310	16	760
1月	0	0	1	80	6	325	7	405
2月	3	130	4	290	5	235	12	655
3月	4	215	8	370	3	110	15	695
合計	31	1,670	74	4,261	83	4,385	188	10,316

### (2) 開放実験室

(利用申請件数)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
数	1	0	2	0	2	0	14	26	19	7	5	2	78

### (3) 図書室

#### ア 受入れ書籍類

項目	冊数
図書類	107冊
雑誌類	229冊
資料類	312冊

#### イ 県民開架室入室者数及び県民貸出冊数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入室者数	5	2	0	3	4	1	1	0	1	0	1	0	18
貸出冊数	39	33	35	6	2	18	27	25	23	13	7	6	234

県民利用者登録数 160名

### 3 試験研究成果発表会

#### (1) 農業総合センター研究成果発表会

ア 日時 平成25年3月12日 10:00～15:30

イ 場所 本部多目的ホール

ウ 参集範囲 生産者、生産団体、消費者、民間企業、関係機関等

エ 参加者数 155名

オ 内容

(ア) 口頭発表 11課題(一般課題6、放射性物質対策課題5)

(イ) ポスター発表 80課題(一般課題40、放射性物質対策課題40)

#### (2) 農業総合センター果樹研究所研究成果発表会

ア 日時 平成25年2月28日 9:30～16:00

イ 場所 福島県農協会館1001会議室

ウ 参集範囲 生産者、生産団体、消費者、民間企業、関係機関等

エ 参加者数 115名

オ 内容

(ア) 口頭発表 23課題(一般課題10、放射性物質対策課題13)

(イ) ポスター発表 20課題(一般課題10、放射性物質対策課題10)

#### (3) 農業総合センター畜産研究所研究成果発表会

ア 日時 平成25年3月8日 9:30～15:30

イ 場所 ふくしま自治研修センター講堂

ウ 参集範囲 生産者、生産団体、消費者、民間企業、関係機関等

エ 参加者数 174名

オ 内容

(ア) 口頭発表 17課題(一般課題5、放射性物質対策課題12)

(イ) ポスター発表 18課題(一般課題7、放射性物質対策課題13)

(ウ) シンポジウム「畜産における放射性物質の除去・低減技術等に関するシンポジウム」(主催:福島県、社団法人 畜産技術協会)

#### (4) 農業総合センター会津方部研究成果発表会

ア 日時 平成25年3月4日 13:30～16:00

イ 場所 会津大学中講義室

ウ 参集範囲 生産者、生産団体、消費者、民間企業、関係機関等

エ 参加者数 63名

オ 内容

(ア) 口頭発表 5課題(一般課題5)

(イ)ポスター発表 20課題(一般課題12、放射性物質対策課題8)

(5)農業総合センター相双方部研究成果発表会

ア 日時 平成25年3月6日13:15～16:00

イ 場所 相馬市コミュニティセンター会議室

ウ 参集範囲 生産者、生産団体、消費者、民間企業、関係機関等

エ 参加者数 30名

オ 内容

(ア)口頭発表 7課題(一般課題4、放射性物質対策課題3)

(イ)ポスター発表 24課題(一般課題12、放射性物質対策課題12)

(6)農業総合センターいわき方部研究成果発表会

ア 日時 平成25年3月13日13:15～16:00

イ 場所 JAIいわき市本店大会議室

ウ 参集範囲 生産者、生産団体、消費者、民間企業、関係機関等

エ 参加者数 35名

オ 内容

(ア)口頭発表 7課題(一般課題4、放射性物質対策課題3)

(イ)ポスター発表 20課題(一般課題10、放射性物質対策課題10)

4 農業分野における放射性物質試験研究成果説明会

(1)第1回

ア 日時 平成24年8月9日 13:30-16:00

イ 場所 農業総合センター多目的ホール

ウ 参加者数 130名

オ 内容

(ア)口頭発表 11課題(水稲でのカリウム施用の効果について他)

(2)第2回

ア 日時 平成24年10月29日 13:30-16:00

イ 場所 農業総合センター多目的ホール

ウ 参加者数 160名

オ 内容

(ア)口頭発表 13課題(肉用牛における筋肉中放射性セシウム濃度の尿からの推定他)

(3)第3回

ア 日時 平成25年2月20日 13:30-15:30

イ 場所 農業総合センター多目的ホール

ウ 参加者数 130名

オ 内容

(ア)口頭発表 16課題(放射性セシウムは樹皮から吸収される他)

5 研究成果の発表

(1) 学会等研究発表

所属	発表者	課題名	学会名等	年月
企画	古川茂樹・新妻俊栄・野中章久・小野洋	消費者調査による国産なたね油（压榨法）の受容価格と生産条件	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発（農地・農作物）	環境放射能除染研究発表会	2012. 5
生産	齋藤隆・大越聡・藤村重人・岩淵幸治・齋藤正明・根本知明・佐藤睦人・佐藤誠・吉岡邦雄	福島県内の現地ほ場における玄米中の放射性セシウム吸収抑制技術の開発（第1報）	日本土壌肥料学会東北支部大会	2012. 7
生産	山田真孝・松木伸浩・佐久間祐樹	背部黒点米は斑点米カメムシ類の加害によるものではない	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	山田真孝・皆川博孝・齋藤伸考	食酢の茎葉散布はイネ葉いもちに対して防除効果がない	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	岸 正広・佐久間祐樹・松木伸浩・三田村敏正	水田畦畔の植生とイネミズゾウムシ成虫密度との関係について	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	三田村敏正・松木伸浩	福島県におけるダイズ害虫ウコンノメイガの発生推移	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	常盤秀夫	ブロッコリー育苗中の食塩水灌水と定植時少量灌水による活着促進	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	荒川昭弘・三田村敏正・岡崎一博	シュンギクに寄生するハクサイダニに対する各種薬剤の効果	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	宍戸邦明・鈴木洋平	ブロッコリー黒すす病に対する各種殺菌剤の防除効果	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	根本知明・小野勇治・藤村恵人・二瓶直登・鈴木安和・佐藤睦人	土壌中の放射性セシウムの簡易測定法の改良	東北農業試験研究発表会	2012. 8
生産	齋藤正明・菊地幹之・松波寿弥	ネギにおける窒素施用法の違いによる環境負荷低減効果の検証	東北農業試験研究発表会	2012. 8

所属	発表者	課題名	学会名等	年月
生産	大越 聡・佐藤睦人・武田容枝・三浦吉則	転換後7年目の有機栽培野菜畑における窒素の動態	東北農業試験研究発表会	2012.8
生産	丹治克男・円谷聡・二瓶直登	小麦「ゆきちから」の出穂期追肥の施用と品質向上効果	東北農業試験研究発表会	2012.8
生産	丹治克男・関澤春仁・遠藤あかり	小麦の製粉加工と放射性セシウムの動態	東北農業試験研究発表会	2012.8
生産	星絵吏子・山下慎司	篩下米を利用した米粉の性質と製パン性	東北農業試験研究発表会	2012.8
生産	関澤春仁・山下慎司・小野美代子・後藤裕子・一条晶恵・丹治克男	果実の加工と放射性物質の動態	東北農業試験研究発表会	2012.8
生産	関澤春仁・生田和史・錫谷達夫	ブルーベリー類の抗インフルエンザウイルス作用	東北農業試験研究発表会	2012.8
生産	丹治克男・関澤春仁	あんぼ柿加工による放射性セシウムの動態	園芸学会東北支部会	2012.8
生産	関澤春仁・山下慎司	放射性セシウムを含むリンゴジュースに対するゼオライトの影響	日本食品科学工学会	2012.8
生産	根本知明・小野勇治・藤村恵人・二瓶直登・二階堂英行・鈴木安和	福島県内の農地における放射性物質に関する研究（第1報）-土壤中の放射性セシウムの簡易測定法	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
生産	齋藤隆・大越聡・赤塚康雄・名倉明夫・山口紀子・牧野知之・吉岡邦雄	福島県内の農地における放射性物質に関する研究（第5報）-各種吸着資材を用いた放射性セシウム吸着能の評価法-	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
生産	齋藤正明・藤村恵人・鈴木安和・江口哲也・加藤直人	福島県内の農地における放射性物質に関する研究（第7報）-土壌群の違いによる作物の放射性セシウムの吸収	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
生産	岩淵幸治・関澤春仁	福島県内の農地における放射性物質に関する研究（第9報）-ブルーベリー園における表面施用樹木チップの放射性セシウムの除去効果	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
生産	佐野智人・仁科一哉・大浦典子・須藤重人・大越聡・佐藤睦人他	有機質資材の排出係数算にむけて（第2報）全国 10 県の農業試験場における亜酸化窒素発生量定評価	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9

所属	発表者	課題名	学会名等	年月
生産	齋藤隆・大谷卓・清家伸康・岡崎正規	ズッキーニによる土壌残留ディルドリンのファイトレメディエーション	園芸学会秋季大会	2012.9
生産	山下慎司・関澤春仁・丹治克男・村松康行	切り干し大根の放射性による二次汚染とその原因	園芸学会秋季大会	2012.9
生産	丹治克男・関澤春仁	大豆の加工に伴う放射性セシウム濃度の動態	日本作物学会	2012.9
生産	Takashi SAITO, Satoru OHKOSHI, Shigeto FUJIMURA, Koji IWABUCHI, Masaaki SAITO, Tomoaki NEMOTO, Mutsuto SATO, Makoto SATO, Kunio YOSHIOKA, Hirofumi TSUKADA	Effect of potassium application on root uptake of radiocesium in rice	International Symposium on Environmental monitoring and dose estimation of residents after accident of TEPCO's Fukushima Daiichi Nuclear Power Stations	2012.12
生産	荒川昭弘・三田村敏正・常盤秀夫	シュンギクの花サイダニによる被害と防除	北日本病害虫研究発表会	2013.2
生産	三田村敏正・岸正広	ウコンノメイガ幼虫に寄生するシヘンチュウのイラクサ科群落における生態	北日本病害虫研究発表会	2013.2
生産	岸正広・藤村恵人・松木伸浩・常盤秀夫	温暖化条件下におけるアカスジカスミカメ発生盛期とイネ出穂期との関係	北日本病害虫研究発表会	2013.2
生産	三田村敏正・荒川昭弘・上遠野富士夫	福島県におけるユキヤナギハマキフシダニの発生生態	日本応用動物昆虫学会大会	2013.3
生産	岸正広・松木伸浩・三田村敏正	水稲の成苗移植栽培でイネミズゾウムシの成虫密度が収量に及ぼす影響	日本応用動物昆虫学会大会	2013.3
生産	宍戸邦明・山田真孝・永坂厚	キュウリホモプシス根腐病の土壌汚染程度がメロン用苗, カボチャ台キュウリの被害に及ぼす影響	日本植物病理学会大会	2013.3
生産	齋藤隆・高橋和平	福島県内の現地ほ場(淡色黒ボク土)における放射性物質の水平分布と各種野菜の放射性Cs吸収特性の解明(第2報)	園芸学会春季大会	2013.3
生産	佐野智人・仁科一哉・大浦典子・須藤重人・大越聡・佐藤睦人他	有機質資材を施用した農耕地における一酸化二窒素の排出係数の算定	日本生態学会全国大会	2013.3

所属	発表者	課題名	学会名等	年月
生産	佐野智人・仁科一哉・大浦典子・須藤重人・大越聡・佐藤睦人他	Estimation of emission factors for organic fertilizer-induced N <sub>2</sub> O emissions from Japanese agricultural soils	農業気象国際シンポジウム ISAM 2012	2013.3
生産	関澤春仁・山下慎司・丹治克男	農産物の加工と放射性物質の動態 (第2報)	園芸学会春季大会	2013.3
生産	山下慎司・星絵吏子	グルテンフリー米粉食パンの開発ー製粉方法・品種が製パン性へ及ぼす影響ー	日本作物学会	2013.3
生産	丹治克男・関澤春仁・山下慎司	漬物加工における米ぬかからの放射性セシウムの移行率	日本作物学会	2013.3
作物	渡邊洋一・佐藤弘一・渡邊真・吉田直史・佐久間秀明	育苗箱を利用したイネ低温出芽性の検定法と「ちゅらひかり/Arroz de terra」組換え自殖系統の検定	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	鈴木芳成・松野香子・佐久間秀明	有用遺伝資源 (アスパラガス、リンドウ、カラー) の培養物による長期保存技術	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	藤田智博・佐久間祐樹	高温年次における窒素追肥時期が生育と品質に及ぼす影響	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	佐久間祐樹・山田真孝・松木伸浩	背部黒点米の発生にお及ぼす品種間差と登熟温度	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	鈴木幸雄・藤田智博・肥田野善隆・朽木靖之・濱名健雄	水稻新品種「天のつぶ」の特性と栽培法第2報夏季気象と玄米品質	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	佐藤誠・藤村恵人・藤田智博・鈴木幸雄・佐久間祐樹・大和田正幸	粒厚歩合別及び穂上着生部位別玄米の放射性セシウム濃度	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	平山孝	放射性セシウムのコンニャクイモへの移行と製粉加工における動態	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	伊東かおる・二階堂英行・佐藤正武・加藤義明・佐藤睦人・佐久間秀明	無加温ハウスを利用した12月～3月どりレタス新作型開発	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	齊藤誠一・雨宮潤子・武藤健男・加藤義明	無加温ハウスを活用したコマツナ栽培の経営的評価	東北農業試験研究発表会	2012.8

所属	発表者	課題名	学会名等	年月
作物	矢島豊	リンドウの定植苗へのジベレリン処理効果に及ぼす降雨の影響	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	矢島豊・山口繁雄・宗方宏之	採花後の残茎管理がリンドウの生育と開花に及ぼす影響	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	宗方宏之・鈴木宏和・山口繁雄	夜間変温管理がトルコギキョウの開花時期と切り花品質に及ぼす影響	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	鈴木安和・大河内栄・鈴木宏和	ユキヤナギの株入れ促成における低温遭遇およびエテホン剤処理による落葉・開花促進技術	東北農業試験研究発表会	2012.8
作物	鈴木安和・鈴木宏和	テープ状赤色LEDの電照方法によるキクの開花抑制効果	園芸学会東北支部大会	2012.8
作物	矢島豊・宗方宏之・丹治克男	アザミウマ類と訪花昆虫の活動がリンドウ切り花の花持ちに及ぼす影響	園芸学会東北支部大会	2012.8
作物	佐藤誠・藤村恵人・藤田智博・鈴木幸雄・佐久間祐樹・大和田正幸	玄米と稲わら、もみ殻及び第5節間との放射性セシウム濃度の相関関係	日本作物学会東北支部会	2012.8
作物	小野勇治・田野井慶太郎・吉田直史・佐藤弘一・佐久間秀明・中西友子・根本圭介	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第3報)ー水稻の放射性セシウム吸収に関する品種間差の影響ー	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
作物	佐藤誠・藤村恵人・藤田智博・鈴木幸雄・佐久間祐樹・大和田正幸	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第2報) 水稻における部位別放射性セシウムの解析	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
作物	藤村恵人・吉岡邦雄・齋藤隆・佐藤睦人・佐藤誠・佐久間祐樹	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第4報) イネにおけるカリウムおよび吸着資材施用による放射性セシウムの吸収抑制	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
作物	小林智之	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第8報) 野菜類における放射性セシウムの移行係数	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
作物	鈴木安和・佐藤睦人・川本徹	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第6報) 黒ボク土における吸着資材の添加による放射性セシウムの吸収抑制効果	日本土壌肥料学会鳥取大会	2012.9
作物	藤村恵人・吉岡邦雄・齋藤隆・佐藤睦人・佐藤誠・佐久間祐樹・大野剛・村松康行	玄米中放射性セシウム濃度の推定および土壌からの吸収リスクの作付け前診断	日本作物学会第234回講演会	2012.9



所属	発表者	課題名	学会名等	年月
作物	佐藤誠・藤村恵人・ 藤田智博・鈴木幸 雄・佐久間祐樹・大 和田正幸	精米歩合及び炊飯米の放射性セシウム の解析	日本作物学会第234回講演 会	2012.9
作物	平山孝・鈴木安和・ 齋藤隆・佐藤睦人	ヒマワリ栽培による土壌の放射性セシ ウムに対するファイトメディエーショ ン効果の検証	日本作物学会第234回講演 会	2012.9
作物	Shigeto FUJIMURA, Yasukazu SUZUKI, Takeshi OHNO, Yasuyuki MURAMATSU, Hirofumi TSUKADA, Kunio YOSHIOKA, Takashi SAITO, Mutsuto SATO, Makoto SATO, Yuuki SAKUMA	Use of rice seedlings to estimate uptake of radiocesium from soil to plants in Fukushima Prefecture	International Symposium on Environmental monitoring and dose estimation of residents after accident of TEPCO's Fukushima Daiichi Nuclear Power Stations	2012.12
作物	Yasukazu SUZUKI, Takasi SAITO, Hirofumi TSUKADA	Phytoremediation of radiocesium in different soils using cultivated plants	International Symposium on Environmental monitoring and dose estimation of residents after accident of TEPCO's Fukushima Daiichi Nuclear Power Stations	2012.12
作物	矢島豊・鈴木安和・ 宗方宏之・矢吹隆夫	気温上昇が福島県におけるリンドウの 生育および休眠打破に及ぼす影響	園芸学会春季大会	2013.3
作物	鈴木安和・宗方宏 之・矢島豊・矢吹隆 夫	夏秋咲き小ギクの電照時間帯の違いに よる生育及び開花期に及ぼす影響	園芸学会春季大会	2013.3
作物	平山孝・慶徳庄司・ 吉岡邦雄	ナタネにおける土壌の放射性セシウム吸 収の時期別推移	日本作物学会第235回講演 会	2013.3
果樹	瀧田克典・佐々木正 剛・星博綱	福島県県北地方のモモに寄生するクロ シロカイガラムシ属の優占種と防除法	東北農業試験研究発表会	2012.8
果樹	星博綱・佐々木正 剛・瀧田克典	リンゴのヒメボクトウに対する昆虫病 原性線虫剤の防除効果	東北農業試験研究発表会	2012.8
果樹	瀧田克典・佐々木正 剛・星博綱	モモ園に発生するカブリダニ類に対す る薬剤系統別の影響	北日本病害虫研究発表会	2013.2
果樹	佐々木正剛・瀧田克 典・星博綱	モモ芯折れ被害新梢によるナンヒメシ ンクイの発生予察手法	北日本病害虫研究発表会	2013.2

所属	発表者	課題名	学会名等	年月
果樹	星博綱・佐々木正剛・瀧田克典	福島県におけるリンゴのヒメボクトウ防除対策	北日本病害虫研究発表会	2013. 2
果樹	柳沼久美子・佐野真知子・三瓶尚子・藤田剛輝	福島県におけるナシ黒星病防除適否判断指標の策定	北日本病害虫研究発表会 (ポスター発表)	2013. 2
果樹	星博綱・佐々木正剛・瀧田克典	ヒメボクトウに対する性フェロモン剤の小面積処理による交信かく乱効果	日本応用動物昆虫学会	2013. 3
畜産	佐藤妙子・白石芳雄・高橋秀彰	新大型会津地鶏におけるCCKAR遺伝子の増体への効果	福島県獣医畜産技術総合研究発表会	2012. 7
畜産	内田守譜	肉用牛における筋肉中放射性セシウム濃度の血液からの推定	福島県獣医畜産技術総合研究発表会	2012. 7
畜産	生沼英之・矢内清恭・松山裕城・宮地慎	泌乳牛におけるゼオライトとベントナイトの放射性セシウム吸収抑制効果	東北農業試験研究発表会	2012. 8
畜産	大西彩香	大型しゃもの近交退化に関する中間評価	東北農業試験研究発表会	2012. 8
畜産	吉田安宏・松澤保・武藤健司	飼料用トウモロコシの生育ステージ別放射性セシウム濃度の推移	東北農業試験研究発表会	2012. 8
畜産	荻野隆明・鈴木庄一・國分洋一・高萩眞彦	放射性物質低濃度汚染環境下における肉用繁殖牛の放牧利用	東北農業試験研究発表会	2012. 8
畜産	齋藤美緒・山本みどり・矢内清恭・小田康典	デジタル糖度計を利用した分娩前乳汁Brix値による乳房炎予察と治療	東北畜産学会	2012. 8
畜産	遠藤幸洋・松澤保・吉田安宏・武藤健司	牧草地における放射性セシウムの垂直分布と耕うんによる吸収抑制	東北畜産学会	2012. 8
畜産	宮野英喜・佐藤茂次	汚染土を摂取した肉用鶏における放射性セシウムの挙動	東北畜産学会	2012. 8
畜産	佐藤妙子・白石芳雄・高橋秀彰	コレシストキニンA受容体遺伝子の大型会津地鶏体重への効果	日本産業動物獣医学会	2012. 10

所属	発表者	課題名	学会名等	年月
畜産	内田守譜	肉用牛における筋肉中放射性セシウム濃度の血液からの推定	日本産業動物獣医学会	2012.10
畜産	京谷隆侍・西牧由佳・宮本拓平・丹治敏夫	肥育後期豚への籾米の給与が生産性と肉質に及ぼす影響	日本養豚学会	2012.10
会津	肥田野善隆	水稲新品種「天のつぶ」の特性と栽培法 第1報 施肥法	東北農業試験研究発表会	2012.8
会津	大竹真紀	会津地域におけるシュッコンカスミノウの無加温電照5月切り栽培	東北農業試験研究発表会	2012.8
会津	大竹真紀	ゴボウ栽培におけるアスパラガス廃棄根のすき込みによるキタネグサレセンチュウの抑制効果	東北農業試験研究発表会	2012.8
浜	江上宗信・常盤秀夫・朽木靖之・佐々木園子・渡邊仁司	東北地域太平洋沖地震による海水浸入及び土砂流入被害調査	東北農業試験研究発表会	2012.8
浜	渡邊仁司・常盤秀夫・木幡由美子	浜通り平坦部におけるスプレーストックの春彼岸向け無加温栽培	東北農業試験研究発表会	2012.8

## (2) シンポジウム等講演

所属	講演者	演題	シンポジウム等	年月
生産	常盤秀夫	福島県における放射性物質による野菜生産への影響と、福島県農業総合センターの試験研究の取り組みについて	土葉会第292回例会「東日本大震災被害に何ができるか! Part2」	2012. 7
生産	吉岡邦雄	畜産物・農産物所線の実態と対策	岩手大学農学部附属動物医学食品安全教育研究センター第10回研修会	2012. 8
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターにおける放射性物質対策試験研究の成果について	園芸学会東北支部 平成24年度公開シンポジウム	2012. 8
生産	吉岡邦雄	農業総合センターにおける放射性物質除去低減技術の研究・開発の取り組み	ふくしま食と農の再生シンポジウム	2012. 11
生産	齋藤 隆	福島県内の農地における放射性セシウムの分布と農作物の放射性セシウム低減対策	第215回生存圏シンポジウム 第二回東日本大震災以後の福島県の状況及び支援の取り組みについて	2012. 11
生産	宍戸邦明	生物検定による被害リスク推定技術の構築	「被害リスクに応じたウリ科野菜ホモプシス根腐病の総合防除技術の確立」成果発表会	2012. 12
生産	佐藤睦人	福島県の放射性物質に対する研究の取組み	産技連・地質関係合同研究会	2012. 12
生産	齋藤 隆	福島県内の農地における放射性セシウムの分布と農作物の放射性セシウム低減対策	北農研所内セミナー 放射能事故後の福島県における試験研究の取組み	2012. 12
生産	根本 知明	福島県内の農地における放射性セシウムの分布と土壌簡易測定法の開発	北農研所内セミナー 放射能事故後の福島県における試験研究の取組み	2012. 12
生産	吉岡邦雄	水稻の放射性物質低減試験及び技術対策について	みらいを築く豊かな伊達の大地への復興～飛躍する伊達地域の米づくり講演会	2013. 1
生産	岩淵 幸治	福島県における寒冷地果樹土壌肥料分野の研究の現状	寒冷地果樹研究会	2013. 2
生産	吉岡邦雄	最新の研究成果等紹介	農業と放射性物質に係る講演会	2013. 3
作物	平山孝	菜種に対する放射性物質の影響	全国菜の花サミットinふくしま	2012. 4

所属	講演者	演題	シンポジウム等	年月
作物	佐藤誠	水稲における放射性セシウムの吸収解明と低減対策	第3回放射能の農畜産物等への影響についての研究報告会	2012.5
作物	伊東かおる	福島県における放射性物質による農作物の被害の現状と福島県農業総合センターの対策試験研究の取り組みについて	園芸学会平成24年度秋季大会公開シンポジウム	2012.9
作物	平山孝	福島県におけるナタネ栽培の現状と課題	全国菜の花学会・楽会in東近江	2012.11
作物	遠藤あかり	田畑輪換を活用した有機栽培技術と現地農家の取り組み	農研機構「有機農業体系研究プロジェクト」技術研究会	2012.11
作物	藤村恵人	イネによる放射性セシウム吸収に関する研究	第215回生存圏シンポジウム	2012.11
作物	小林智之	トマト栽培におけるIPMの取り組み	日本バイオリジカルコントロール協議会講演会、第5回環境保全型農業シンポジウム	2012.11
作物	原 有	キュウリ台木と土壌pH改良資材の組み合わせによる被害緩和技術の開発	新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業成果発表会「被害リスクに応じたウリ科野菜ホモプシス根腐病の総合防除技術の確立」	2012.12
果樹	斎藤祐一・増子俊明・野上紀恵・勝又治男・永山宏一	会津地域におけるブルーベリーの無加温ハウス栽培	園芸学会東北支部	2012.8
果樹	額田光彦	‘ラ・フランス’の収穫適期と追熟条件の検討	園芸学会東北支部	2012.8
果樹	阿部和博	茶・果樹の放射性セシウム汚染に関する対策技術開発の現状「福島県における果樹の放射能汚染低減対策」	農研機構シンポジウム	2012.11
果樹	瀧田克典・佐々木正剛・星博綱	モモ栽培における土着天敵類を活用したハダニ類管理技術の開発	落葉果樹研究会	2013.2
果樹	星博綱	福島県におけるヒメボクトウ防除の試み	寒冷地果樹研究会	2013.2
果樹	阿部和博・佐藤守・湯田美菜子・瀧田克典・味戸裕幸	休眠期に汚染されたカキの葉中および果実中放射性セシウムの挙動および樹体除染処理効果の検証	園芸学会度春季大会	2013.3

所属	講演者	演題	シンポジウム等	年月
果樹	湯田美菜子・佐藤守・阿部和博・額田光彦・斎藤祐一・山口奈々子・瀧田克典・味戸裕幸	落葉果樹における部位別放射性セシウム濃度の経年変化と除染の効果	園芸学会春季大会	2013.3
果樹	阿部和博・佐藤守・湯田美菜子・瀧田克典・味戸裕幸	休眠期に汚染されたカキの葉中および果実中放射性セシウムの挙動および樹体除染処理効果の検証	園芸学会春季大会	2013.3
果樹	阿部和博	モモ作業性の良い樹形構成と樹形モデルの考え方	長野地域果樹生産振興研修会（基調講演）	2013.3
畜産	遠藤孝悦	福島県における放射性物質除去・低減、吸収抑制技術開発の研究	全国畜産関係場所長会研修会	2012.6
畜産	遠藤孝悦	福島県における放射性物質除去・低減吸収抑制技術開発の試験研究	岩手県畜産技術連盟主催研修会	2012.9
畜産	生沼英之	泌乳牛におけるゼオライトとベントナイトの放射性セシウムの吸収抑制効果	岐阜県獣医師会 獣医学術研修会（被災動物）	2012.10
畜産	吉田安宏	飼料作物における放射性セシウムの低減技術の開発	岩手大学FAMS生産科学セミナー「放射線の基礎と畜産への影響」	2012.11
畜産	生沼英之	泌乳牛におけるゼオライトとベントナイトの放射性セシウムの吸収抑制効果～2011、2012年の研究レポート～	岩手大学FAMS生産科学セミナー「放射線の基礎と畜産への影響」	2012.11
畜産	遠藤孝悦	福島県における放射性物質除去・低減吸収抑制技術開発の試験研究	畜産システム研究会第26回大会シンポジウム	2012.11
畜産	遠藤孝悦	福島県の畜産分野における放射性物質除去・低減、吸収抑制技術の開発研究	帯広畜産大学公開講座 福島復興シンポジウム	2013.1
畜産	武藤健司	牧草、飼料作物生産における放射性物質吸収抑制技術について	帯広畜産大学公開講座 福島復興シンポジウム	2013.1
畜産	生沼英之	乳牛におけるゼオライトとベントナイトの放射性セシウム吸収抑制効果	帯広畜産大学公開講座 福島復興シンポジウム	2013.1
畜産	生沼英之	粗飼料から生乳への放射性セシウムの移行抑制技術	畜産における放射性物質の除去・低減技術等に関するシンポジウム（(社)畜産技術協会主催）	2013.3

所属	講演者	演題	シンポジウム等	年月
会津	真部 武	福島県「会津のかおり」生産性の向上	東北ソバフォーラム（東北ソバ研究会）	2012.9
安全	武地誠一	県産農林水産物の放射性セシウム濃度	郡山女子大学市民フォーラム「環境中の放射線とその影響」	2013.2

## (3)学会誌等投稿

所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
企画	半杭真一	地元育成品種による農産物ブランド化の可能性ー福島県育成イチゴ品種を対象としてー	農村経済研究	30(2)1-9	2012.8
企画	半杭真一	イチゴにおける品種のネーミングと品種活用方策に関する研究	農業経営研究	50(3)1-16	2012.12
企画	古川茂樹・新妻俊栄・野中章久・小野洋	消費者調査による国産なたね油(圧搾法)の受容価格と生産条件	東北農業研究	65.207-208	2012.12
生産	Takashi SAITO, Takashi OTANI, Nobuyasu SEIKE and Masanori OKAZAKI	A comparison of dieldrin residues in various vegetable crops cultivated in a contaminated field	Soil Science and Plant Nutrition	58.373-383	2012.6
生産	根本知明	土壌中の放射性セシウムの簡易測定法	Proceedings of the 13th Workshop on Environmental Radioactivity	61-64	2012.6
生産	Kimura, Kameya, Nei, Kakihara, Hagiwara, Okadome, Tanji, Todoriki, Matsukura and Kawamoto	Dynamics of Radioactive Cesium ( $^{134}\text{Cs}$ plus $^{137}\text{Cs}$ ) during the Milling of Contaminated Japanese Wheat Cultivars and during the Cooking of Udon Noodles Made from Wheat Flour	Journal of Food Protection	75.10.1823-1828	2012.10
生産	山田真孝・松木伸浩・佐久間祐樹	背部黒点米は斑点米カメムシ類の加害によるものではない	東北農業研究	65.29-30	2012.12
生産	山田真孝・皆川博孝・齋藤伸考	食酢の茎葉散布はイネ葉いもちに対して防除効果がない	東北農業研究	65.31-32	2012.12
生産	岸 正広・佐久間祐樹・松木伸浩・三田村敏正	水田畦畔の植生とイネミズゴケ成虫密度との関係について	東北農業研究	65.33-34	2012.12
生産	三田村敏正・松木伸浩	福島県におけるダイズ害虫ウコンノメイガの発生推移	東北農業研究	65.79-80	2012.12
生産	常盤秀夫	ブロッコリー育苗中の食塩水灌水と定植時少量灌水による活着促進	東北農業研究	65.133-134	2012.12
生産	荒川昭弘・三田村敏正・岡崎一博	シュンギクに寄生するハクサイダニに対する各種薬剤の効果	東北農業研究	65.143-144	2012.12
生産	宍戸邦明・鈴木洋平	ブロッコリー黒すす病に対する各種殺菌剤の防除効果	東北農業研究	65.145-146	2012.12



所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
生産	根本知明・小野勇治・藤村恵人・二瓶直登・鈴木安和・佐藤睦人	土壌中の放射性セシウムの簡易測定法の改良	東北農業研究	65. 25-26	2012. 12
生産	齋藤正明・菊地幹之・松波寿弥	ネギにおける窒素施用法の違いによる環境負荷低減効果の検証	東北農業研究	65. 147-148	2012. 12
生産	大越 聡・佐藤睦人・武田容枝・三浦吉則	転換後7年目の有機栽培野菜畑における窒素の動態	東北農業研究	65. 149-150	2012. 12
生産	丹治克男・円谷聡・二瓶直登	小麦「ゆきちから」の出穂期追肥の施用と品質向上効果	東北農業研究	65. 67-68	2012. 12
生産	丹治克男・関澤春仁・遠藤あかり	小麦の製粉加工と放射性セシウムの動態	東北農業研究	65. 193-194	2012. 12
生産	星絵吏子・山下慎司	篩下米を利用した米粉の性質と製パン性	東北農業研究	65. 191-192	2012. 12
生産	関澤春仁・山下慎司・小野美代子・後藤裕子・一条晶恵・丹治克男	果実の加工と放射性物質の動態	東北農業研究	65. 195-196	2012. 12
生産	関澤春仁・生田和史・錫谷達夫	ブルーベリー類の抗インフルエンザウイルス作用	東北農業研究	65. 197-198	2012. 12
生産	Takashi SAITO, Satoru OHKOSHI, Shigeto FUJIMURA, Koji IWABUCHI, Masaaki SAITO, Tomoaki NEMOTO, Mutsuto SATO, Makoto SATO, Kunio YOSHIOKA, Hirofumi TSUKADA	Effect of potassium application on root uptake of radiocesium in rice	Proceedings of International Symposium on Environmental monitoring and dose estimation of residents after accident of TEPCO's Fukushima Daiichi Nuclear Power Stations	165-169	2012. 12
生産	Haruhito Sekizawa, Kazufumi Ikuta, Katsumi Mizuta, Seiichi Takechi, Tatsuo Suzutani	Relationship between polyphenol content and anti-influenza viral effects of berries	Journal of the Science of Food and Agriculture	Online Version of Record published before inclusion in an issue	2013. 1
生産	山田真孝・鈴木洋平・岡崎一博・小泉信三	イネの穂いもち発病程度の簡易調査法の検討	北日本病害虫研報	63 : 17-21	2013. 2

所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
生産	三田村敏正・荒川昭弘・岸正広・山田真孝・岡崎一博	水中ライトトラップを利用した水田の水生昆虫調査	北日本病害虫研報	63:150-156	2013.2
生産	三田村敏正・荒川昭弘・岸正広・山田真孝・岡崎一博	福島県の水田における農業に有用な生物多様性の指標及び評価手法の開発	福島県農業総合センター研究報告	5.43-61	2013.3
作物	小林智之・常盤秀夫・加藤義明・村松康行・大野剛	福島県内の土壌で栽培した野菜類における放射性セシウムの移行係数	第13回環境放射能研究会 Proceedings	160-163	2012.6
作物	佐藤誠・藤村恵人・藤田智博・鈴木幸雄・佐久間祐樹・大和田正幸	玄米と稲わら、もみ殻及び第5節間との放射性セシウム濃度の相関関係	日本作物学会東北支部会報	55.65-66	2012.12
作物	渡邊洋一・佐藤弘一・渡邊真・吉田直史・佐久間秀明	育苗箱を利用したイネ低温出芽性の検定法と「ちゅらひかり/Arroz de terra」組換自殖系統の検定	東北農業研究	65.3-4	2012.12
作物	鈴木芳成・松野香子・佐久間秀明	有用遺伝資源(アスパラガス、リンドウ、カラー)の培養物による長期保存技術	東北農業研究	65.167-168	2012.12
作物	藤田智博・佐久間祐樹	高温年次における窒素追肥時期が生育と品質に及ぼす影響	東北農業研究	65.15-16	2012.12
作物	佐久間祐樹・山田真孝・松木伸浩	背部黒点米の発生にお及ぼす品種間差と登熟温度	東北農業研究	65.17-18	2012.12
作物	鈴木幸雄・藤田智博・肥田野善隆・朽木靖之・濱名健雄	水稲新品種「天のつぶ」の特性と栽培法 第2報夏季気象と玄米品質	東北農業研究	65.21-22	2012.12
作物	佐藤誠・藤村恵人・藤田智博・鈴木幸雄・佐久間祐樹・大和田正幸	粒厚歩合別及び穂上着生部位別玄米の放射性セシウム濃度	東北農業研究	65.23-24	2012.12
作物	平山孝	放射性セシウムのコンニャクイモへの移行と製粉加工における動態	東北農業研究	65.8-9	2012.12
作物	伊東かおる・二階堂英行・佐藤正武・加藤義明・佐藤睦人・佐久間秀明	無加温ハウスを利用した12月～3月どりレタス新作型開発	東北農業研究	65.163-164	2012.12
作物	齊藤誠一・雨宮潤子・武藤健男・加藤義明	無加温ハウスを活用したコマツナ栽培の経営的評価	東北農業研究	65.165-166	2012.12

所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
作物	矢島豊	リンドウの定植苗へのジベレリン処理効果に及ぼす降雨の影響	東北農業研究	65. 169-170	2012. 12
作物	矢島豊・山口繁雄・宗方宏之	採花後の残茎管理がリンドウの生育と開花に及ぼす影響	東北農業研究	65. 171-172	2012. 12
作物	宗方宏之・鈴木宏和・山口繁雄	夜間変温管理がトルコギキョウの開花時期と切り花品質に及ぼす影響	東北農業研究	65. 179-180	2012. 12
作物	鈴木宏和・大河内栄・鈴木宏和	ユキヤナギの株入れ促成における低温遭遇およびエテホン剤処理による落葉・開花促進技術	東北農業研究	65. 181-182	2012. 12
作物	Shigeto FUJIMURA, Yasukazu SUZUKI, Takeshi OHNO, Yasuyuki MURAMATSU, Hirofumi TSUKADA, Kunio YOSHIOKA, Takashi SAITO, Mutsuto SATO, Makoto SATO, Yuuki SAKUMA	Use of rice seedlings to estimate uptake of radiocesium from soil to plants in Fukushima Prefecture	Proceedings of International Symposium on Environmental monitoring and dose estimation of residents after accident of TEPCO's Fukushima Daiichi Nuclear Power Stations	146-149	2012. 12
作物	Yasukazu SUZUKI, Takashi SAITO, Hirofumi TSUKADA	Phytoremediation of radiocesium in different soils using cultivated plants	Proceedings of International Symposium on Environmental monitoring and dose estimation of residents after accident of TEPCO's Fukushima Daiichi Nuclear Power Stations	170-173	2012. 12
作物	福田秀之・遠山芳弘・大河内栄・野田正浩・遠藤亮子・諏訪理恵子	リンドウ新品種「ふくしまほのか」の育成	福島県農業総合センター研究報告	5. 11-16	2013. 3
作物	佐藤誠・藤村恵人・藤田智博・鈴木幸雄・佐久間祐樹・大和田正幸	水稲及び玄米における放射性セシウムの分布と炊飯による放射性セシウム濃度変化	福島県農業総合センター研究報告	5. 1-10	2013. 3
作物	矢島豊・鈴木宏和・山口繁雄・宗方宏之・矢吹隆夫	リンドウの花弁に発生する着色不良症状の発生要因と対策の方向性	福島県農業総合センター研究報告	5. 29-42	2013. 3
果樹	三瓶尚子・柳沼久美子・菅野英二	モモ果実赤点病菌の生育温度及び分生胞子飛散時期と気温の関係（講演要旨）	北日本病害虫研究会報	63. 251	2012. 12

所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
果樹	佐々木正剛・星博綱 ・瀧田克典	モモにおけるナシヒメシンクイのバンドトラップによる発生調査法（講演要旨）	北日本病害虫研究会報	63. 266	2012. 12
果樹	瀧田克典・佐々木正剛・星博綱	福島県北地方のモモに寄生するクワシロカイガラムシ属の優占種と防除法	東北農業研究	65. 113-114	2012. 12
果樹	星博綱・佐々木正剛・瀧田克典	リンゴのヒメボクトウに対する昆虫病原性線虫剤の防除効果	東北農業研究	65. 115-116	2012. 12
果樹	斎藤祐一・野上紀恵・勝又治男・永山宏一・増子俊明・関澤春仁	会津地域の観光ブルーベリー園に適する品種構成	福島県農業総合センター研究報告	5. 17-28	2013. 3
畜産	吉田安宏・松澤保・武藤健司	飼料用トウモロコシの生育ステージ別放射性セシウム濃度の推移	東北農業研究	65. 85-86	2012. 12
畜産	荻野隆明・鈴木庄一・國分洋一・高萩眞彦	放射性物質低濃度汚染環境下における肉用繁殖牛の放牧利用	東北農業研究	65. 87-88	2012. 12
畜産	生沼英之・矢内清恭・松山裕城・宮地慎	泌乳牛におけるゼオライトとベントナイトの放射性セシウム吸収抑制効果	東北農業研究	65. 89-90	2012. 12
畜産	大西彩香・佐藤妙子・宮野英喜・佐藤茂次	大型しゃもの近交退化に関する中間評価	東北農業研究	65. 91-92	2012. 12
畜産	遠藤孝悦	東日本大震災及び原発事故に伴う福島県内の畜産の被害状況とその対策	東北畜産学会報特集	62(3) 50-56	2013. 2
畜産	遠藤孝悦	福島県における畜産分野の放射性物質除去・低減、吸収抑制技術開発の試験研究	畜産システム研究会報	36. 7-16	2013. 2
会津	大竹真紀・芳賀紀之	ゴボウ栽培におけるアスパラガス廃棄根のすき込みによるキタネグサレセンチュウ抑制効果	東北農業研究	65. 135-136	2012. 12
会津	大竹真紀・鈴木宏和・江川孝二	会津地域における無加温ハウスでのシュコンカスミソウ5月収穫のための定植時期と電照の効果	東北農業研究	65. 187-188	2012. 12
浜	江上宗信・常盤秀夫・朽木靖之・佐々木園子・渡邊仁司	東北地域太平洋沖地震による海水浸入及び土砂流入被害調査	東北農業研究	65. 27-28	2012. 12
浜	渡邊仁司・常盤秀夫・木幡由美子	浜通り平坦部におけるスプレーストックの春彼岸向け無加温栽培	東北農業研究	65. 189-190	2012. 12

## (4) 雑誌等投稿

所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
生産	佐藤睦人	真空処理によるイチゴのワタアブラムシ及びハダニ防除	植物防疫2012	66(5)31-34	2012.5
生産	佐藤睦人	農業及び土壌の放射性物質汚染対策技術国際シンポジウム印象記	日本アイソトープ協会 ISOTOPE NEWS	700.26-27	2012.8
生産	荒川昭弘	研究の現場から	農薬グラフ	183.10	2012.9
生産	吉岡邦雄	福島県農業総合センターの放射性物質対策研究の取組	農業	1563.21-32	2012.9
生産	吉岡邦雄	放射性下降物の農畜水産物等への影 2. 福島県農業総合センターの取り組み	化学と生物	50(9)663-667	2012.9
生産	佐藤睦人	福島県における放射性物質に対する取組みー農地の放射性物質調査からー	日本土壌協会 土作りとエコ農業	44.19-23	2012.10
生産	佐藤睦人	福島県の農耕地土壌の実態	全国農耕地土壌ガイドブック	34-35	2012.11
生産	佐藤睦人	福島県における作物と土壌の汚染	日本学術会議 学術の動向	2012(10)17-21	2012.11
作物	藤村恵人・柳沼利和・佐久間祐樹・佐藤睦人・田野井慶太郎・中西友子	福島県の水田におけるリャグレーダを用いた表土剥離による放射性物質の除去効果	RADIOISOTOPES	61(6)327-330	2012.6
作物	宗方宏之	カンパニユラ・メジュームの効率的な電照栽培法	現代農業	91(6)194-197	2012.6
作物	宗方宏之	第58回全日本花卉品種審査会(ユーストマ・季咲き)を開催	施設と園芸	160.25	2012.11
作物	藤村恵人・吉岡邦雄・齋藤隆・佐藤睦人・佐藤誠・佐久間祐樹・村松康行	Effects of Applying Potassium, Zeolite and Vermiculite on the Radiocesium Uptake by Rice Plants Grown in Paddy Field Soils Collected from Fukushima Prefecture.	Plant Production Science	16(2)166-170	2013.3

所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
果樹	阿部和博	モモの省力型高生産樹形の確立	果実日本	67(8)65-68	2012.8
畜産	齋藤美緒	分娩前の乳汁で「乳房炎になりやすい牛」がわかる	DairyJapan	57(5)30-32	2012.4
畜産	遠藤孝悦	畜産研究所で実施してきた放射性物質除去・低減、吸収抑制技術開発の研究	福島県獣医師会会報	14(2)1-6	2012.6
畜産	遠藤孝悦	福島県の大家畜生産における放射性物質除去・低減、吸収抑制技術開発研究	食肉の科学	53(1)21-25	2012.6
畜産	遠藤孝悦	福島県における放射性物質除去・低減、吸収抑制技術の研究(畜産)	畜産技術	686.3-8	2012.7
畜産	生沼英之	泌乳牛におけるゼオライトとベントナイトの放射性セシウム吸収抑制効果	畜産技術	686.13-15	2012.7
畜産	内田守譜	肉用牛における筋肉中放射性セシウム濃度の血液からの推定	畜産技術	686.16-18	2012.7
畜産	遠藤孝悦	福島県農業総合センター畜産研究所における放射性物質対策に関する研究の取り組み	農業	1564.21-29	2012.10
畜産	京谷隆侍	飼料用米を活用した豚の飼養管理技術の開発	畜産コンサルタント	49(578)	2013.2
畜産	門屋義勝	発酵乳短期間給与による離乳子豚の発育改善	養豚の友	平成25年2月号 40-42	2013.2
畜産	生沼英之	牛乳への放射性セシウムの移行を抑制するゼオライト	リーフレット身近な畜産技術	2.6-7	2013.2
畜産	遠藤孝悦	畜産物に関する放射性物質除去・低減、吸収抑制技術開発の取り組みについて	リーフレット身近な畜産技術	3.2-5	2013.2
畜産	武藤健司	牧草への放射性セシウム吸収抑制を図るための草地更新技術	リーフレット身近な畜産技術	3.6-7	2013.2

所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
畜産	齋藤美緒	分娩前にデジタル糖度計で乳房炎の予察ができる	技術の窓	2012年版. 51	2013. 3
畜産	生沼英之	放射性物質による汚染とその対策 泌乳牛におけるゼオライトとベントナイトの放射性セシウム吸収抑制効果	農業技術体系 土壤肥料編	追録24	2013. 3
畜産	内田守譜	放射性物質による汚染とその対策 牛肉中放射性セシウム濃度の血液からの推定	農業技術体系 土壤肥料編	追録24	2013. 3
会津	山内敏美	福島県において在来種から選抜育成したそば品種「会津のかおり」の特性と栽培法	特産種苗	14. 59-62	2012. 10
会津	肥田野善隆	平成24年度雑草防除担当者研修会報告	日本植物調整剤研究会東北支部会報	48. 32	2013

6 刊行物

刊行物	発行年月	発行部数
広報誌「会津地域研究所だより」第4号	24. 5	50
広報誌「浜研通信」第4号	24. 6	30
広報誌「畜研だより」第21号	24. 7	※
広報誌「会津地域研究所だより」第5号	24. 7	50
広報誌「ラウンド農ふくしま」第21号	24. 9	1,000
広報誌「浜研通信」第5号	24.10	30
平成23年度研究成果選	24.10	※
広報誌「会津地域研究所だより」第6号	24.12	50
平成23年度農業総合センター業務年報	25. 1	※
広報誌「ラウンド農ふくしま」第22号	25. 2	※
広報誌「浜研通信」第6号	25. 2	30
農業総合センター研究報告第5号	25. 3	300
畜産研究所110周年記念誌	25. 3	50

※ 農業総合センターホームページに掲載

7 インターネットによる情報提供

農業総合センターホームページにおいて、各種技術情報、交流事業の情報等の提供を行った。

ホームページアクセス数(トップページアクセス数)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
5,589	6,411	6,271	6,390	6,030	5,346	5,993	5,364	3,846	4,294	4,632	4,656	64,822

Google Analytics分析による

ホームページアドレス <http://www4.pref.fukushima.jp/nougyou-centre/>



## 8 マスメディアによる報道

掲載・放送月日	掲載誌・番組名	報道内容(タイトル)	取材対応
5月20日	FCT ザ!鉄腕!DASH	震災避難者、福島県農業総合センター畜産研究所で臨時職員として勤務	畜産研
6月5日	福島民友(広告)	自然が農業を育む 農業が自然を育むー田畑の環境状態をチェックする方法は？	生産環境部、果樹研
6月5日	福島民友(広告)	自然が農業を育む 農業が自然を育むー地域一体の取り組みを	農業短大
6月7日	NHK はまなかあいづ TODAY	ウメ樹体の放射性物質対策	果樹研
6月19日	月刊専門料理(柴田書店)	被災地東北の食の現状を伝える 第7回 福島・宮城の果樹	果樹研
7月27日	福島民友	奥の細道(子どもアグリ科学教室)	企画経営部
7月27日	福島民報	農業短期大学校(矢吹)感激!!牛の粗飼料ロールサイレージ届く 北海道農業大学校から	農業短大
9月28日	NHK WORLD	Planting the Seeds of a Comeback	果樹研
10月31日	福島民友	おいしいねふくしま 本県オリジナル水稻品種 「天のつぶ」	作物園芸部
11月10日	FCT「ふくしまに生きる」	果樹王国 福島の再挑戦	果樹研
11月22日	読売新聞(地域面)	狩猟者激減 鳥獣被害1億円	企画経営部
12月11日	FTV、KFB ニュース	トラクタ転倒、スマホで通報	企画経営部
12月12日	福島民報、福島民友、日本農業新聞	トラクタ転倒、スマホで通報	企画経営部
1月20日	FTV うつくしま情報局	農業総合センターにおける原乳、牛肉の放射線モニタリング	安全農業推進部
2月9日	日本農業新聞	BMS9.2去勢記録 福島県の基幹種雄牛候補「高百合」	畜産研
2月9日	福島民報	基幹種雄牛に期待 県の「高百合」検定結果	畜産研
3月1日	福島民報(会津版)	質の良いコメ作りは	会津研
3月8日	福島民報(会津版)	栽培法など成果発表	会津研
3月9日	福島民報	畜産研究17件成果を発表	畜産研
3月10日	NHK サキどり	風評を乗り越える	作物園芸部
3月21日	日本農業新聞	精液配布4月から 福島県の基幹種雄牛候補「高百合」	畜産研



## VII 職員・財産

### 1 職員数

(平成24年4月1日現在)

職 種	本 部	果 樹 研 究 所	畜 産 研 究 所	養鶏分場	沼尻分場	会津地域 研 究 所	浜地域 研 究 所	農業短期 大 学 校	計
行政職	46(35)	2	2	1	1	2	1	32(29)	87(64)
研究職	72	14	19	4	3	9	6	3	130
技能労務職	26	10	19	2	8	9	4	6	84
計	144(35)	26	40	7	12	20	11	41(29)	301(64)

( )は技術職員の内数

### 2 技術・研究に関する職員研修

研 修 名	所 属・職 名	氏 名	研 修 機 関	研 修 テ ー マ	研 修 期 間
水稲用除草剤の試験方法に関する研修会	会津地域研究所 副主任研究員	肥田野善隆	日本植物調節剤研究協会	水稲除草剤の試験方法	4月25日 ～4月26日
農業者研修教育施設指導職員新任者研修	農業短期大学校 教務主任	柳田 和弘	農林水産研修つくば館	教育指導	6月25日 ～6月28日
耕地雑草の実態調査および防除対策立案のための研究手法	会津地域研究所 副主任研究員	肥田野善隆	(独)中央農業総合研究センター	難防除雑草のまん延防止のための調査研究の習得	8月22日 ～8月23日
普及指導員等研修(農政課題解決研修)	作物保護科 副主任研究員	宍戸邦明	農林水産省生産局農産部技術普及課	「野菜の難防除病害虫のIPM技術」	10月24日 ～10月26日
第188回地方審査員認定講習会	畜産研究所 副主任研究員	内田守譜	全国和牛登録協会	和牛の登録審査	11月26日 ～11月28日

### 3 施設・ほ場の面積及び飼養家畜数

#### (1)施設・ほ場の面積

区分	建物		宅 地 (ha)	田 (ha)	畑 (ha)	山 林 (ha)	原 野 (ha)	その他 (ha)
	棟数	面積(m <sup>2</sup> )						
農業総合センター			17.2	11.6	11.8	3.2	2.3	9.5
交流棟	1	2,594.49						
管理研究・実験棟	1	7,039.93						
付属施設(建物)	32	7,957.01						
果樹研究所			1.9		8.1			
庁舎	1	1,680.86						
付属施設(建物)	23	3,068.56						
畜産研究所			15.4		37.9	7.9		
庁舎	1	1,166.48						
付属施設(建物)	84	15,836.53						
養鶏分場			4.2					0.4
庁舎	1	365.96						
付属施設(建物)	46	7,146.39						
沼尻分場			8.6		114.9	121.6		3.3
庁舎	1	132.68						
付属施設(建物)	24	6,416.04						
会津地域研究所			4.6	9.7	5.5			1.3
庁舎	1	2,442.59						
付属施設(建物)	25	4,694.61						
浜地域研究所			0.6	2.4	1.0			
庁舎	1	472.50						
付属施設(建物)	14	1,036.02						
農業短期大学校			5.8	5.1	23.5	9.8	3.0	5.0
校舎	1	2,002.36						
附属施設(建物)	58	18,945.54						

(2)飼養家畜数

ア 牛、豚及び馬の飼養頭数

区 分	乳用牛			肉用牛						豚				馬	計	
	経産牛	育成牛	子牛	交雑種	種雄牛	種雌牛	育成牛	直検牛	間検牛	待機牛	供卵牛	肥育牛	種雄豚	種雌豚		子肥育豚
畜産研究所	30	20	8	8	8		18		12	14	26	14	41	339	82	600
畜産研究所沼尻分場					118		50				16					184
農業短期大学校	8	1	3		10	7					13					42

イ 鶏の飼養羽数(養鶏分場)

区 分	保存鶏	育種鶏			種鶏		試験鶏		計
	純系会津鶏	ロード種P13系統	大型しゃも系統	大型会津地鶏系統	大型会津地鶏後継系統	1月餌付け	7月餌付け	会津地鶏	
成雛	427	439	325	231	501		181		2,104
育雛						893		1,288	2,181

平成24年度 福島県農業総合センター業務年報

---

平成25年8月

福島県農業総合センター

〒963-0531 福島県郡山市日和田町高倉字下中道116番地

電話 024-958-1700

FAX 024-958-1726

<http://www4.pref.fukushima.jp/nougyou-centre/>

---